

第13回京都大学全学教育シンポジウム

学士課程教育を再考する

—第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて—

報告書

2009

目 次

1. 開催の趣旨	1
2. 日程	2
3. オリエンテーション	4
4. 総長基調講演「京都大学の教育に関して」	5
5. 問題提起1（理事・副学長 西村周三）	17
6. 問題提起2（高等教育研究開発推進機構長 山本行男）	24
7. パネルディスカッション	28
8. アンケート結果について	66
9. 参加者名簿	82
（参考）部局・役職別参加者数	84

※ 部局名・職名は平成21年9月1日現在

1. 開催の趣旨

「学士課程教育においては、幅広い視野と豊かな教養を涵養する教養教育を充実するとともに、専門的基礎知識と総合的判断力並びに国際性を養う。

(中略)

以上を前提とし、各学部、研究科及び専門職大学院の教育目的と方針を踏まえて、本学の特色である「対話を根幹とした自学自習」を重視した教育活動を一層推進するため、以下の目標を定める。(後略)」

学内各部局及び各種委員会での議論を経て作成された第Ⅱ期中期目標・中期計画(案)において、京都大学は、教育に関する目標の冒頭で、このように「宣誓」した。本年度をもって終了する第Ⅰ期中期目標・中期計画期間の後、新たな出発となる第Ⅱ期中期目標・中期計画における最重要項目の1つとして、学士課程教育における教養教育の更なる充実をマニフェストに掲げたことになる。

第Ⅱ期中期目標・中期計画(案)の策定に当たり、考慮すべき重要な要素として、平成20年12月24日に発表された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」がある。タイトルが示すとおり、学士課程教育、すなわち大学教育(学位を与える課程中心の考え方、「入学」ではなく「卒業」がどのような能力を証明しているのかという観点から、「学士課程教育」という呼び方がなされている。)に焦点が当てられた本答申においては、高等教育のユニバーサル化やグローバル化等、高等教育を取り巻く環境が激変する現在において、大学教育は如何にあるべきかが問われている。単に大学を卒業したというだけではなく、学士の称号がいかなる能力を保証しているのかを社会に明示出来るような教育の質の保証が、強く求められている。

幾多の優れた人材を輩出するとともに、様々な分野で世界最高水準の研究を行っている本学の存在意義は自他共に認めるところであるが、一方で大学生の学力低下や社会常識の欠如が叫ばれている昨今、本学も決してその例外にいるとは言えない。一部の優秀な方々の名声に紛れて過大評価されるのではなく、「京都大学卒業」という称号自体がある種の名誉をもって社会に受け入れられるためには、いかに人材を育てていくか、そのためには教育はどうあるべきか、常に危機感をもって自問し続ける必要があるだろう。

本学第Ⅱ期中期目標・中期計画も中教審答申も、学士課程教育の重要性を再認識し、決して順風満帆とはいえない環境の変化の中で、より良いものにしていくための方策を示す、という点では、姿勢を一にしているといえる。優秀な可能性を秘めた人材が「勝手に」優秀な人材に育つという保証は、何処にも存在しない。教育内容の更なる充実を図ること、そしてそのためには、厳格な視点で現状を分析し、教育を再考することが必要不可欠である。

今回の全学教育シンポジウムでは、第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて、全学共通教育から始まる学士課程教育について実際の教育改善に活かすことを前提とした議論を展開したい。

【テーマ】

全体会議：学士課程教育を再考する

－第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて－

- 分科会：1. 単位の実質化等について
2. 本学における全学共通教育の在り方について
3. 初年次教育について
4. 教育の国際化について
5. 情報教育の在り方について
6. 学生生活学習支援の在り方について

2. 日程

9月24日(木)

- ・開会 オリエンテーション
- ・総長基調講演
- ・問題提起（西村周三理事・副学長、山本行男機構長）
- ・分科会討論

9月25日(金)

- ・パネルディスカッション
- ・閉会

(参考) 全学教育シンポジウム開催一覧

	日程	場所	テーマ		参加者			
			主	副(分科会テーマ)	計	教員	事務職員	
第1回	H 8. 8.28 ～8.29	比叡山国際観光ホテル	全学共通科目をめぐる	・一般教育科目の内容、学生集団の変化 ・学生への質の変化、教育上の難しい点 ・全学共通科目の具体的な問題点	・語学教育 ・教養教育とは何か	201名	185名	16名
第2回	H 9. 8.19 ～8.20	比叡山国際観光ホテル	教養教育について	・A群科目について ・C群科目について	・B・D群科目について ・人間形成と少人数セミナーについて	201名	186名	15名
第3回	H10. 8.20 ～8.21	ラフォーレ琵琶湖	学部教育から見た教養教育について	・少人数セミナーについて ・外国語教育に何を求めるのか	・理科系の教養教育と基礎科目で何をどのように教育するのか ・新しい教養教育創出に向けて	197名	182名	15名
第4回	H12. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価	特にテーマは設定せず、「京都大学における教育評価」をテーマに討論		125名	102名	23名
第5回	H13. 8.31 ～9. 1	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価 (授業評価・成績評価等)の在り方	テーマ:教育実態とその改善 ・文系から見た全学共通科目の現状 ・理系から見た人文・社会・外国語教育の在り方 ・学生による教育評価 ・ファカルティ・ディベロップメントの在り方		178名	149名	29名
第6回	H14. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	新しい教養教育の在り方—基本理念・実施機構・教育評価—	・本学基本理念の教育における実現へ向けて ・高等教育研究開発推進機構の発足とその運営 ・成績・授業評価とファカルティ・ディベロップメント(FD) ・全学共通教育のカリキュラム ・教育の達成度の評価「京都大学卒業」とはなにか		240名	207名	33名
第7回	H15. 9. 5 ～ 9. 6	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場 ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の“ミニマムリクワイアメント”をどう考えるか			240名	205名	35名
第8回	H16. 9. 9 ～9.10	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場 ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の“質の保証”とは—教育の改善と評価の視点—	・学部教育における教育の達成度とはなにか(文系学部の場合) ・学部教育における教育の達成度とはなにか(理系学部の場合) ・教養教育の質の保証とそのためのシステム—全学出動体制は可能か— ・(特別分科会)国際交流の展開による国際的人材の育成		242名	210名	32名
第9回	H17. 9. 1 ～9. 2	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場 ウエスティンホテル淡路	学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価	・学部専門教育・全学共通教育のリエンゾ:理系の場合 ・学部専門教育・全学共通教育のリエンゾ:文系の場合 ・2006年問題を視野に入れた教育課程の改善 ・学力差の拡がりについてどう対応するか ・学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて ・研究評価をどう考えるか		229名	199名	30名
第10回	H18. 9.14 ～9.15	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場 ウエスティンホテル淡路	責任ある教育体制とは何か—京都大学における教育の将来像を問う—	・研究所・センターの教育参加に向けて—教育は権利か義務か?— ・理系教育における6年一貫教育の実現は?—理系における基礎教育科目と専門科目の融合— ・文系教育におけるA群科目の意味は? ・職員の教育支援の在り方は?		240名	193名	47名
第11回	H19. 9.6 ～9.7	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場 ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の将来像を問う—第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察する—	・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—文系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る ・京都大学における英語教育の現状と課題—グローバル化社会における英語教育のあり方を探る— ・学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題—世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る—		233名	200名	33名
第12回	H19. 9.12 ～9.13	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場 ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の現状と将来を考察する—第Ⅰ期から第Ⅱ期へ向けて—	・全学共通教育の現状と課題について ・本学の教育の国際化に向けて ・教育における研究所・センターの役割について ・これからの職員の役割について		262名	211名	51名

3. オリエンテーション

中崎(教育推進部長) 第13回京都大学全学教育シンポジウムを開会させていただきます。

今年度は、第Ⅰ期中期目標期間の最終年度として、本学の第Ⅱ期中期目標計画の文部科学省での最終確定段階に入っております。このシンポジウムのテーマも、したがって「学士課程教育を再考する—第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて—」となっております。事前にお配りしております開催趣旨では、今回の全学教育シンポジウムでは、第Ⅱ期中期目標中期計画の実現に向けて、全学共通教育から始まる学士課程教育について、実際の教育改善に生かすことを前提とした議論を展開したいとしております。

参加者の皆様の積極的な議論により、実りある全学教育シンポジウムとしていただきますようよろしくお願いいたします。

また、今回から、会場を時計台記念館とその周辺といたしました。出入り自由で、周りに海はございませんが、最後までおつき合いますようよろしくお願いいたします。

それでは最初に、松本総長に基調講演をお願いしたいと思います。

4. 総長基調講演「京都大学の今を知る」

総長 松本 紘



皆さんこんにちは。全学の共通シンポジウム、第13回ということで、教育について全学を挙げて考えるシンポジウムを、長年この大学はやってまいりました。第Ⅰ期の中期目標期間は今年度で終了します。来年度から新しい中期目標計画期間に入るわけですが、その中の教育に関してじっくり考えようと、ただいま、中期目標計画を文科省とやりとりをして、一部修正をしながら仕上げていく段階にあります。

ちょうどタイミングよく、この秋に全学教育シンポジウムが開催され、よかったと思っています。ほとんどの部局から何人かは少なくとも

も参加していただいていると理解しております。

教育については、大学の大きな使命であることはどなたも異論を唱えられませんが、教育に対する考え方は、全学を見渡してみても、結構幅が広いという気がいたします。これは、それぞれ個人が教育に対してどう考えるかという考え方の問題もあるでしょう。また、部局ごとに考え方を統一してやっておられると思いますが、必ずしも全学で一致した見解は、完全にはできていないという感じがしないわけでもありません。

また、評価がこのごろはやっており、研究、それから教育、それぞれの面、もちろん社会貢献も含めて、評価を受けております。我が京都大学は、研究面では高い評価を得ましたが、教育面では、私どもが考えているよりもやや低い評価を受けた部分もありました。

これについては、我々は真摯にそれを受けとめて、考えていくべき段階ではないかと思っております。

本日は、22枚くらいのパワーポイントをたたき台としてご提示することになりましたが、前半は京都大学に限りません。大学のあり方そのものについて若干時間をいただきたいと思っております。

後半は、京都大学の教育のあり方についてご議論を願うわけですが、それについての私なりの考え方を整理したものをご紹介しますと思っております。

タイトルは「伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して」とさせていただきましたが、京都大学は魅力がある、これは内外ともにそのように言ってもらってきたと思っておりますが、果たしてそれは大丈夫だろうかということを見直す必要があろうかと思っております。

活力、これも活力の源はいろんなところにあると思っておりますが、例えば授業を受ける、あるいは教育を受ける若手の学生さんの活力はどうか。また、それを指導する教員の活力はどうかということも見直してみる必要があろうかと思っております。

年寄りが昔のことを言うと、昔はこうだった、ああだったという話にすぐなりますが、時間とともに社会が変動していますから、そのときどきの様子と現在を直接に比較することはできないと思っております。何となく世の中が変わり、30年、40年たつと、すっかりというのは言い過ぎですが、かなり学生気質も変わっております。また、社会の情勢も、教員に対する社会の目も変わってきていると思っておりますので、必ずしも

昔と比べて今は活力がないとは言い切れないと思いますが、果たして活力は十分にあるのか、見直して見る必要があろうかと思います。

実力に関しては言うまでもないことだと思います。

基本理念は本学で定められております。ホームページ等に出ておりますけれども、教育に携わる人々がこれをじっくりと見る機会はそう多くないと思います。特に、若手の教員にとっては、基本理念はむしろ縁遠い存在ではないかと思いますが、これも十分学内のいろんな意見を通じて、対話を通じて形成された結論の一つだと聞いており、また私もそう理解しております。

研究、教育、社会との関係、大学の果たすべき3つの大きな役割ごとに理念を定めております。特に本日のテーマは教育ですので、教育のところだけ読みますと、「対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。地球社会の調和ある共存に寄与する優れた研究者と高度の専門能力を持つ人材を育成する。」こうあります。

前半は、人間として、社会のリーダーとして育っていくための事柄が書かれていると思います。後半は、高度な専門家を教育、指導者として育てていくということが書いてあると理解できます。

京都大学の理念にはこのように書かれていますが、将来像についてどう考えるかは、それぞれの皆さんがそれぞれの胸に持っておられると思います。私がそういった方々の意見を聞いてまとめてみたものがここにあります。

まず一つに京都大学が京都という歴史的都市にあることは、これは普段なかなか認識できませんが、大変大きなファクターだと思います。

今と違って、情報が即座に行き渡らない。人々の交流も今のように早くない。ゆっくり時と物と人が流れていた時代が1000年以上続きました。その中心である都が京都にあって、たくさんの人々が集いました。その中で、たくさんの人がいろいろな地方から来たわけですから、多様な世界観、自然観、人間観というものがここ京都にはあったということです。

それを受けて、京都大学も同じように、個性のある研究、融合、共鳴、対話を通じて、京大独特の独創的な学術研究の雰囲気醸成されたと思います。

次に自由と調和。難しいですが、自由とは何ぞや。最も難しい問題だと思いますが、教員一人一人が考えるべき問題であり、かつ学生一人一人が認識すべき問題だと思っています。自由と勝手気ままは全く違うことはよくご存じのとおりですが、勝手気ままではどうしていけないのかというような議論さえ、ときどき聞きます。

自由というのは大変重要で、何からの自由、「何からの」が一番大きな問題だと思いますが、高校を出て、大学に進学してきた若者に対して、自由とは何ぞやということを自分で考えさせることが最も重要です。それまでに形成された20年弱の人生の中で、自分の中にでき上がったある概念を持っているわけですが、自分という存在からの自由、自我を超える自由も必要です。それから、既存の概念からの自由もあるでしょう。そうしたものを超えて、知の創造に向かうことが必要だろうと思います。

高校までで習うことは、もちろん重要なファクターがたくさん含まれていますが、先生方はよくご存じのように、必ずしも真実そのものではありません。端的に言うと、うそでもない、本当でもないことが教科書に書かれているとよく言われますが、そういう側面もあろうかと思います。そういったことを一度 unlearning していただき、頭の中を整理してもらって、教育を受けるという状態にすることに取り組んでいただきたいと思うわけです。

学問の源流とは何ぞやというのは大変難しい問題です。ごく薄っぺらく言えば、基礎と応用ということになりますが、基礎と応用はそんなに明確に線の引ける問題ではありません。ただ、教育を受ける立場と

しては、最低限、どの分野に進もうとも、社会のリーダーとなろうとも、研究者になろうとも、身につけておくべき事柄というのはあります。それは基礎だと思います。その基礎研究、あるいは基礎教育が重要であることは、この大学の特徴であるし、今後も維持していかなければならないと思っています。

同時に、世界最高水準の大学の一つとして、京都大学が今まで先人たちの努力によって地位を築いたわけですから、それを守っていくことも重要になります。

最後に、社会の各分野での指導的人材の育成と書きました。これは現在、日本あるいは世界の社会を動かしている豊かな指導者たちがおられますが、その中で京都大学を卒業して、この大学で学んだことが生かされているという人はどのくらいいるのでしょうか。私は結構おられると思いますが、それが意識の上に乗っているかどうかは別問題です。

先日も経済産業省の望月次官とお話をいたしました。彼は東京に自宅があったのですが、京都大学に入学し、京都で4年間の学生生活を送られました。その頃を振り返って、それは大変豊かな経験であったということをおっしゃっておられます。行政官になる人に限りませんが、指導者層で成功をおさめた方々とお話いたしますと、大学の4年間は短かったけれども、大変大きな部分を心の中で占めているということをよくおっしゃいます。そういった指導者になってくれる人材に何を我々が提供できるか。これが教育の根幹だと思います。

21世紀は大学をめぐる大きく変わってきております。人間というのはなかなか賢い生物でありますけれども、同時に愚かな側面があることは、皆さんよくご存じのことだと思います。あらゆる生命体は地球上で営みを続けております。絶滅危惧種もいろいろありますが、その個体数はほぼ定常状態になっているのですが、人間だけは特例で、非常に大きく個体数を増やしています。やや長期的に見ますと、ものすごい勢いで指数関数的に伸びていることはよくご存じのとおりです。

しかも、個々の生き物としての人間が豊かな生活を望んでいるわけですから、いずれどこかで行き詰まるだろうということは薄々だれでも感じていることです。ローマクラブの警告もありました。そういったものを乗り越えていけるだろうか。人類の生存そのものが脅かされるということは、この指数関数的な悪化のスピードに鑑みますと、深刻な危機的状態が比較的近い未来、将来にやってくることを覚悟しなければなりません。

そういった人間が、人間としてこの星とともに暮らしていける、この星の中のあらゆる存在と共存していくという生存基盤について、十分意識を持った人を育てていく必要があるかと思います。

ここにおられる方々は、個人の生き残りという問題に日々直面しておられる方は少ないと思いますが、社会に出ますと、大変困っておられる個人がたくさんおられます。また、家庭、地域社会、地域産業等々、組織も果たして生き残れるかということで大変苦しんでいる人が多いと思います。

地域、あるいは広域の地域、国家そして社会、アジア地域そして世界。そういったものはどうなるだろうかということ、あらゆる角度からそれぞれの専門家の立場として、また個々人の優れた知識人として考えていく。そして、その結果を発信して、若者に考えさせる力、そういった困難な時代を生き抜く力を与えていく必要があると思います。

日本国は世界の先駆けだと書いてありますが、日本という国は非常に希少な存在で、世界中から非常に大きな注目を浴びてきました。資源も割合少ないのに、優れた知的レベル、優れた勤勉さでものごとをうまく作り出し、世界と交易をして、原材料を輸入して、そして製品を出す形で、この国を維持させてきました。それがいつまで続けられるのでしょうかという問題ですが、日本が輸入できる限り、日本人の勤勉さ、優秀さでもってすれば、ものごとはうまく、自分たちの未来はうまく切り開いていけると思います。しかし、そういう物の、人の、あるいはお金の流入が止まった場合、果たしてどうなるだろうか。これも

分析し、考えていく必要があります。

日本国は、そういった意味で世界全体の将来を先取りしたような形の国です。地球という有限の中で、ものごとが外から入ってこない。地球という星の中で、閉じた社会をつくれるかという大きな問題がそこに控えているからです。

人口爆発については、先生方に示す必要はほとんどないと思いますけれども、2050年には92億人と予測されています。現在でも、1秒間に3名くらいの人口が増えていっております。しかも、生活レベルは途上国においても猛烈な勢いで上っています。下に書いた赤い線が指数関数のカーブですが、人口方程式は単純で、そのときの増加率がそのときの人口に比例するとしますと、答えは単純に指数関数になります。そのとおりの人口増加を我々は示してきたわけですから、この行く先はどうだろうか。どこかで止まるだろうか。

マイナス要因はいろいろあります。大きな病気、ペストがそうでした。このカーブでややへこんでいるのは、ヨーロッパでペストが大流行したときです。

戦争ということも考えられますが、第一次、第二次世界大戦の人口の減少は、このカーブの中には読み取れません。壊滅的な戦争、世界戦争になれば頭打ち、もしくは減少に向かうかもしれませんが、人間はそれほど愚かではないと信じたいと思います。

それではどうするのかということを考えていく必要があります。

要するに、こういった問題は、現在先進国と言われる日本のような比較的豊かな国では10億人の人々が暮らしていて、そうでない国には60億人の人々が現在暮らしています。生活水準はほぼ平均で10倍くらい違うと言われております。我々は、途上国の人たちの10倍の消費、生活資源、エネルギーを使っています。50年後にそれが90億人を超えた場合、先進国の生活は多分変わらない。変わらないのではなくて変われないかもしれません。あるいは、変わらなければならないかもしれません。しかし、ここでは「変わらない」と仮定した絵がかいてあります。

10億人、10生活トンの資源、消費生活物資、水、エネルギー、食糧等を使い続けるとします。途上国では、恐らく人口は90億人になります。およそ100億人の世界人口になるわけですが、彼らの生活水準はほどなく我々の3割くらいに到達すると思われまます。そうすると、物資、エネルギーはおおよそ2.5倍、今から50年以内に必要になります。2.5倍は増産できるでしょうか。できなければどうするかということは、それぞれが考えておく必要があります。

つまり、人類が破局的な滅亡から逃れて、持続的に発展していくためには、今それぞれの個々の問題はたくさんありますが、それぞれ専門の立場、あるいは専門を超えたやや俯瞰的な立場でものごとを解決する方策を考え続けなければなりません。

多くの人々に壊滅的な争いごとを導入せずに生き続けられるという持続可能社会という言葉がありますが、持続可能ということはなかなか難しく、むしろもっと厳しい、生存できるかどうかという立場で、あらゆる学問的な視点から、生存学、サバイバビリティ学を考えるべきだと私は考えています。これは言うはやすく、実際には大変困難な問題を伴うことは異論がないと思いますが、これについて我々はどう考えるか、大学人としてどう考えるかということを発信しなければなりません。

これは、科学技術だけが進歩すればいいという問題ではないことは、皆さんよくご存じのとおりです。心、あるいは精神文化のような人文科学、社会科学、あるいは精神科学、あるいは医学、生命学といったところとの調和が最も重要になります。収奪的な欲望の暴走をいかに抑えられるかということはどう発信していくか。

日本人は小さな島国でひしめき合って生きてまいりました。そのために、ミニマム・ポテンシャルを探

す知恵がついております。その知恵のよさ、もちろん悪いところもたくさんありますが、知恵のよさをいかに世界に発信していくかということが重要になってくると思います。

21世紀は、これまでの学問のあり方一つ見ても、単純から複雑なシステムへ、平衡状態から非平衡状態へとなくなっていきます。人間の増加もそうです。平衡状態からほど遠い状態であります。個々の要素の学問から、システム全体の学問へ。そして、西洋にはない東洋の考え方を導入した西洋から東洋へ。そして、私は宇宙科学をやってまいりましたが、地球という星だけで考えていいのか。地球から太陽系へ考え方を展開するときではないかと思えます。

以上のような21世紀の科学のあり方の根源をなす問題を提起した上で、京都大学はどうすべきかということを考えていただくわけですが、特に教育の問題については、本日、明日、あわせてご議論願うわけです。

そもそも大学はどうであったかといいますと、非常に豊かな知の共同体としての存在であったわけですが、ところが、今は進学率が上がって、約55%の人が大学へ進みます。大学といっても、さまざまな大学が存在します。大学そのものを見る社会の目が変わってきていると言っても過言ではないと思えます。

したがって、大学人としては、大学こそが知の源泉であるということを改めて発信し続けなければならない。大学というのは、個々の先生方の専門分野では非常に深い研究成果、あるいは知識をお持ちです。個人の研究成果もあるでしょうし、研究グループとして、あるいは研究集団として蓄えてきた知的レベルもあるでしょうが、そして個々人の卓抜した知恵、知識が肥沃な大地のごとく存在していることを社会に認めてもらわなければなりません。

個々の土は個々の研究者、個々の分野の人が耕すことはもちろん必要なのですが、今は耕そうにも国の財政状況は厳しく、あるいは社会の大学を見る目も大きく変わりました。確かに競争的資金がおりてきてはいますが、それで部分的な土地を耕しても豊かな大地はできません。競争的資金のない知識分野もたくさんあります。そういったものを十分に耕して、大学こそ豊かな肥沃な大地であることを世間に向けて発信しなければなりません。それで初めて、新たな問題が生じたときに、新しい芽がこの大地から出てくるということが言えると思えます。

また、大学はコミュニティーの中の一つの存在でありますけれども、今までであれば大学で勉強して、教えてもらって、卒業して、社会に出て行って、〇〇大学を出たということがその人の誇りとなり、あるいは看板となり、生活できたのかもしれない。

しかし、裏返しに言いますと、大学を出たときに大学を忘れていたという存在ではなかったかと思えます。ここにおられる方々はずっと大学におられて、大学の教育研究に携わっておられますので、そういうことはないと思いますが、社会人として京都大学を出た人たちが、以後、京都大学を振り返る機会はどれくらいあるでしょうか。あるいはあったでしょうか。

私の割合限られた経験ですが、何人かの卒業生と話をしましても、研究室レベルでのつながりは存在しますが、大学を意識して、大学を中心にやっというふう考えた人は非常に少なかったと思えます。多くは企業に勤めたり、あるいは自分で産業を起こしたりして活躍をしたり、あるいは行政府に入って活躍したり、いろんな活動の仕方がありますが、現代社会にあっては、特に昨年の米国の金融危機から端を発して、企業にも永久就職はできなくなった。人を雇用し続けることが非常に困難な時代になり、そこに人生の基軸を置くことは、一般の人にとっては非常に困難な時代に突入したと言っていいかもしれません。

そのときに、大学は人生の基軸となり得る一つの候補であるというのが、この大学基軸論です。地域社会も職場も基軸となり得るかもしれません。しかし地域社会は、先生方のご近所を見られてわかると思ひ

ますが、どうでしょうか。私の家は奈良にあります。昔の奈良の田舎ですと、隣近所はプラスマイナスいろいろありますが、非常に密接につながっておりました。現在の私の住んでいるニュータウンでは、隣の家の人は何をしているか、どういう職業か、知りません。非常に希薄な関係になっております。

家庭も、核家族化が進んで、おじいちゃんおばあちゃんと一緒に住んでいるということが少なくなっていると思います。

そういった中で、家族や親戚もなかなか確固とした基軸になり得ないような部分が多々見られる社会になってしまいました。大学はそれにとって代われるわけはありませんが、一つの大きな基軸として役割を果たすことができる時代ではないでしょうか。

大学はそもそも学問をするところですが、学問とは何ぞやと言いますと、非常に難しい定義です。「学問問う」と書きますが、学びは真似ぶともいいます。人の知識を勉強する。そして、新たな疑問を問うて自分で解決する。

今の学問は真理とは何ぞやということを探求する側面が強いです。しかし、真理の探究という学問の本質と、その学問の本質を追究する人間そのものを考えてみたときに、学問とは真理をめぐる人間関係であるというように、私の経験では言えるのではないかと考えています。

専門家の中での発言、発信、これは専門家からたたかれる場合もあります。非常にユニークな考え方を出せば、いざこざ等々が学会ですら起こる可能性があります。そのとき人間関係というものが大きくものを言います。

学生さんは最近コミュニケーションの能力が落ちたと言いますが、これは社会全体で取り組まないと、そう簡単には向上させられない問題かもしれません。大学、特に京都大学では少なくとも、対話ということを中心にいろいろ人を育ててきた過去の経験があります。対話は決してディベートではありません。相手の言うこともよく聞き、自分の主張もきちんとする。お互いに意見が違えば、理解できるまで話し合う。それが対話だと思います。時間がかかります。しかし、対話を通じて、相手の心の中まで入り込めれば、その人間関係は確固たるものになっていくと思います。

したがって、教育をする場合に、最近の若い子にどういうふうに取り組むか、非常に難しい問題ですが、彼らは心を開いてくれるというところは昔と比べて少なくなっていると思います。友達同士の会話を耳をそばだてて聞いていますと、真剣な、あるいは心に傷がつくような会話はほとんど聞かれません。どこかでやっているのかもしれませんが、しかし、多くの学生同士は、どちらかという、心に傷がつかないようなコモンなトピックスで話が終始しているように思います。

文系、理系を超えた、自分自身の中身をのぞく。あるいは人に自分の意見を吐露する。私はこう考える。人がどう言おうとも私はこう行くというような、自らに恃むような人間になれるように自らを鍛える。これが「自鍛自恃」ということですが、自らを鍛え、自らに恃む。「頼る」という字は他人に頼るという字で、他人様を頼る。それもときには必要でしょう。しかし、他人に頼り切りますと、何かうまくいかない人のせいにするというふうにつながってしまいます。やはり自分が中心にないといけないということで、みずから鍛える必要があると思います。

福沢諭吉もよく使った宋の時代の言葉、「自我作古」も同じ内容だと思います。

さて、教育シンポジウムの趣旨ですが、先ほど来、あるいはすでに先生方の意識の中にあると思いますが、教育は大学の根幹をなす活動です。教育の質向上に適切な評価が必要だと言われるようになりました。これは是非かよくわかりませんが、外からどう見られているかということも意識する必要があります。

人間は、残念ながら、だれも見えていないところで1人で行動することには慣れておりません。裏を返し

ますと、だれかからどこかで見られていることを意識することによって、自らの行為を向上させることができるかと思えます。

それから、京都大学は世界有数の優良な大学であり続けたいと申し上げましたが、そのためには世界の優秀な大学と伍していかなければなりません。そのためには、国際性ということが当然問われるわけですが、京都大学の国際性は極めて低いと思えます。国際部を中心に、ずいぶんの努力をさせていただいておりますが、全体を眺めた場合に、じゃあ外国人が来て国際的に高いレベルだと絶賛してくれる状況にあるかというと、そんなことは決してないと思えます。国際性を豊かにすることが是か非かという話も当然議論の対象になると思えます。

しかしながら、やはり世界と伍して、協力して、あるいは競争してやっていこうと思えば、少なくとも多様な考え方を持つ教員の構成等々を考える必要がありますし、日本国以外の社会から学生、あるいは研究者を受け入れたときの対応のしやすさ等々を十分に考えていく必要があろうかと思えます。

教育体制は、その中でも特に重要です。例えば日本語で教育することは日本国に来る以上当然必要だという考え方は十分に理解できます。しかし同時に、日本語ができなければ、日本国は外国人を受け入れないということにも問題があろうかと思えます。国際語だけでも単位が取れるという試みを、最近西村先生を筆頭に、G30（グローバル・サーティー）で取り組んでいただいております。これは各部局の協力なしには達成できませんが、部局の中におきましても、そういう努力をずいぶんしていただけるようになりました。これをさらに推し進めなければなりません。

しかしながら、教育体制を論ずるときに、1年、2年で問題が解決するわけではありません。10年先の京都大学、場合によっては30年先の京都大学の教育のあり方を全部局が胸襟を開いて、全教員がお互いに自分の考えを交換して、そして京都大学らしい教育の体制をどうするかという方向に持っていく必要があろうかと思えます。

10年と言いましたのは、皆さんよくご存じのとおり、入学試験体制とも関係があります。入試は2年前に方針を言わなければなりません。その入試制度は、後ほどまた西村先生から出るかもしれませんが、大きな社会的なインパクトを与えています。これについての変更はそう容易なことではありません。しかし、現状でいいと思っている先生もそう多くはないと思えます。

そういった議論を重ねることで、2年や3年はすぐかかります。だから、2年プラス2年、そしてその準備のための議論が2年で、最低6年かかります。実施時間を考えますと、あと2年、8年ですけれども、私はそれを大雑把に10年と表現しております。ですから、今着手しないと、10年後には何も変わらないということだと思います。

理想の京大生像とは何だということは大変難しいですが、世界が置かれている状況を十分に知って——「知る」という言葉はいろいろ意味深いですが——人類生き残りのために知恵を絞って、みずから未来を設計し、つくる人ということであろうかと思えます。こういう人をいかに教育で、教育だけではできないと思えますが、育てていくかが大きな問題だろうと思えます。心を磨き、体を鍛え、知をきわめることが重要だと思います。

私は昨年10月に就任したときに、教育に関してはこういうことを申し上げました。全人教育、リベラルアーツ科目中心、学部・大学院の専門教育の改革、10年先の京都大学の教育目標、教育環境整備、履修支援、進路指導、キャリアサポート、学生寮、課外活動拠点、図書館、駐輪場等々、こういうことの問題点を一応申し上げました。この中のいくつかはすでに各方面で着手いただいておりますが、道のりはまだまだ遠いと思えます。

「第2期中期目標1 優れた入学者の確保」ですけれども、これは入試の問題。大きな問題なので、ぜひ

皆さんで真剣に考えていただきたいと思います。今の幼稚園生、小学生、高校生の両親と話されたことがありますか。幼稚園から塾にどうやって入れるか。有名幼稚園にどう入れるか。親は一生懸命です。いい進学校に入れたい。いい進学校に行きますと、いい大学に行ける。レールの上に乗せようと思って、親は躍起です。このようにしてしまったのは、一体何が原因か。入学試験制度が大きな問題であることは論を待たないと思います。大学の見識の問題だと思しますので、どういう人材をどうやって確保するか。伸び切ったゴムひものような受験技術に長けた人たちだけを迎え入れていては、将来の京大はないと思います。伸びる可能性がある優秀な子をどうやって集めるか、それも世界から集めるかということが一番問題になろうと思います。

「多様かつ調和のとれた教養教育」、これは当然ながら豊かな教養と同時に高度な専門知識を植え込む必要がありますから、最小限の基礎知識は必要ですが、特に初期教育においては、非常に幅のある全人格を形成するような、理系、文系を問わない知識、考え方を学んでいただく必要があろうかと思えます。違う表現をしますと、人間力涵養といいましようか、多様能力というのでしょうか。非常に幅広い教育ができる体制にはなっておりますが、人間力涵養をいかに実現していくか。あるいは、体制で不十分なところをどうしていくかということを経験する必要があると思えます。

初年次教育では、自重自敬、自鍛自恃、大学院生の共通教育、情報教育等々が問題になります。本日は学部の教育がメインテーマですから、2番目の大学院生の共通教育については特に議論はいたしません、こういうことも問題になろうかと思えます。

それから、体系的で質の高い授業、これについてはいろいろな見方がありますので、ここは議論がたくさん分かれると思いますが、いわゆる外部評価の中で、この問題についての言論が外の社会で非常ににぎやかになっていることに耳を傾ける必要があります。「教員が教育に真剣に取り組む。」こう書くと、真剣に取り組んでいないと言っているように思われますが、真剣に取り組んでおられるのですが、その真剣の程度を自分でもう一度問い直してみることが必要ではないかと思えます。シラバスの整備、授業時間数の確保等々、技術的な問題もたくさんあろうかと思えます。

教育環境整備。これは教務系職員の果たす役割。博士課程のキャリアサポート。これについても問題があることは、すでに議論されているとおりであります。

学生の国際化。優秀な留学生の確保をどうするか。これは技術的な問題と同時に、我々の考え方も、どの程度の留学生を我々の大学は受け入れるか。現在目標は3,200人ということで取り組んでいただいておりますが、現状は1,400人弱だと思います。これを3,000人程度でいいのか、もっと増やすのか、もっと少なくしていくのか、こういうことを議論して十分に考えていく必要があります。

それから、最近の学生は海外へ留学したがりません。旅行にはよく行きますが。海外で、自分で苦労するという武者修行の制度。英語だけによる授業。外国人を雇用して、外国人教員による教育。

そういった事柄が全学共通教育を筆頭に、専門科目を含めて、学部教育の論すべき問題ではないかというふうにして書かせていただきました。要するに、人を1人育てることは大変なことです。おぎゃあと生まれて、家の中で1歳、2歳、3歳、親は一生懸命教育をし、教え込もうとします。幼稚園くらいになりますと、今度はレールに乗せようとし、小学校、中学校、高校。いい高校に入ればいい大学に行けるというのは、いい高校に進学した親の話を聞きますと、そうではないらしい。いい高校に入れば、いい高校に入った学生だからいい塾がとってくれる。塾に入るためにいい高校に行くんだという極論をする人もいます。そんなことでもいいのでしょうか。大局的に人を育てるとは何ぞやということは、我々が考えるべき大きな責務だろろうと思えます。

それから、各部局で真剣に教育については取り組んでいただいていると思えますが、大きな部局になり

ますと、またそれは専攻科ごとに方針が定められていると思います。そういった個性をいかに大事にしていくか。あるいは個性を乗り越えて、全部局で、部局全体でどう取り組むか。この問題は議論されていると思います。

さらにそれに加えて、部局間の部局を超えた教育のあり方を議論して、それぞれの教員、教育者が十分に考えて、具体化するアクションをとらなければ、来年に延ばせば11年後、再来年に延ばせば12年後にしか教育は変わりません。その間に社会は大きく変動しています。政治体制も、今、選挙の結果大きく変わりました。高等教育に対する見方もどう変わるか、今は予断を許しません。

京都大学は、総合的な研究大学として、財政難の折、高等教育が草刈り場になってはいけないと思っています。一番声の出にくい、みんなで団結しない大学の弱さを突いてこられないとも限らないことを危惧しております。

したがって、本全学教育シンポジウムにおきましては、各分科会に分かれていろいろ議論していただきますし、またパネルでも真剣な議論があらうかと期待しております。私も勉強させていただきたいと思えます。どうか皆さん、京都大学を、研究ではピカピカに光っておりますが、教育においても、こんなすばらしい人を世の中に出すのだということを声高に社会に向けて発信できるような大学にしようではありませんか。

(拍 手)

平成21(2009)年度
京都大学全学教育シンポジウム

学士課程教育を再考する
 — 第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて —

2009年9月24日京都大学全学教育シンポジウム

京都大学の教育に関して

伝統を基礎とし、革新と創造の
魅力・活力・実力ある
 京都大学を目指して

京都大学
 総長 松本 紘

基本理念

自由の学風 **基本理念** 多様な課題の解決
 地球社会の調和ある共存

研究
 高い倫理性を備えた研究活動により、世界的に卓越した知の創造を行う
 基礎研究と応用研究、文科系と理科系の研究の多様な発展と統合をはかる

教育
 対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる
 地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する

社会との関係
 日本および地域の社会との連携を強めるとともに、自由と調和に基づき知を社会に伝える
 国際交流を深め、地球社会の調和ある共存に貢献する

運営
 教育研究組織の自治を尊重するとともに、全学的な調和をめざす
 環境に配慮し、人権を尊重した運営を行うとともに、社会的な説明責任に応える

京都大学の理念と将来像

▶ 歴史都市京都において、
多様な世界観、自然観、人間観に基づく個性ある研究
 融合、共鳴、**対話**による、京都大学独自の**独創的学術研究**を
 推進

↓

▶ “自由と調和”を基礎に世界的に卓越した**知の創造**
 ▶ 基礎研究と応用研究、文科系と理科系の研究の**多様な
 発展と統合**
 ▶ 学問の源流を支える**基礎研究**の重視
 ▶ 先端的・独創的研究の推進による
世界最高水準の研究拠点形成
 ▶ 社会の各分野で**指導的人材**の育成

大学をめぐる21世紀の世界

▶ 人口の急激な増大・生活水準の向上により、
人類の生存そのものが、半世紀程度の近未来に深刻
 な危機的状況に陥る恐れが高まっている。

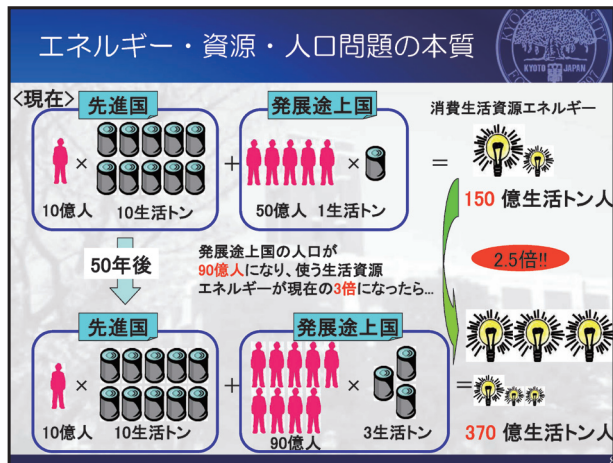
▶ 21世紀の人類が直面する地球温暖化、環境破壊、
 資源の枯渇は、**人類の生存そのもの**を脅かす恐れが
 ある。

▶ 今後、**人類の生存基盤**について、中長期的視野に立
 ち研究開発を進め、社会に対して積極的に提言・還元
 を行うことが大学にとって肝要。

我々は生き残れるか？

個人、組織、地域、国家
 そして
 地球型文明・人類の危機

日本国は世界の先駆けだ



サバイバビリティ

人類の持続的発展のために、迅速に対処することが求められている。

地球温暖化 人間生活圏の手詰まり 化石資源の枯渇

収奪的資源利用

生存学(サバイバビリティ学)

人類の生き残りのために、「欲望の暴走」を押さえる「科学技術」と「こころ・精神文化」の調和が必要。

「日本的調和のこころ」と「東洋的共存の哲学」が重要。

21世紀の科学のあり方

“単純”から“複雑”へ
 “平衡”から“非平衡”へ
 “要素”から“システム”へ
 “西洋”から“東洋”へ
 “地球”から“太陽系”へ

大学土壌論

我が国及び人類の将来にとって**大学こそが知の源泉**であり、衍沃な大地のごとく、人材と研究成果を生み出すための、もっとも必要とされる存在。

ナイル河や黄河がもたらす肥沃な大地は人間文明の揺りかご

社会科学・情報科学・生命科学の「川」は繋がったり、地下に潜りつつ、地下水脈となり、**大学という土地を豊饒にする。**

大学基軸論

戦後・高度経済成長期の進学率増加...限られた数の大学・卒業生でなく、卒業生増加、同窓意識も減少

喪失感 孤独感 不安感

大学

地域

職場

家族・親戚

隣保班、町内会、商店街... 地域との繋がりが希薄に

戦前の大家族→戦後の中家族→現代の核家族へ...家族との絆や親戚付き合いも減少

リストラ、転職、終身雇用制の崩壊...企業への忠誠心も弱まる

学問とは

“学問とは真理をめぐる人間関係”

- 専門性を基盤とする発言力
- 深い教養と高い見識
- コミュニケーション能力
- 研究成果の発進力

文系・理系を超えた全人教育の必要性

自鍛自恃 自我作古

全学教育シンポジウムの趣旨

教育は大学の根幹をなす活動

- 教育の質向上への教育貢献の適切な評価
- 国際語による教育の充実
- 学生への海外派遣、優秀な留学生の受入
- 学生への支援の多様化と充実

10年先の京都大学の教育改革目標を定め、**全部局が一致協力**してじっくりと取り組むことが必要

理想の京大生像

- 今世界がおかれている状況を知り
- 人類生き残りのために知恵を絞り
- 自ら未来を設計し、創る人

「研心」「鍛身」「究智」

就任挨拶 (20.10.2)

- 全人教育、リベラルアーツ科目中心
- 学部・大学院の専門教育の改革
- 10年先の京都大学の教育目標
- 教育環境整備
- 履修支援、進路指導、キャリアサポート
- 学生寮、課外活動拠点、図書館、駐輪場

...

第二期中期目標1
優れた入学者の確保



- 大学入試が幼児からの教育に与える影響を自覚する必要
- 大学の見識の問題
- どのような人材を求めるのか、大学人が真剣に議論し、改革

第二期中期目標2
多様かつ調和のとれた教養教育



- ＜分科会2、分科会5＞
- 最小限の専門基礎
 - 理系・文系を問わない共通知識
 - 人間力涵養
 - 対話能力

第二期中期目標3
初年次教育



- ＜分科会3＞
- 自重自敬 自鍛自恃
 - 大学院生の共通教育
 - 情報教育

第二期中期目標4
体系的で質の高い授業



- ＜分科会1＞
- 教員が「教育」に真剣に取り組む
 - 学生の自学自習を促す趣旨でのシラバスの整備
 - 授業時間数の確保

第二期中期目標5
教育環境整備、学生支援



- ＜分科会6＞
- 教務系職員の果たす役割
(学生の学習と生活両面の支援)
 - 博士課程学生のキャリアサポート

第二期中期目標6
学生海外派遣、留学生受入



- ＜分科会5＞
- 優秀な留学生の確保
 - 海外での武者修行
 - 英語での授業
 - 外国人教員による授業



大局観を忘れずに
建設的な議論を

部局・関係委員会に
持ち帰って具体化

5. 問題提起 1

理事・副学長 西村 周三



これから約30分で、私と高等教育研究開発推進機構長の山本先生と2人で、15分ずつ、この後ご議論いただくためのオリエンテーションをさせていただきたいと思います。事前に皆さんにお知らせをさせていただいたところで記載したのですが、一つは中教審答申をぜひ読んで上でご参加させていただきたいと思っておりました。もう一つは、最近生協で売り切れているそうですが、猪木武徳氏が「大学の反省」という本を書いております。そういったものをベースに、今日、そして明日、議論をぜひお願いしたいと思っておられます。

最初に、少しでも個人的なことを申し上げさせていただきたいと思います。

私は今、理事、副学長として3年半たちました。最初の2年間は、情報基盤、国際交流担当でございまして、教育担当は1年前からでございます。率直に申して、今めちゃくちゃ忙しくて、今日の用意も十分な時間がなく、先だってからベトナムに行き、さらに昨日も東北、仙台、日帰りです。入試説明会に行っていました。そういうわけで、大変恐縮ですが、じっくりものを考える時間がなくてと思うのですが、最初に何を申し上げたいかという、総長も忙しいものですから、じっくり議論をする時間がないのです。ないのですが、何と不思議なことに、ぴたっと意見が一致することが多々あります。

それは、先ほどのスライドを見ながら、大学基軸論という話を展開されました。一部の方には、ひょっとしたら荒唐無稽な議論かもしれない。つまり、大学が地域とか、職場とか、そういうコミュニティの中に入って行って、一つの大きな役割を果たすことは、かつては想像できなかった。象牙の塔で、私たちはいわば外部とあんまり関係を持たないで、社会に存在するものであったような気がします。

しかし、総長のさっきの発言はそうではないわけです。もちろんこういう議論、私は一応人文社会科学系のはしくれでありますので、総長は理科系ですから、単純な頭を持っていて、おれは違うんだと思いたいという反発心があるのですが、残念ながらいろんな事例でぴたっと意見が一致します。恐らく、これから問題提起させていただく内容は、そういうことと関係しているのではないかと考えております。

そのことを申し上げる前に、これが実は本題で、この後この内容について議論をいただくわけですが、総長と微妙に私の意見が違うところがあります。1年間教育担当をしまして、この大学は決して先生方が教育に関心を持っていない大学ではないことをいろんな場で知りました。後で紹介します。

しかし、残念ながら、それぞれの場でそれぞれの人たちが断片的に議論をしているだけで、それが全学的に広がらないのが一番大きな欠点だと思っております。これからの一番の課題でもありますが、先ほどの総長の最後の話もそうで、これから1日する議論をいろいろな部局に持ち帰っていただいて、しかも自分の部局だけではなくて、他の部局の先生方とぜひ、例えば通勤途上でも結構ですので、議論をしていたらいいんじゃないでしょうかというお願いを最初に申し上げておきます。

具体的に何を議論するか。アドミッション・ポリシーです。教養教育の充実です。成績評価、これは単位の実質化という形。省略しましたが、全学共通科目と専門科目の継続性をどういうふうにつくるか。FDをどうするか。学習研究支援機能の強化をどうするか。学生支援、具体的には、相談・助言体制、進路

選択、経済支援（特に博士学生）、福利厚生、そういうことを議論していただきたいと思っております。

当面、特に重要課題として、最初の5つがこの後分科会で議論をお願いしたいと思った内容であります。

個人的な内容の話と前後して大変恐縮ですが、こういう問題について、私は教育担当になって1年経つのですが、それぞれの分野で非常に一生懸命問題を考えていただいている先生方がたくさんおられることを知りました。実は、今、超忙しいと言いつつながらなんとか回っていつているのは、そういうかなり専門的知識を持った先生方のご助力によるところが大であります。

ただ、もう一回繰り返しますが、一部の専門の先生があまりにも専門化し過ぎて、例えば前回までこのシンポジウムは淡路島でやっていたのですが、最初に来た先生方は議論についていけないというようなことがあったのです。これが本学の欠点です。つまり、ごく一部の大変熱心な先生方が、単位の実質化についてどうするか、教育の国際化をどうするか、情報教育はどうするかというような議論をされています。学生の寮の問題も、寮小委という本当に献身的な努力をいただいている先生方の上に私が立って仕事をしております。

そういう意味で、私はこの大学の、本当にくどいようですが、欠点はそういう必死に頑張っておられる方の努力がみんなに見えないところ、要するに可視化できていないことが一番の大きな欠点だと思っております。

その中で、自分の経験を踏まえて、今回のテーマと違いますが、入試について少し話をさせていただきたい。これは違うのですが、実は2番目の初年次教育、これは専門用語です。恥ずかしながら、私は初年次教育というのは2年前まで全く知りませんでした。去年、就任早々にこのシンポジウムがありまして、そこで勉強しました。教育学の専門家から、そもそも教育担当理事はなぜ教育学部出身でないかという疑いの目を持って見られる方もおられるかもしれません、そういう状況でありました。

初年次教育と入試が密接に関係しています。これが実は松本総長のさっきの話とも非常に関係しております。

要するに、学生が変わってきているのです。変わってきている中で、私たちが中教審の答申をご覧くださいとお願いしましたが、これを読むと、はっきり言ってついていけないところもたくさんあります。

この答申は、基本的にはやはり日本全体の大学、学生の平均像をとらえた答申だとしか読み得ないわけです。つまり、あえて問題発言しますが、すごいポテンシャルが高い学生がいる大学とそうではない大学を一緒くたに扱って、同じことをやりなさいと言っているようなふしがたくさんあります。それは問題なので、私はこういうことに対して、私どもの大学の読み方が必要であると思っておりますので、この答申をぜひお読みいただきたいわけですが、うちの大学にはめるにはどうしたらいいかということを考えてご議論いただきたいと思っております。

その前に省略しますが、要するに第I期の評価はよくなかったんです。教育に関して。これは間違いありません。ただ、実際は悪くないのに、評価がよくなかったんです。これを反省を踏まえてということで、今細目をつくることをやっています。

しかし、それでも今一番心配なのは、本当にこれが必要かどうか。全学的な取り組みが必要かどうかということも含めて、全学的な取り組みができていないことです。

で、ちょっと入試のお話に行きます。

他大学の事例を紹介する必要はないと思っておりますが、東京大学は紹介します。ご承知のように、最初文科I類、II類、III類、理科I類、II類、III類、そして昔のイメージでは、文Iは法学部等々、割と決まった学部選択が自動的にされておりましたが、今は進振りといって、かなり専門を詳細に決めないで入ることができるようになっております。私はこういう議論をしたら、特に専門的にこの知識をお持ちの先生方の一

部に、それは予備校の意見ではないか、あるいは進学する高校の意見ではないかという批判をされました。

そこで私は今、入試説明会に行き、早期にある程度専門を決めることの人生における重要性を一生懸命説明しております。しかし、あえて申し上げますと、そう説明しながらも思います。やはり京都大学が、例えば工学部物理工学科を最初から選ぶことを高校3年生にさせるという方式そのものが本当にいいのだろうか。決して東大がよくて京大が悪いという単純な話ではありません。進振りで、例えば理Ⅲに入って勉強しなかった学生が——あえて問題発言しますが——医学部へ行きたいんだけど、どうしても理学部しか行けないので、試験場から逃げたという話も聞きました。このような話を含めて、今、東大もいろいろな問題を抱えております。先ほど総長が「unlearning」という表現をされたのに気がついた方がおられると思いますが、実は東京大学は1年生も必死に勉強します。それは進振りのためです。それが本当にいいことかどうか。むしろ京都大学が1年間のんびりと、高校で勉強したことをみんな捨てるようなunlearningの期間として設定するほうがいいんじゃないかという議論もあると思います。

しかし、とにかく今、入ってきた学生は昔と比べて相当大きく違うのだという認識を持って、それをどのように育成していくかということが、かなり大きな喫緊の課題であることだけは言えると思うのです。

具体的に言うと、東京大学はこういう形で、さらに後期に関しては、入った後どこでも選べるというようなやり方をしています。進振りの話は省略します。

東京大学は、先だって実態を調べてきましたが、初年次活動センターをつかって、何をやるかということ、ここにご覧のように、サイエンスカフェ、公開オフィスアワー、学習相談、心理教育、初年次活動に関する授業、次は笑える話で、教職員と学生との昼食会。(笑) どう思われます?そんなみんなやったらと思われませんか。

東京大学は一つやっぱり違う点があって、本当は多くの先生はこれはあんまりやりたくないようです。ただ、教養学部というのがある関係で、教養学部の先生はやむなくこれを必死にやっておられます。間違いなく。ここが京都大学の違いです。

北大が入試を変えます。40%を最初の段階で、理系とか文系ということだけを選んで、あと2年後に学部を決めることをやります。そういう状況で、これをするにはすごい大変な労力を要します。話を聞いたら、北大はすごい激しい議論があったそうです。しかし、大学へ入る時点で詳細な専門を決めることができない学生がどれくらいいるかという調査をして、そのもとに、40%程度は後で決めたらよい総合教育部をつくることにしました。

今申した初年次教育というのは一体何をやるかということ、昔の発想だったら笑えてくるような発想です。大学生活への適応をどうやってするかを教えるのです。もちろんこれは、極端なことを言うと、「大麻はよくないですよ、法律を守りましょうね」とただ口で言うだけではなくて、大麻の害から子供たちを守るためにはどうしたらよいかを検討することです。

一部興味深いのは、自校教育。アドミッション・ポリシーをやって、評価がこういうことをやるのが本当にいいかどうかわかりません。京都大学に入った学生が、1年後に京都大学の基本理念は何か知っているかと言われると、ほとんど知らないと言うと思います。「自学自習」くらい言うかもしれませんが、その前の「対話を根幹とする」は言わないと思います。

そういうことで、自校教育をやるんです。これも議論があるでしょう。そんなことは必要ないという議論もあれば、やはり自分の大学に誇りを持って、将来長い人生、京都大学を卒業したことについて、自分がどのように考えるかということ、ある時期割いていろいろ考える時期が必要でしょう。今回は学士課程教育なものですから、あえて言いませんが、はっきり言って、この大学はドクターをつくり過ぎたという無責任なことを言っている人がたくさんいます。ドクター一定員を増やし過ぎたと言っている人がいます

し、就職状況は決してよくありません。

キャリアサポート教育、キャリアプラン、自分の人生をこれからどういうふうに考えていくんだということはある程度意識的に考える時期、そういう教育も必要でしょうということです。

結論。ぜひ今回議論でお願いしたいことは、実は私の過去の経験から申し上げます。放っておいたらうちの大学は結構優秀な人が育成されます。だから、それはそれで放っておいてもいいという考えも一つの方法だと思います。

しかし、底上げをする必要があるんじゃないか。ただ、これも例えば今、法科大学院は週15回の授業をしっかりとやるための準備をしておられ、しかも教育内容については実にしっかりした教育をしておられます。法学部長がおられたら叱られるかもしれませんが、私は法学部ほどええかげんな学部はないと以前偏見を持っておりました。すみません。そうではない、最もしっかりした教育です。

理学部。これもうるさい先生ばかりやと思っておりましたが、最も学士課程の教育のあり方について、熱心に議論をしておられるのは理学部ではないかと思えます。

経済学部。まだわかりませんが、今年から1年生に対して、さっき言ったような初年次教育をするための準備をしておられます。

医学部。今日来ておられますが、教育担当の教授がおられます。ほかの学部にこういう方はおられません。これも皆さんご存じだったでしょうか。

そして、それぞれの部局で教育のことを、例えば教科委員長とか、教務委員とか、順繰りに2、3年でぐるぐる回るのはなくて、一生教育をなりわいとする、担当する、そういう先生を配置することもあってもいいのではないかと思います。

組織の問題、考え方の問題、いろいろございます。本学では、全学共通教育についてもいろいろ説明をしたいと思っておりましたが、時間の関係で飛ばします。

最後に繰り返させていただきます。同じ大学にいながら、恥ずかしながら私も数年前までそうでした。他の先生、教職員を知らなさ過ぎるということはないでしょうか。これはちょっと恥ずかしい経験で、先だって東京大学教養学部の先生方と話をしたときに感じたことです。

教養学部は——余談とさせていただいて結構です。駒場寮廃寮にあたり、全員の先生が協力しました。なぜかという、駒場寮は教養学部の寮だったからです。皆さん嫌々協力しました。一部嫌な人はやめました、という話を聞いてきました。当然先生方同士、大変よく知っています。文系、理系関係なしに。ちょっとスタイルが違う総合人間学部、いかがでしょうか。失礼な言い方をしました。あまりにも教育の話題、皆さんとても熱心なんです。いろいろご意見をお持ちなのです。

ところが、その議論が交流がない、交換がされないことが、今回私の問題提起としてお願いしたい論点でございます。

(拍手)

学士課程教育を再考する

第II期中期目標・中期計画の実現に向けて

問題提起
 京都大学理事・副学長
 西村周三

第II期 中期計画・中期目標案

- ・ アドミッション・ポリシー
- ・ 教養教育の充実
- ・ 成績評価→単位の実質化
- ・ 全共→専門の継続性
- ・ FD
- ・ 学習・研究支援機能の強化
- ・ 学生支援 (1) 相談・助言体制
 (2) 進路選択
 (3) 経済支援 特に博士学生
 (4) 福利厚生施設

当面の重要課題

- ・ 単位の実質化
- ・ 初年次教育
- ・ 教育の国際化
- ・ 情報教育のあり方
- ・ 学生生活・学習支援のあり方
- ・ 入試について

第I期 中期目標・中期計画への反省

- ・ 「評価」に対してうしろ向きでよいか？
- ・ 「目標・計画」とは別に細目を作成中
- ・ 全学的な取組はどこまで・・・
- ・ 中教審答申に対する批判的検討の必要性
- ・ 日本全体の大学・学生の平均像を捉えた答申

入試について

- ・ 学生の気質等の変化に対応し、各大学はかなりの教育改革を打ち出している。
- ・ 例：入試科目
- ・ 例：学部ごとの入試→大枠の括り
- ・ 私の「入試説明会」での経験から
- ・ 初年次教育との連動

東京大学の募集人員(H22年度)

科類	計(人)	前期日程 (人)	後期日程 (人)
文科一類	3061	401	100
文科二類		353	
文科三類		469	
理科一類		1108	
理科二類		532	
理科三類		98	
計		2961	

東京大学の状況

科類	計(人)	前期日程(人)	後期日程(人)
文科一類	3,061	401	100
文科二類		353	
文科三類		469	
理科一類		1,108	
理科二類		532	
理科三類		98	
計		3,061	

進学振分けとは何ですか。また「指定科類」枠、「全科類」

枠とは何ですか？（東京大学）

東京大学では、入学時にはどの学部・学科に所属するのは決まっています。1・2年生時は、駒場キャンパスにある教養学部前期課程に所属し、専門に特化しない幅広い授業を受けることとなります。そして、2年生の夏学期までに、3年生で進学する学部と学科を、本人の希望と成績により決定します。これを進学振分けと呼んでいます。

進学振分けは、特定の科類からの進学枠を指定した「指定科類」枠と、科類を指定しない「全科類」枠の二つの枠によって行われます。

(1)「指定科類」枠

①進学先の学部と基本的な対応関係にある科類枠

②基本的な対応関係にはないが、特定の科類から一定数を学部として受け入れる場合の枠

(2)「全科類」枠

すべての科類からどの学部にも進学できる枠

北海道大学の状況

1 北大の入試が変わります

「あなたはどの学部で何を学びたいですか？」
この問いに対する明確な答えをもち、勉強に励んでいる高校生は、そう多くはないのではないのでしょうか。

今までの北大の入試は、受験時に「学部を決める」方式でした。しかし、現実的には、特定の学部にとどまらず北大に入ることを優先させ、入学後も「本当に自分が学びたいこと」を見いだせなかったり、「本当に自分が学びたいこと」と「所属する学部で学べる内容」が合わず、悩んだりする学生も少なくありません。

そこで北大は、「入学後に学ぶ内容や所属したい学部を決めたい学生」のために、入学してから1年間、自分が本当に学びたいことは何なのか、将来どのようなことができるのか、どの学部が自分に合っているのか、を十分に考えた上で学部・学科へ移行することができる、「総合入試」を導入することになりました。時間をかけてとことん考え、納得した上で学部を決めることができるため、充実した学生生活をおくることができ、そしてその先にある将来の選択に関しても、満足いくものとなるでしょう。

また、すでに「将来学びたい学部がはっきりと決まっている学生」のために「学部別入試」も設けております。
受験生のみなさんの状況に応じて入試方法を取り入れ、北大の入試は変わります。あなたに一番合った入試方法で受験してください。

初年次活動センターについて

初年次活動センターは、教養学部前期課程学生を主対象に、初年次活動(*)を展開する拠点として、2008年10月に開所しました。同センターではこれまでに、サイエンスカフェ、公開オフィスアワー、学習相談、心理教育、初年次活動に関する授業、教職員と学生との昼食会等の初年次活動プログラムが催され、今後とも学生に対する多様なサポート事業が実施されていく予定です。

(※)大学という新たな環境への適応を促進することで、学生の社会的・学問的経験をより充実させるべく、新入生を主対象に展開される教育プログラムを「初年次教育」と言い、世界各国の大学教育で重要な位置付けがなされています。「初年次活動」は、正規の授業にとどまらず、学生生活の様々な側面も視野に入れた初年次教育の取り組みを指します。



北海道大学の事例

3 初年次教育のカリキュラム

- 総合入試で入学した者は、学部別入試で入学した者とともに、初年次の1年間、総合教育部に所属し、学生生活を過ごします。
- 総合教育部では、文系・理系ごとに共通のカリキュラムにもとづいて、充実した教養教育・基礎教育を学びます。
- 学部や学科で学ぶ内容を幅広く紹介する授業を設けるため、総合入試で入学した者が学部や学科を丁寧に選択できます。

4 理系の選抜群

- 理系の総合入試では、受験生の選択数を増やすために、5つの選抜群を設けています。
- 選抜群ごとに、理科の科目と数学の配点を特色もたせていますので、受験生の得意とする科目を活かした受験が可能です。
- 選抜群は、入試の区分です。選択科目やどの選抜群で受験したかということとは、入学後の学部・学科移行には影響しません。

北海道大学

- ・ 約40%を「総合入試」

初年次教育

- ・ 大学生活への適応
- ・ 大学で必要な学習技術の獲得
- ・ 当該大学への適応・自校教育
- ・ 自己分析
- ・ ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入
- ・ 学習目標・学習動機の獲得
- ・ 専門領域への導入

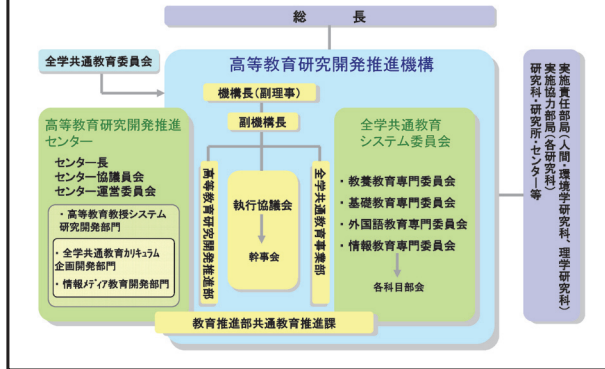
誰を対象とするか？

- ・ トップクラスだけを対象とすればよい？
- ・ 底上げ → 学習意欲の向上
各局で真摯に対応しておられるが、残念ながら情報交換を十分でない
法科大学院、理学部、経済学部
医学部（教育担当教員の配置）

本学では・・・

- ・ 組織の問題として
高等教育研究開発推進機構の強化
入試に関して
国際化との関連 ← 国際交流推進機構との関連、G30、クイネツ
- ・ 考え方の統一
部局間・全学との交流
例：独立研究科との連動
例：「専攻」の意味

本学における全学共通教育の実施体制



全学共通教育委員会

第5条 京都大学の全学共通教育に関する重要事項について審議するため、全学共通教育委員会(以下「委員会」という。)を置く。

第6条 委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 教育担当の理事
- (2) 高等教育研究開発推進機構長
- (3) 高等教育研究開発推進機構副機構長
- (4) 各研究科長
- (5) 教育推進部長
- (6) その他総長が必要と認める者 若干名

執行協議会

第15条 機構に、その管理運営に関する事項を審議するため、執行協議会を置く。

第16条 執行協議会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 全学共通教育の企画、運営および実施に関すること
- (2) 機構の教員の人事に関すること
- (3) 全学共通教育に係る予算に関すること
- (4) 全学共通教育に係る施設および設備に関すること

第17条 執行協議会は、次の各号に掲げる協議員で組織する。

- (1) 機構長および副機構長
- (2) 実施責任部局の長
- (3) センター長
- (4) 全学共通教育システム委員会専門委員会委員長
- (5) センターの教授 若干名
- (6) その他機構長が必要と認めた者 若干名

全学共通教育に関する委員会

- ・ 全学共通教育システム委員会
- ・ 教養教育専門委員会
- ・ 基礎教育専門委員会
- ・ 外国語教育専門委員会
- ・ 情報教育専門委員会
- ・ A群科目部会
- ・ B群科目部会
- ・ D群科目部会
- ・ 少数教育部会
- ・ 数学会
- ・ 物理学部会
- ・ 化学部会
- ・ 生物学部会
- ・ 地学部会
- ・ 英語部会
- ・ 初修外国語部会

むすびに代えて—お願い—

- ・ あらゆる場で、(特に他部局の)教職員で、「教育」を話題にし、情報交換をして欲しい!
- ・ 同じ大学にいながら、他の先生・教職員を知らなさすぎる。
- ・ おそらく多くの問題意識が生まれる。
- ・ 現状は、あまりにも一部の人のしか教育を話題にしなさ過ぎる。

6. 問題提起2

高等教育研究開発推進機構長 山本行男



松本先生と西村先生から、非常にまとまって、内容も深く突っ込んだ問題提起がありましたので、私はここではそれのおさらいということで、分科会を始めるに当たって、各分科会ではこのような議論が進められる予定ですよというを紹介したいと思います。

これが皆さんのお手元の資料にもあります分科会のテーマ、6つ挙げてあります。こちらの進行を担当していただける先生方に問い合わせまして、どのようなお話ですかというのを前もってお聞きしました。それをご紹介することによって、私のここでの問題提起にかえさせていただきます。

まず1番目は、単位の実質化等について。これは銚井先生、今井先生に司会進行していただきます。これは、現在教育制度委員会のもとにある調査検討部会の中で、シラバスの標準化、あるいはキャップ制、こういうことが議論されています。この中で、同じく中教審答申にある15週を確保する、それからキャップ制あるいはGPA、こういうことを同時にすることによって、本当に単位の実質化ができるのかどうか。そして、そういうことが本学の教育理念と矛盾しないのか。本学の実情はどうであるか。それから、教育内容の実質的向上につながる制度とはどういうものかということをお聞きしてまいります。これが1番目です。

2番目、全学共通教育のあり方についての分科会では、八尾先生と田中先生に司会進行をお願いしています。ここは、研究所・センター・独立研究科の全学共通教育への参加は現状ではどうなっているか。提供科目、例えば基礎化学実験の指導をいただいております。それから、ポケゼミにおけるフィールド系の教育等々を出していただいております。こういうことに関して、現状はどうなっているか。これから望ましい形はどうかということをお話ししたいと思います。

もう一つ、全学共通教育における実施責任部局のあり方。総合人間学部、あるいは理系科目における理学部、これの責務はどこまであるのか。あるいは権限はどこまでなのか。そういうところと、私が所属しています高等教育研究開発推進機構及び高等教育研究開発推進センターとの関係はどういうことなのかということをお話ししたいと思います。

3番目、これは私が司会進行します初年次教育について。これは今、西村先生からかなり詳しくありましたので、パスします。

4番目、教育の国際化について。松本先生からも非常に丁寧にご説明がありました。これに関しては、国際交流センターの森先生、長山先生、河上先生に司会進行をお願いして、学士課程の教育国際化の経験と課題について。KUI NEP科目、それから国際交流科目、KCJS/SCTI講義の現状がどうなっていて、これはどうあるべきなのか。それから、海外大学との遠隔講義はどうあるべきかということをお話しいただき、それから、教育の国際化の将来展望についてお話し合いをいただきます。

特に、K. U. PROFILE、これは松本先生から紹介がありましたG30によって、京都大学が立ち上げたプロジェクトです。これが採択されて、準備を来年度からやっていき、再来年度からは学生さんが

やってきます。これにおいて、留学生の日本語、日本文化の教育はどうすべきかと。それから、学士課程の教育、国際化とFD、これはどうあるべきか。それから学生の短期派遣、受け入れの課題について話し合っていたかというように伺っています。

5番目が情報教育のあり方について。情報学研究科の田中先生に司会進行をしていただきます。これは、高等学校における情報教育がどうなっているか。それから、京都大学における全学共通教育としての情報教育がどうなっているか。そこには、私は非常にびっくりしたんですけれども、未履修というのが情報においてもあるらしい。こういうことについて調査をされております。それに関する議論をいただくことになっています。

それから、大学における情報教育の目的、意義について。さらに、かなり具体的で突っ込んだ話ですが、現在の科目群の中から独立させてI群というのをつくってはどうか。現在はA群、B群、C群、D群というような授業科目の分類がありますが、一応B群には入っているのですが、どうも情報教育はそういうふうなところに押し込められるべきでなくして、1つ群として立ち上げるべきではないかというお話を聞いています。

それから、情報教育と国際化と情報化についての話を深めていただけるということです。

6番目、これも西村先生、松本先生のお話にたくさんありましたので、今さらご紹介することもなからうかと思いますが、学生生活・学習支援のあり方。理学研究科の河野先生に司会進行をしていただきます。

学習意欲がわからない、あるいは授業が理解できないという学習上の問題を生じている学生さんに対する対応はどうあるべきか。それから、学生生活に対する悩み、進路、就職に関する悩み、これに関してどういう具合に対応するか。最近の学生相談の状況から見て、学生の悩み、学生とのかかわり方についてお話し合いをしていただけることになっております。

以上、簡単ですが、ここでもう一度6つの分科会の内容をおさらいして、皆さん方にそれぞれの分科会で深い議論をしていただき、それがまたまとまって、あしたのパネルディスカッションでは全体の議論の中に盛り上げていくように、私がここでご紹介させていただきました。ありがとうございました。よろしくをお願いします。

(拍手)

中崎 ありがとうございました。ご存じのように、大変時間が押しております、本来ですと、ここでコメント、質問等をお受けしないといけないだろうと思います。もしよろしければ、特別何かご発言をしたいという方がいらっしゃったら別ですが、質問等につきましては、明日のパネルディスカッションでフロアからの質問、コメント等について十分お受けしたいと思いますので、そちらのほうでさせていただくことでよろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして、全体会を終了させていただきます。

次の分科会討論ですが、大変遅れておりますので、14時40分をめどに開始ということにさせていただきます。

(休憩)

分科会を始めるにあたって

2009年9月24日

高等教育研究開発推進機構 山本行男

分科会テーマ

- ① 単位の実質化等について
- ② 本学における全学共通教育の在り方について
- ③ 初年次教育について
- ④ 教育の国際化について
- ⑤ 情報教育の在り方について
- ⑥ 学生生活・学習支援の在り方について

① 単位の实質化等について

- ▶ 司会進行: 銚井教授(工)・今井教授(理)
- ▶ 教育制度委員会 教育制度調査・検討部会
ワーキング・グループ2で議論
 - シラバスの標準化
 - キャップ制
- ▶ 中教審答申にある15週確保, キャップ制・GPAの導入で本当に単位は実質化できるのか?
- ▶ 本学の教育理念とは矛盾しないか?
- ▶ 本学の実情はどうか?
- ▶ 教育内容の実質的向上に繋がる制度とは?

② 全学共通教育の在り方について

- ▶ 司会進行: 八尾教授(理)・田中教授(工)
- ▶ 研究所・センター・独立研究科の全共教育への参加
 - 現状はどうなっているのか?
 - 提供科目
 - 基礎化学実験 指導応援
 - ポケゼミにおけるフィールド教育
- ▶ 全共教育における実施責任部局の在り方
 - 責務はどこまで? 権限はどこまで?
 - 教育推進機構・教育推進センターとの関係は?

③ 初年次教育について

- ▶ 司会進行: 山本教授(高等教育)
- ▶ 高校から大学への円滑な移行教育プログラム
 - 学習意欲の向上・持続
 - 本学にふさわしい自学自習のあり方
 - 学生生活上の留意点
 - 進路選択
- ▶ 本学の状況
 - 全学共通教育
 - 学部教育
- ▶ 文系学生に対する理科基礎教育・教養教育はいかにあるべきか?

④ 教育の国際化について

- ▶ 司会進行: 森教授・長山教授・河上准教授(国際交流)
- ▶ 学士課程の教育国際化の経験と課題
 - KUINEP科目・国際交流科目・KCJS/SCTI講義
 - 海外大学との遠隔講義
- ▶ 学士課程の教育国際化への将来展望
 - K.U.PROFILEにおける学士教育
 - 留学生への日本語・日本文化教育
 - 学士課程の教育国際化とFD
 - 学生の短期派遣・受入れの課題

⑤ 情報教育の在り方について

- ▶ 司会進行: 田中教授(情報学研究科)
- ▶ 高等学校における教科「情報」の動向と京大における全学共通情報教育
 - 教科「情報」の未履修問題
 - 教科「情報」の学習指導要領改訂
 - 京大における情報教育の現状と新入生アンケート
- ▶ 大学における情報教育の目的・意義について
 - 科学技術研究における情報学の素養とITスキル
 - 論理思考, 情報, 英語の3本柱
 - 情報セキュリティ・倫理教育の問題について
 - 大学院における情報教育とは
- ▶ 情報教育のI群化について
 - 情報教育の科目区分(B群/AB群, 基礎/教養, 情報I/II/III類)
 - 科目区分の独立化(I群化)
- ▶ 情報教育の国際化と情報化
 - 教育の情報化とFD
 - 教育の国際化(英語による全学情報教育)

⑥ 学生生活・学習支援の在り方

- ▶ 司会進行: 河野教授(理学)
- ▶ 学習意欲がわかない, 授業が理解できないなどの学習上の問題への対応について
- ▶ 本学の学生の悩みの中で最も多い, 進路・就職に関する悩みへの対応について
- ▶ 最近の学生相談の状況などからみた, 学生の悩み、学生へのかかわり方などについて

パネルディスカッションに向けて

- ▶ 6分科会それぞれから1名のパネラー。
- ▶ 分科会で議論された内容に基づき、パネラーから問題提起。
- ▶ それぞれに対して、全体で議論を深める。
- ▶ 全体についてさらに討論して、京都大学の教育の在り方の方向性を探る。
- ▶ 上のような流れを想定して、分科会での活発な議論をお願いします。

7. パネルディスカッション

山本 定刻になりましたので、全学教育シンポジウムのパネルディスカッションを始めたいと思います。

ご登壇いただいた先生方は、昨日の各分科会のとりまとめをされた先生方、あるいはそれをサポートしていただいた先生方で、今日はその分科会の内容をご報告していただくと同時に、そこにとどまらずに、分科会のディスカッションを深めていただきたいというようにお願いしたいと思います。

まず、第1分科会から報告いただきます。

今井 第1分科会は「単位の実質化等について」という

テーマです。単位の実質化と単位制度の実質化は違う概念だと言われますが、この分科会の名前は幸い単位の実質化という名前になっています。議論のフローですけれども、最初に座長の銚井先生から趣旨説明がありまして、いくつかのテーマについて議論いたしました。一つはシラバスの標準化ということですね。これは教育制度委員会の検討部会、ワーキンググループでもってシラバスの標準モデルというのをつくりましたが、これをめぐって議論いたしました。



それから実際の学生の学習の実情、これを高等教育研究開発推進センターの溝上先生から報告をいただいて、それについて議論し、それからキャップ制については法学部の洲崎先生から、実際の法学部での実情をお話いただきました。それから評価の結果、これは成績評価のことですが、山本課長から同志社大学の例をお話いただいて議論しました。最後に、外形的な問題というよりむしろ教育の実質化をどうするかということで、理学部の現状の話が私が出ました。そういったことが議論の対象でございます。

まず、中期計画・中期目標は、西村理事のもとに各部局からいろんな意見が出て、西村先生、ずいぶんご苦労されたと思いますけれども、その結果、我々が決めたことであるということで、この第1分科会に関係したことで、体系的に京都大学の適正な成績評価を行うという目標のもとに、シラバスを整備し、多角的な観点を踏まえて学習成果を客観的に評価する。これを達成することは我々の義務でもありますし、そういった観点でシラバスの標準化に取り組んだわけがあります。

もう一つ、中教審答申に関しては、平均的な大学を絵にしたものであって、我々の大学が必ずしもフォローするものではないということは、議論がありますけれども、一応ここで「単位制度の実質化」という言葉を使っているのですが、キーワードの、シラバス、 Semester制、キャップ制、GPA（グレイド・ポイント・アベレージ）、それから1単位45時間学習ということが言われていることに対しての我々の考え方がどういうことかということです。

この教育制度調査検討部会、ワーキンググループの検討結果が最初に銚井先生から報告されまして、標準的なシラバスのモデルを3例提示されました。これは15回、講義を念頭に置いて、授業計画が非常に大きな問題なのですが、15回という厳格な書き分けということは必ずしも必要ではないのではないかと



ことで、いくつかの例をあげて、実質的にそのことが記述されていると、これについては、ずいぶんたぐさんの議論がございました。

単位の実質化ということについては、ワーキンググループの議論が、キャップ制については割合慎重な意見、それから45時間学修という問題については、15時間が授業で、そのあと30時間ぐらいを予習・復習に使いなさいということですね。これについてはいろいろ議論はありましたが、検討部会、ワーキンググループでは、まずは15時間の授業確保を優先すべきだろう。それから公平な成績評価については、少なくとも教員間での情報公開ということがワーキンググループでは意見がかなり一致しているということ。教育の実質化ということでは、講義と演習の連携などでの学修支援、要するに30時間、予習・復習といったことに対応する学修支援が必要ではないかという議論もされているということが報告されました。

まず、シラバスの標準化ですが、これはすべての教員が書くということで、すべての教員に「書け」と説得できるかということが議論になり、私も、なるほどこのシラバスということについては、教員全員が書かなければいけないということで、かなり影響が大きいものだということを感じました。一つには体裁を整えるだけではないかという議論もございました。実際学生がシラバスで選んでいるか。あるいは米国の大学は一つの科目に数ページにもなるシラバスがある。これとは全然、標準モデルとはいえ違っているのではないかと。

こういった問題点が指摘されましたが、やはり一方、これは学生との約束である。それから他学部や外部への教育情報公開、科目等履修生、あるいはそういった人たちにとってはシラバスが非常に重要なものになっている。それから単位互換との関係ですね。ほかの大学との単位の互換には、どういう教育内容が行われているかということが一つ問題になる。それからここで標準モデルをお見せできないんですが、1ページぐらいのもので、たいして負担にはならないのではないのではないかとというのがおおかたの意見ではないかと思います。これは先ほど出ていた中期目標にもはっきり書かれておりますので、京大としてのシラバスの考え方をある意味で統一して、これを充実していくということについては、統一した理解が得られているのではないかと思います。

それから先ほどの学修時間45時間という問題で、授業外にどれだけ勉強しているか、授業にどれだけ出ているかという調査結果が溝上先生から提供されまして、これはちょっと見にくいですが、授業に出ている時間、京大生と、左は全国の旧帝大生で、だいたい16時間以上授業に出ているのが67%、これは意外と多いというのが皆さんの印象です。ところが、授業外学修時間を見ても、5時間以内が京大生で64%、京大生のほうが全国平均よりも少ないという結果が出ているのは非常に驚きで、京都大学のモットーは自学自習ということなので、自学自習の時間が少ないのは大きな問題だと。ただ、2回生でのサンプルということですので、卒業研究とかいろんなことがあるので、少人数教育がある4回生とかとはかなり違うんじゃないかという意見がございました。

それからキャップ制ですが、これは法学部の例が紹介されて、 Semester単位で2単位10科目に制限をするということです。そのことで、以前は勉強しないで試験を、数撃ちや当たる式で受けていたので、ひどい答案がいっぱいあって採点が大変だったということですが、キャップ制を導入することで、確かに答案の質が向上したというご報告がありました。これは法科大学院の試験とも多少関係があるかもしれないとおっしゃっていましたが、答案の質向上が見られる。それから学生の不満も多少はあるようですが、だんだん減ってきたという報告です。キャップ制は多くの大学で導入されているのですが、これはある程度制限を加えることで履修した科目を一生懸命勉強するということですが、その割に、ほかの大学ではキャップ制導入によって授業外学修が増えたかということ、必ずしもそうはなっていないというご報告もありました。この問題については、たぶん学部でかなり慎重な意見が多いようです。それはいろいろな理由

によりますけれども、学部的事情がかなり大きいのではないかという印象を持ちました。

それから成績評価の厳格化と公平化ということですが、同志社大学では成績分布をウェブで一般に公開している。これは楽勝科目をなくして学生の不公平感をなくす。特に非常勤講師の方が非常に多い場合には、成績公表がある意味で標準化ということにつながっていくと思います。特に共通教育クラス配当科目の公平化、教員の成績評価に対する考え方の自由度の問題と公平化の問題ということを考えますと、ワーキンググループでは、一般というわけではないですが、少なくとも教員組織へ成績分布を公表する、公開する。学生にも公開することも考えられると思いますけれども、あとは教員相互で、ある意味で議論したり、情報を共有するという意味で重要ではないかと考えております。

それから教育の実質化ということで、特に単位の実質化の本当の意味は基礎教育の実質化にあるんじゃないかということで、理学部の例をご紹介します。これは最近の平均的な意味での学力低下が背景にあって、どうしても勉強してもらわなきゃ困るという基幹科目の授業に、物理学教室の例では、一つの科目に5人のTAをつけて、授業と完全に連動した形で演習をさせることによって、より、自分で問題を解いて身につける訓練をします。基礎を身につけるのは一つの重要な教育の中身なので、物理学教室ではきちんと議論して、こういう形に持っていったということです。

京都大学の教育目標としまして「知的創造を担う研究者、あるいは社会における指導者を育成する」を高らかにうたっているわけではありますが、そのためには、知的体力をつけることと人間力という2つのことが教育としては重要なことだと思うんです。知的体力という意味では、思考力、計算力、読書力とか、そういう基礎を身につけるところは、これも自学自習でということですが、現在の学生の状況、先ほどの学修時間とかを見ますと、やはり自学自習を援助する教育が必要じゃないかと思います。これは私の個人的意見ですが、部局の教育はかなりそれぞれの部局でもって工夫しているということがあると思いますが、特に共通教育の課題として、そういう教育を考えていく必要があるんじゃないかということは思っているんで、そのためにはTAの活用といったことも増やしていくべきではないか。

それから人間力という意味では、少人数ということが大変重要になってくる。総長から吉田松陰の話がありましたけれども、教員の熱が生身で伝わる少人数教育は、人間力を育てる上で必要なことで、その過程で発表とか討論とか実習とかいうこともあり、部局での教育はかなり少人数教育のところもある。大きな部局は必ずしもそうでないかもしれませんが、共通教育の段階でもこういったことが必要ではないかというのが私の印象です。

以上でございます。

山本 今井先生どうもありがとうございました。ご質問もあろうかと思いますが、時間も押していますので、またまとめてあとの議論のところで皆さん方のご発言をいただくようにしたいと思います。

それでは第2分科会の八尾先生、「全学共通教育の在り方について」をお願いします。

八尾 ご報告します。私と田中先生で進行役を務めました。趣旨ですが、第2分科会では、特に第2期中期目標・計画のうちの第2項目、教育実施体制にかかわる部分について具体策を議論するということを目的にしました。普通、実施体制になると、負担が多いとか少ないということになりかねないので、最初に私から皆さんに「学生にとってどういう教育がベストなのか、具体的に考えていただきたい」というお願いをしておきました。

その進行ですが、2つの大きな部分に分かれてまし



て、前半は、研究所・センター・独立研究科等が全学共通教育にどのように参加されているか。この問題に関しては、以前の全学教育シンポでも取り上げられておりました、今回はいよいよ具体的にどうしているかという報告をしていただくことになりました。後半につきましては、まだまだこれからなのですが、実施責任部局の在り方についてです。

前半、3組の先生方に現状をご報告いただきました。まず化学研究所から、基礎化学実験を去年から担当していただいていますから、どのようにやっているか、あるいは現場の方がどういう感想を持つかということをお末先生と三原先生からご報告いただきました。2番目は、フィールド科学教育研究センターで熱心にやっていただいていること、3番目は、エネルギー科学研究科で、学部学生は所属していませんが、熱心にやっていただいているということです。

後半につきましては、今、実施責任部局であります人間・環境学研究科の堀先生と理学研究科の科長の吉川先生、それぞれにお話をいただきました。

まず化学研究所は、去年、平成20年度と今年度、それぞれ4名の教員を派遣していただいております。そのために事前にアンケートを研究所内で取られて、38名もの教員が「やってもいいよ」と答えていただいたそうで、その中で4名に来ていただいているということで、大変前向きな姿勢であります。若手教員をそういうところにつき込むのは、単に学生にとってだけではなくて、先生の教育にとっても非常によろしいのではないかと。それから化学研究所は非常にたくさんの方がおられますので、いろんな方が参加して、さらにもっと積極的に、もう少しきめ細かく教員を増やして、密着型の教育をやってもいいんじゃないかというご提案までいただきました。

次はフィールド科学教育研究センターの山下先生で、実にいろんなことをやっていただいています。私もちゃんと知らなかったんですが、まずこの研究所の学術モデルとしては森と里と海、そういうものの連環だとか、要するに自然界のインテグレーションというような学問だそうです。

教育モデルとしては、この頃学生がバーチャルリアリティといいますか、パソコンの中の世界に埋没しがちなので、フィールドへ連れ出すという大きなものです。ご提供いただいています科目は講義4コマで、年間700名、学生が文系・理系ほぼ半分ぐらい。またポケット・ゼミの講師の先生が13名おられますが、その人たちでなんと15科目のポケット・ゼミを担当していただいています。この15という数字は、京都大学全体のポケット・ゼミの1割以上にも相当します。さらに実習もやっていただいています。一つの川の源流から海に注ぐところまでを、一貫して総合して研究する、しかも実地で勉強するというのをやっていただいています。

そのために、実は外部資金を獲得していただいているということ、例えば日本財団からの助成を教員旅費に充てています。なおかつ寄附講座というのがあって、そこで、教育プログラムのコーディネーター役の人を雇っていただいているという、非常にすごい取り組みをやっていただいています。問題点としては、今言いました競争的資金がずっとあると保証されているわけではないから、今後どうなるかということと、遠隔地の施設を使うので、施設等も男女が同じところに泊まらなければならないというようなことも含めて、まだまだ大変なので、なんとかしてくださいということでした。

3番目は、エネルギー科学研究科の八尾健先生で、少し高いところから、全学共通教育の在り方ということをお話していただいた上で、エネルギー科学研究科がどういった講義を負担しているかということでした。少し端折りますが、例えば最先端を教えてもすぐ古くなるので、そんなことよりむしろ高校生が今まで一生懸命勉強していたものを、その学問に切り換えさせるとか、あるいは学問をする心を身につけさせるとかそういうのが一番の目的であるわけで、それを教えるべきだということでした。ご提供科目は、いわゆる34人問題関係もありますが、28科目もやっていただいております。以前はエネルギー何と

かというような、研究科の名前がついた一般設定科目というものでしたが、非常に受講者が少ないということで、むしろ、例えば熱力学のようなエネルギー科学にフィットする基盤科目へかなりシフトしていただき、先生方も学生も、ハッピーのほうに向かっていくということでありました。

後半ですが、人間・環境学研究科の堀先生は、これまで30年間非常に大きな貢献をしていただきまして、延べ1万5千人の学生とつきあってこられたということです。また、今後のことを考えるときに、変えるべきものと変えざるべきものがある、例えば人文社会学系について言いますと、個々の科目についてはそれぞれの先生のご都合とありますが、「群のくくり」という、例えば、人文系では5つ、社会科学では1つについては、変えてはいけない、それを変えるのだったら、時計台決裁するぐらい非常に重要なことであるとおっしゃっていました。

それから教養とは何か。人格の形成、あるいは自立する力であること、今後も責任部局としての義務を果たしていくつもりであるとおっしゃっていました。但しトルストイの言葉「足を組めと命令されるとその瞬間から苦痛になる」のように、強制されるとちょっといやだなということもつけ加えておられました。

第2部のお二人目、理学研究科長の吉川先生は、まず問題点を提供しましょうということで、平成3年にいわゆる大学基準の大綱化、つまりゆるやかにするというのですが、そのときにどういうことをやったかということ、教養教育について、京都大学と同じようなことをやったのが名古屋大学だと。実は吉川先生はその当時名古屋大学の担当研究科長であられたということで、名古屋大学では全学部が共通教育の責任を持つということを決めてから改組したのに、京大ではまず組織をつくって、あとでその負担をどうするかということ、順序が逆だった。どういう学生を育てるべきかをまずちゃんと考えるべきであって、要するに責任感を持ちなさいという辛口の感想でした。

もう少し具体的な問題としては、総人では教員減で、特に物理の教育にかなりの問題がある。具体的には初修物理学、文系の人々に対する物理学が手薄になっているということでした。それで総人と人環と理学だけが責任を取るのはやめましょう、全学で本当に責任を持ってやりましょうというご提言でした。

自由討論は、責任部局といってもこういう責任では納得いかない。なぜかということ、例えばA群科目としてこういうことを担当してくださいと全学に要求しても、なかなかやっていただけないというふうなご不満がありました。また「教養とは何か」とは決められないという考え方と同時に、何とか群の基礎を系統的に教えるべきであるという、ちょっと違う意見もありました。いずれにしても京都大学全体として、ちゃんとした責任組織があるべきであろうということです。

最後に私の個人意見ですが、まず現状と今後について、現状は、最初に言いましたように、研究所等、非常に前向きに取り組んでいただいているのは大歓迎でありまして、それに対して逆に学部学生を擁する研究科からの積極的な意見が少なかった。特に文系の方の発言が少なかったという印象です。1・2回生がどうであろうとも、そのうち自分のとこへ来るだろうからという安心感があるのかなあという感じでした。

今後につきましては、とりあえず機構が、私もここに属していますので、ちょっとあれなんです、そのコーディネーター機能を強化するのが一番早いのではないかと。教養教育については専門委員会とかがありますから、そういうところで検討する。

確かに文科系の科目は非常に多様性がありますので、大きな方向性の下に、「こうである」と一つに絞るのではなくて、複数のモデル化が望ましい。一応 path-integral 構想などと勝手に名前をつけました。ただし、多様性があるといっても、新入生にその多様性が本当にわかるのかという心配がありまして、新入生にも多様性がわかるように工夫していただきたい。個々の科目について区別できなければ、新入生にと

っては、「単にたくさんある」ということだけに終わってしまうという気がします。

山本 八尾先生どうもありがとうございます。皆さん各分科会では非常に熱心なご討論をいただいて、発表していただきたい内容はたくさんあるとは思いますが、全体の時間のマネージメントもありますので、目安として10分を、これから発表していただく先生方にはよろしくをお願いします。

それでは第3分科会の「初年次教育について」、西村先生、ご発表をお願いします。

西村 第3分科会です。初年次教育は、この分科会の前に必ずしも全体の理解が共通はしていませんでした。ただ、一種専門用語になりつつありますので、これはスライドにしていますが、まず座長の趣旨説明がありまして、そこで初年次教育の説明がありました。そして医学研究科の平出先生から、伊藤先生からは工学、菊谷先生から経済の事例を紹介していただきました。

平出先生が最初のスライドで使ったのは、まずいくつかポイントがあって、高校からの円滑な移行ができるように、初年期、まさに早い時期から、正確に言うところ入学後の数週間というか、もっと言うと直前にどういう教育をするかということです。余談を交えながら申しますと、入学式までのほうが効果があって、それからだんだん下がって行って、ほとんど連休明けにはやっても効果がないという話が出ておりました。これが一つ。

次は、学習と人格的な成長がポイントでして、これはあとで私がコメントを申し上げたんですが、知識を教える、あるいは学力を向上するという以外に、徳育、体育。実は私がこの3つをコメントとして申しましたら、こころの未来研究センターのベッカー教授から、「もう一つスキル教育、技育という表現がいいでしょうか」と提起がありました。こういうものを教えるということで、学習と人格的な成長、特に医学部に関しては、人の立場に立つてものごとを考えるという訓練をこの時期にやると効果があるというお話が、平出先生からございました。これが2番目です。

3番目に、初年次教育というのは、とにかくこの時期に思いつきで何かやるというのではなくて、かなりしっかり準備をして、総合的に考えられたプログラムのことを言うのだというのが平出先生の趣旨で、そういう趣旨で医学部の試みをご紹介いただきました。

続いて伊藤先生は、今、工学ではグローバル・リーダーシップ工学教育プログラムというのをやっておられて、これは教育GPの一環として予算をもらってやっておられるという紹介がありました。これも最初の時期、入学の直前から直後の時期の教育を指しています。ここでおもしろかったのは、他学部から質問が出て、「工学ではすでに親に成績を連絡している。そんなことをしていいのかどうか」という議論も出ました。

3番目。経済学研究科では、これは入学時期よりも少し長い、2単位ものに相当する期間の内容で、入門科目を教えるという事例のご紹介をいただきました。

以上、今の平出先生の話に関しては、若干徳育という話があったわけですが、全体として感じたのは、やはり現在部局では私の想像以上に行われていると思いましたが、同時に内容は、要するに自らの専門として選んだ学問のモチベーションを上げるために、その学問の体系がどのようになっているかという教育が中心であって、モチベーションと言っても、やる気を出すとか、そういう徳育に相当するところはないんじゃないか。あるいは、実はこの話はほとんど話題にならなくて残念なのですが、体育もこれから大事



なテーマではないかというコメントをさせていただきました。私のコメントに欠けていたのがスキル教育の話であって、これもあといろいろ議論になりました。

先ほどのお話にもあったように、これから少し人間力をどのように考えて本学で展開しているかというのが課題になると思いますが、残念ながらその後の議論の展開も、基本的には知力を重視して議論が進んでいました。

その一つの例として、今までの議論の紹介に、学生がもともと何を期待して大学に入ってくるかということの配慮がないんじゃないか。あるいは逆に、そこにギャップがあるという議論がありまして、これも大変重要なテーマだと思いますが、残念ながらこの議論についてはあまり深めることはできなかった。どちらかという、学生が何を学びたいかを重視したら、何も教えることがないということになったりするわけで、私としては、志とかそういうものをどうやって高めていくかという、学問的なこと以外も配慮した、もちろん学問的な内容の教育をセットで提供するのがいいと思いますが、そういう印象が少ししました。

それから後々話題になったことで、総長の最初のお話にもあったように、私も申し上げましたが、大学に入った時点で、一回高校で学んだことを白紙に戻して一から出直すという unlearning の意味について議論がされました。これも私の印象では、残念ながら煮詰めることができなかった。要するに、おっしゃった方に失礼ですが、極端な言い方をすると、とにかく放り出すことが unlearning だというのは、ちょっと違うような気がします。しかし、高校で学んだ学問と大学で学ぶ学問がどのように違うかということの思い知らせるような工夫はとても必要である。しかしそれは、「おまえたち、大学は難しいところだぞ」と言って、ポンと放り出すということでもないような気がするので、そのあたりが、例えばシラバスをちゃんと書くか書かないかということも含めて、お互い関係していると思うんです。これをこのあと詰める必要がある。

それから、今申したように3つの部局が熱心にやっておられるという前提で、初年次教育に関しては、いわゆる全共でやる必要はないかもしれないという問題提起もありました。部局でそれぞれお考えいただいたらいいんじゃないかという議論もありました。それはさっき申したように、医学部はもともとモチベーションが違う。はっきりお医者さんという職種に、もちろんその結果、基礎研究に行く人が少ないという問題を抱えておられますが、「お医者さんになる」というモチベーションがはっきりしているときの教育の仕方を、医学部ではっきりやることができるというちょっと特殊な事例でございますが、私の印象では、やはり学問に対するモチベーションを上げることに限っては部局の責任だと思っておりますが、もう少し全体的に今の学生の意向・動向を考えると、全体で初年次教育を考えていく必要があるんじゃないかとも思いました。

その点で話題になったことは、ちょっと順序が逆になっていますが、東京大学との比較で、東京大学は今「知の構造化」ということを言って、学問全体の体系が俯瞰できるような教育を初年次教育としてやっております。先ほどご紹介した工学の事例も、全体の工学部教育のプログラムをお組みになり、社会でリーダーシップを取っておられる方をお招きし、そこで全体のグローバル・リーダーシップを取れるような人間はどういう人間かということを探るようなプログラムを組んでおられるわけですが、もうちょっと突っ込んで、学問体系全体が俯瞰できるような、これは工学全体もしかり、物理学なら物理学もしかり、社会学という学問もしかり、そういう事例がありますが、どっちかという本学では、自然科学系に関してはある程度そういう試みが進行中だと思っておりますが、いわゆるA群科目については、必ずしもそういう動向はございません。東京大学はかなりやっております。これがいいかどうかという議論がかなり進みました。組織化された教育か、あるいは先生方お一人お一人の、言ったら全人格的な学生に対するぶつか

りあいを通して知育のなかで例えば徳育ができる、モチベーションを上げることができるといったような議論がありまして、このあたりも今後突っ込んだ議論をする必要がある。

もう一つ、大変おもしろい問題提起がありまして、これはぜひお伝えしておきたいことなんです。最初の段階で、おもしろい授業もあるし退屈な授業もある。それは、簡単に言ったら、おもしろくて将来役に立つものもあれば、おもしろくなくて将来役に立つものもあるが、おもしろくて将来役に立たないものもあれば、次は最悪で、おもしろくなくて将来何の役にも立たない。つまり我慢してもこれ以上我慢できないよ、聞いてられないよという講義もあると思うんです。今の話は私がつくった話ですが。そういうことで、そのことに対する配慮も必要ではないか。

具体的に言うと、今15週でやっておりますが、7週間ないし8週間で週2回講義する。あるいはもっと減らして週3回の講義をする。連続的にやっていく。それを集中的に4月の初めからスタートして、そこですべて意図的におもしろい、おいしい講義を見せるというのが一つの方法ではないか。これは全体の学生の学問に対する意欲を向上させることができるのではないかというような議論がございました。

これは制度的に、一見すると難しいように見えますが、よく工夫をすればかなりいけるんじゃないか。ただ、今の議論で大変大事なポイントは、かなり集中的に、しかも単なる1コマ、2コマの単発的な講演会のような、「おもしろいよ」という感じのものではなくて、かなりハードに週2回あるいは3回、例えば物理の講義を徹底的にやるわけです。そうしたら、ひよっとしたらついてくる学生がかなりいるかもしれないと思います。

最後に、これは実は最初の方に問題提起した話で、私の個人的な印象でございまして、以前から言われていることで、本学はおそらく放っておいても2割程度の学生、あるいは3割程度の学生はずごくがんばって自分で勉強する。問題はやはりその下のところで、両極分解が起きてきているという表現も結構ありました。つまり、どっちかというやや下が増えている。あるいはもっと極端に言うと、一番下は本当に放っておいていいのかというのものもあるし、そういうところの議論がチラッと出たんですが、本当はそれを突っ込んでやる必要がある。ただ、経営協議会で中期計画の話をしたときに、ややニュアンスとして全体の引き上げを図りたいというようなことを言ったら、ある委員が、「京都大学はやはりホームランバッターを出すほうがいいんじゃないか」という話をされて、ホームランバッターをたくさん養成することと、9人ともバントができたり内野安打を打ったりというような人を育成することと、それは両立するものでしょうかということ、私はわからないので日頃考えてます。

最後の話はちょっと個人的意見でございまして、そういう議論が展開されました。

山本 西村先生どうもありがとうございました。初年次教育の話題から始まりまして教養教育はどうあるべきかという話で、そしてシステム化のところまで議論を進めていただいたということです。

それでは田村先生お願いします。

田村 第4分科会、「教育の国際化」に関してご報告いたします。

今までは割と高邁なご議論が中心だったのですが、教育の国際化という割と具体的な話はいくつかあります。昨日の分科会では2つに分けてまして、前半は、これまで京大が特に学部学生に対してやってきた国際化の教育の経験、後半は、将来の展望という話をしました。最初は4人の先生、石原先生から竹安先生まで、4つの項目に関して話題提供があり、それぞれに関して質疑応答があったということで、順次その



内容を説明していきたいと思います。

最初のセッションの司会は国際交流センターの長山先生でしたが、ごく最近、欧州教育国際会議に出られたそうで、そこでもアジアでの英語の講義が議論になったということと、実はG30もヨーロッパに名前が聞こえていて、結構話題になっておるといようなご紹介がありました。

まず前半の4つですが、一つはKUI NEPであります。KUI NEPは皆さんご存じと思いますが、Kyoto University International Education Program というものです。要するに外国から来た学部学生に対して英語で講義をするという意味ですが、ちょうど京大が百周年の記念であった1997年、井村先生が総長のときに始まったもので、当時16科目で始まりました。

目的はいろいろあるのですが、当時の最大の目的は国際社会の形成に貢献することでした。ただ、そのときは完全な準備ができなくて、やや泥縄式に出発したところがあります。講義形式が、極端な場合、13人の先生が13回一人一人講義するというそんな講義もあって、出ていた学生さんから、「全然ストーリーがない」ということで批判がありました。そこで前委員長である鈴木先生のとときに改革を行いました。これでかなりよくなったということで、あまりクレームが出なくなった。現在24科目であり、中には名誉教授の先生も講義に参加していただいております。

このKUI NEPに関する課題と要望ですが、一番大きいのは、いわゆる講義担当をされている先生には、Duty科目でないことです。A群科目等になるんですけれども、これを担当したからと言ってA群科目の負担がなくなるわけではないというのが一番大きな問題であります。いわば現在は特殊な全共部分として位置付けされている。

もう一つは、留学生は3年生、4年生が中心であり、日本人は1年生、2年生です。こういう学生と一緒に講義を聞きますので、聞いている日本人学生と留学生との間に知識のギャップがあって、なかなか講義しにくいということがあります。

要望ですが、これはすでに議論されてきましたことです。すなわちKUI NEP科目は英語で提供する単なる全共科目だという位置付けになりますと、もっともっと提供してもいいという先生が出てきますので、現在の特異な全共科目ではなしに、英語でやる普通の全共科目という形にすべきだということです。そうすると提供科目もどんどん増えていくと思われまます。それと向こうの学生さんが3年生、4年生なので、KUI NEPの専門科目もあってはどうかというようなご意見がありました。

次は国際交流科目というのがあります。これも数年前に始まったのですが、京大の教室で講義したあと、1クラス14~15名の学生を先生が引率して海外に2週間ほど行って現地調査をしてレポートを書くという科目です。この中で水野先生がここ数年行っていただいておりますベトナムに関するご報告をいただきました。特にフエ大学を中心にやっています。目的は、知識を与えるというよりはむしろ、「感性を磨くこと」です。コストは2週間で、飛行機代と宿泊費が11万円でプラスお小遣い程度ですからそんなに高くはありません。これまで4年間で、水野先生が担当されたので60人9学部から行ったということでもあります。参加した学生のインパクトは計り知れないものがあります。昨日聞いたんですが、学生諸君はものすごい感動を受けて帰ってくる。要するに人生の考え方が変わったというぐらいの学生がいるそうでもあります。また、フエ大学の学生を西条に連れて行かれたのですが、西条市民とフエ大学の学生が仲良くなって、フエと西条市の交流が始まったというような波及効果があったと聞いております。

課題と要望ですが、課題としては、今はまだ参加人数に制限があって、コースが年間3つか4つぐらいですから、せいぜい4、50人しか行けない。もっともっと増やさないといけないということと、もちろん安全性の確保です。それから、これはものによれば交流プログラムとして、こっちから行くと同時に向こうからも来る。その場合の受け入れコストがちょっと高いということと、森先生がおっしゃったんですが、

「中期目標・中期計画に書くのだけれども、学生が感動するのはいいが、学術的な評価はどうか」ということがありました。

もう一つ、これはとても大きな問題ですが、コースの制限があるのは、実は受入れを増やせないというのが一つの問題点で、担当職員が少ない。つまり受け入れるためには担当職員がかなり忙しくなるので、とてもがんばっていただくんですけども、人数が少ないので、なかなか受け入れのコースが増やせないということから、この全体のコースが増えないというご意見がありました。

3つ目ですが、KCJS/SCTIというのがあります。皆さんご存じかどうかわかりませんが、KCJSはKyoto Consortium of Japanese Studiesと言います。これは全米の14の大学のコンソーシアムで、両方ともそうですが、40人ぐらいの学生が日本に数カ月来て日本文化を学ぶ。アメリカのハーバードなどの有名大学の学生ばかりです。もう一つはスタンフォード大学に特化したもので、技術系の学生が日本にくる。現在どこにあるかという、同志社大学にあります。以前は岡崎の動物園の横にありました。それから一時、今年の初めまで、実は京大会館にありましたが、それが京大から同志社大学に移転されました。

何をやっているかという、ここでやっている講義に京大生が聴講してもいいということになっております。これはとてもおもしろい。疑似留学ができるわけで、京都にいながらアメリカの大学の講義を聞くことができます。1クラス、向こうの学生が15人～20人の中に京大生が2～3名入るということで、全くアメリカ式の講義を聞くことができます。これまで180人ぐらいが参加しておりまして、最後までちゃんと単位を取るのが参加した人数の75～80%ということで、そこそこのがんばりを見せていることがわかると思います。

これの課題と要望ですが、今のところ一生懸命学生さんが勉強しても、A群科目でも何でもないので、単位にならない。でも、京大の全共科目と比べてというのは言い方がおかしいかもわかりませんが、学生諸君のやっていることは十分単位化してもおかしくないと思いますので、何らかの形で単位化すると、もっと行きたい学生が増えてくるだろうと思います。だから、全学共通でも、あるいは専門科目にしてはどうかということですね。

それと、これは京大生が恩恵を受けているんですが、両方の組織の学生さんにどんなメリットがあるかというのが不明確であります。向こう側の要望としては、京大での身分が欲しい。例えばメディアセンターでパソコンが使えるとか、インターネットが使えるとか、図書館が利用できるとか、あるいは京大での聴講を希望しているということがあります。

こういうことに対してまだ我々は応えられておりません。そこで、これに応えるための一つの方法として、教育制度委員会で検討している、「短期交流学生」という新しい制度を設けようということがあります。これは今までの組織になかった新しい交流の形式でして、学部・大学院にこだわらず、基本的には3カ月以下で京大に滞在する学生に身分を与える。そうすると、たとえそれが1週間であっても、留学生としてカウントできます。言い忘れましたが、G30では留学生の数を増やすのですが、そういう短期滞在の学生の数もカウントできることになりますので、我々にとってもありがたいことで、こういう制度をなるべく早くつくろうということになっております。

また、この2つの組織だけじゃなしに、いろんな大学がこういうことをやりたいと言ってきたので、それとも連動したらどうか。それと、吉川理事から「とりわけ日本人はディベート能力がとても劣っているので、そういうことを養成するには、こういうところで講義を聞いて質問とかするのはとても役立つだろう」ということをおっしゃっていただきました。

前半の最後ですが、これは遠隔講義であります。TIDEというのがありまして、京大とUCLAの間

の話です。これはなくなりましたが、現在では、台湾大学とやっておられます。竹安先生のおっしゃるには、何の支援もない。工学では、京大、北京大学、マニラ大学で進行中である。全共科目として載っているんだけど、竹安先生のイメージは、「勝手にやっている」というような評価しかもらっていないということで、シラバスを見ても、英語による相互交流科目であるという表示もないということでした。その点もう少し評価をしてほしいし、こういう特殊な科目であるということもきちんと表明してほしいという要望がありました。さっきの話とも絡みますけれども、日本人学生は全然質問しないということで、それを打破するためにもこういう科目が必要だということでもあります。

それと、ここでこういう要望が出たんです。課題かもわかりませんが、一つは学年歴、つまり学期の始まる時期が違うということです。9月で始まったり10月で始まったりということと、時差もある。特に強くおっしゃっていましたが、遠隔講義ですから、施設の設備を使います。メディアセンターの設備を使うんですが、夜が使えない、また土日が使えないということで、とても都合が悪いということでした。せっかくいい設備があるので、こういうものは夜でも土日でも使えるようにしてほしいということでもあります。

また、工学部中心ですが、E-JUSTというエジプトとのジョイントが始まりますが、そういうことも踏まえて、今後遠隔講義は増大すると思われるので、技術職員やTAの補強とか、今申しました設備の利用に関する障害をなくしてほしい、また、こういう科目を全共科目として認知してほしいという要望がありました。

以上が前半で、後半はこれから始まるものであります。これはG30の京大版であるK. U. PROFILEですけれども、工学部地球工学科で国際コースが始まるということです。平成23年4月から留学生30名を、日本人の定員を削って募集します。これはK. U. PROFILEで唯一の学部英語コースであります。発展途上国の社会基盤の充実に貢献するというものであります。これに関しては課題と要望があるのですが、優秀な学生が確保できるかが一番大きな問題であります。そのためにも、奨学金制度をつくってほしいとか、少なくとも授業料の免除等をぜひやってほしいという要望がありました。

次に国際交流センターの森真理子先生のお話ですが、こういうG30が始まると留学生が増える。日本語教育をどうするかということがあります。森先生はこれまで十分な経験をお持ちです。学部レベルでは毎年140名くらい講義しておられる。と同時に、日本で学ぶということから日本文化の理解も教えている。これまで日研生あるいはKUI NE Pも経験している。これはちょっと意外だったのですが、漢字圏の学生が日本語の上達が早いかということもそうでもない。むしろ漢字圏の学生は、最初はとても理解が早いんだけど、途中で壁にぶつかってしまうというようなことをおっしゃっておられました。そして、今後日本に来る学生は、日本語を第一外国語にできるかどうかということを確認してほしいというご要望がありました。

次はFDの話です。これは高等教育センターの田口先生からありました。FDというのは、我々はすぐ教員の講義のテクニカルな発達と思うのですが、実際はもっともっと広い意味である。FD as a teacherとか as a professionalとか、 as a person とかいうようです。もともとは、例えばハーバード大学では学部学生を教える大学院生へのサービスというようなものであって、決して教員向けのものではない。ハーバードではこういうFDの集会をしたあとよくパーティーをするそうですが、そのときに必ず何かものを食べるので、ハーバードではFDというと Food & Drink を指すということをおっしゃっているのがとても印象的でした。

日本は法令のもとに始まったが、とてもFD後発国であるということでした。省略いたしますが、今後学部の中で英語教育が始まりますけれども、そこでぜひFDの実施をしていただけないかということをお

っしゃっておられました。

最後ですが、先ほど申しました短期交流学生の話です。これまで京大にはたくさんの学生が短期で来ておりましたが、ほとんど実態がつかめておりませんでした。課題と要望として、身分を付与したい。そこで先ほど申しました短期交流留学生なるものをつくろうということになっております。

あと、実行体制ですが、これも大事です。それから受入れ職員を充実してほしい。これも先ほど申しました話であります。それから学生のボランティアサークルがあります。たくさんあるそうで活発なのですが、これをもっと有効に活かしたい。それから今後ますます多様化していきますので、短期交流学生をどんどん活用していきたい。これは文科省あたりでもそうですが、今後の国際交流・学際交流の主体は、長期の交流から短期の交流に移ろうとしておりますので、1週間・2週間を含めて短期の交流学生に視点をあてたような方策を考えなければならないということでありました。

まとめですけれども、森機構長が、「国際と教育の二つのことを分離させてはならない」とおっしゃってました。今日、私の前にしゃべられた方々の内容は教育でしたが、これと国際は本来つながっているものであって、分離させてはならないということです。今年、京大であったUAW (University Administrator Workshop) で、フィンランドの大学の方が「私の大学には国際部はない」とおっしゃいました。どういうことかと言いますと、これはバーチャルな組織であって、実際、国際部というのはなくてもうまく機能するのだというのが本来の大学の姿であるということをおっしゃってました。

山本 ありがとうございます。現在まで行われてきた京都大学における国際教育の成果と問題点をご報告いただき、次年度から始まりますK. U. PROFILEの課題、克服すべき問題点ということの議論を深めていただいたという報告をしていただきました。

それでは第5分科会の田中先生お願いします。

田中 情報学研究科の田中でございます。第5分科会は、ここでございますように「情報教育の在り方について」ということで、主に3つぐらいのポイントについて議論いたしました。それがこの内容でございます。情報教育、特に大学における情報教育は、高等学校で教科「情報」はございますので、これを皆さんがまじめに履修して、知識もしくはスキルを高等学校の段階で十分につけておいていただけるなら、話



は非常に簡単でございますけれども、実は高等学校の教科「情報」は、実質的にほとんど未履修である。ほとんどという言い方は少し語弊があるかもしれませんが、その問題がございます。

それとは別方向でございますが、再度平成25年から高等学校の教科「情報」の学習指導要領が改訂になります。これは必修科目でございますけれども、さらに実は内容の高度化が高等学校の段階で求められているということでございます。これに関しては、学術情報メディ

アセンターの喜多先生から、では、京都大学の新生はどうなのかということで、少しご報告をいただき、議論いたしました。

2つ目でございますが、今度は大学における情報教育でございます。情報教育の科目区分というところの議論が中心でございます。A群、B群、A・B群等ですね。現在の京都大学の全学共通の情報教育科目と申しますのは、A群であったりB群であったりA・B群であったりということで、まさしく文理両方の面にわたっているものであるということを表しているわけですが、基礎科目であるか教養科目であるかという議論もございます。さらに京都大学では、数年前から、京都大学の全学共通の情報科目とい

うものを、表に見える形で、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類というふうな分類をしているということですが、もうぼちぼちこの分類も持たないのではないかということで、ここでは少し思い切った議論をしております。情報教育科目をⅠ群、「Ⅰ」はインフォメーションという意味ですが、Ⅰ群化できないかということでした。

3つ目は、そもそもの話に戻るわけですが、大学における情報教育の目的、意義とは何であるかということ、それに関連いたしまして情報教育の国際化、情報教育の情報化について議論をいたしました。結論ではございませんが、大学における全学共通的な情報教育、何のためにやるかということで、いわゆる卒論、学生さんが卒業研究、修士の研究、博士の研究をやる。これは情報学の素養とITスキルは、分野を問わず学術研究を支えるものである、そのための情報教育という考え方がメインでございました。

基礎的な、いわゆる素養ということで何が求められているかというのは、別途情報教育専門委員会でも議論いたしましたことで、論理思考（クリティカルシンキング）、それから情報、英語、この3本柱の位置付けが重要ではないかということでございます。

一方、京都大学の構成員であるうちに、例えばソフトウェアの違法コピーであるとか著作権違反であるとか、そういうコンプライアンスの問題がございます。これをその情報教育の中でどう取り組むかというのが、情報のセキュリティ、倫理教育等々の問題でございます。そういうことを議論いたしました。

あと、十分に時間がなかったんですが、教育の情報化とFDの話等がございました。

簡単に今の3点ですが、どういう議論であったかということでございます。

未履修問題の影響ということで、入学生は情報という分野においても二極化しているということがございます。つまり大変よくわかっている人と、衝撃的でしたが、今年度の京都大学の1回生で、キーボードを使って英語の大文字を入れる入力方法を知らなかったという学生がおります。それからマウスを見て全く使い方がわからないという学生が何年か前におりました。そんなところは、京都大学の学生さんは優秀ですので、必要性を感じれば問題はないかと思えますけれども、明らかに二極化している。

それに対するハウツー教育ですね。いわゆるコンピューター、インターネットをどう使うのか、そういう教育は本来高等学校でなされるべきものでございますけれども、ほとんど実質的に未履修であるということもありまして、そういう学生がいるということで、では大学で補習教育をやるのかということになりますが、これについては分科会としてはあまり肯定的な意見がございません。ネガティブでございました。むしろアウトソーシングしていいのではないかと、そういうご意見がありました。

それから東京大学では初年次、これは1回生ですが、3年前に全面的に改定をされました。どういうことかと申しますと、全学必修でございます。1科目、情報という科目でございます。ですから、これにつきましては、2千数百人の学生が全く同じ内容の講義、全く同じ内容の教材でやる。しかも必修という形でやるということ。では、京都大学ではどうすべきかということでございます。当然この方式は京都大学ではやらないという大勢の意見で、ではどうするかというお話でございます。

それから初年次の、ここでの初年次というのは1回生の情報教育ですが、分科会での議論としては、高等学校で当然身につけているべきハウツー、使い方に関して、ばらつきがあるのはしょうがない。無視する。無視すると言ったら非常に乱暴でございますけれども、やはり大学では情報の科学的な理解、それから先ほどのコンプライアンスにかかわるような知識、そういうところの教育が重要であるというご意見が大半でございました。

また、今現在の京都大学の全学の情報教育のプログラムはさほど体系的なものではございません。トップダウンでデザインをしたものではございませんので、体系的な情報教育を受けたかったという先生方のご意見がずいぶんございました。

一方、分野を問わずプログラミング教育がやはり重要である。これは調査の結果でも、学生がやりたい情報教育の中で、プログラミングに非常に興味がある、学びたいというのが数年間の調査で出てきております。それから情報の収集、検索、分析、これは図書館にもかかわることですが、そのこのところのきちんとした教育が重要であるというご意見、あと、体系的な情報教育とはまた逆の立場ですけども、体系だけではない実践的なスキル教育の重要性も指摘されました。

あとは参考でございますので、お配りしております配付資料は昨日使いました資料でございます。ご覧のとおり、これは高等学校の情報ABCはこんな形になっているということでございまして、さらに平成25年度からは、ですから大学に平成28年度から新入生がこの新学習指導要領で入ってまいります。パッと見ますと2科目になっている。このうちの1科目を必ず履修するというので、どこがなくなったかと申しますと、ハウツーでございます。コンピューターの使い方、インターネットの使い方、これは中学生でいい、中学校レベルでいいという判断でございます。つまりさらに内容が高度化されているというところでございます。

ところが、非常に衝撃的な結果がこれでございます。喜多先生のレポートを少し編集いたしました。昨年度・今年度の1回生、これはかなりの回収率になっておりますが、「高等学校で情報系の科目を履修しましたか」ということに対して、まず非常に京都大学の学生は正直だと思いますが、「履修しなかった」が100名以上います。21年度はさらに増えているというふうなことでございます。これは実態として未履修がまだひどいということを表しているかと思っておりますけれども、そういうことに対してどうするか。

2つ目はI群化でございます。I群化に関しましては、情報科目はA群科目なのかB群科目なのかということで、先ほどの情報倫理、知財にかかわるようなものはA群的な科目としても、いくつかございます。本来情報教育は文系・理系横断的なものであるということ、それから分野を問わず基礎的な素養、スキルが求められるということでありまして、やはりI群という形で独立化すべきではないかということで議論いたしまして、分科会では、私自身も意外でございましたが、特にご反対がなくて、I群化でいいんじゃないかというお話でございました。ただし、やり方については議論はございます。

それから、ご承知のとおり全学共通科目の中でA群・B群等の科目に関しましては、各学部から学生にこの科目を推薦する、これを取りなさいというやり方を取っているわけですが、そこに余裕がございません。ですからA群としての情報科目を追加する、B群としての情報科目を追加するということに、余裕がございません。これもI群化を提案した一つの理由でございます。

さらに、東京大学ではたった1科目だけを1年生で全学必修ということですが、多様な講義を提供して学生に任せるという理念もございまして、おそらくその方式は京都大学では取れないということも含めて、I群化をやる必要があるのではないかとございまして。課題は実際にはそのような簡単な話ではないかと思っておりますが、I群化したときに、学部の卒業条件等々の話、これが一番重大な話になるかと思っております。

これは先ほどちょっと申し上げました、東京大学の、非常に波紋を呼びました、全く同じ内容、教科書も同じ、パワーポイントも同じ、試験問題も同じ、実は非常勤講師の先生が「勝手によけいなことはしゃべらない」というふうなことまでやって、全学必修にしております科目の教科書でございます。

最後に、「本来」ということで、情報教育の目的・意義でございますが、先ほど申し上げましたように、分野を問わず学術研究を推進するための素養、スキルであるという位置付け、構成員としてのコンプライアンス、これだけは守ってほしいということ、それから大学院における情報教育もリストアップして議論いたしました。副専攻的な科目としての位置付けができないだろうかということで、これに関しましては今年度から、これはパイロットプロジェクトだと私は考えておりますけれども、情報学研究科のほうで5

年間にわたりまして全学情報教育プログラムの実施、推進ということをやっております。

これはあくまで時限つきでございますが、現行の全学共通の情報教育科目は60コマしかございません。それを各部局がやや体系的でない形でご提供いただいているのが現状で、その中に依然コンピューターのハウツー教育がかなりの部分を占めているというところを変えようということで、学部、それから大学院のほうにもかなり力点を置いておりますが、現在は大学院の全学共通情報教育という概念は全くございませんが、それを研究科の科目として他部局に開放していくという形でスタートしております。ここにあげておりますのは次年度全面実施をするということで、今提供予定の科目名等を書いております。ここにございますように、コンプライアンス系という言い方がいいかどうかわかりませんが、情報と知財の扱いであるとか、社会における情報の取扱い等であるとか、ここらあたりは対応すると考えております。

最後に、このパイロットプロジェクトではよくFDということが言われますけれども、FDに使える素材は新しく生み出すものではなく、実際にその講義の映像、音声、講義の教材、こういうものを講義が終わった瞬間にこのような形で電子アーカイブできるものをすでに開発をしております。特にこのパイロットプロジェクトでは、こういう携帯型のものですが、ここで自由に見られるような形にしております。これをFDに使おうというアイデアでやっております、これについては大西理事から、これは特に英語による教育のとき、教員が自分自身の講義、もしくはほかの先生の講義の映像、音声等を見るということで使えないかというご提案をいただいております。

山本 田中先生ありがとうございました。

第6分科会の学生部長の富田さん。

富田 分科会長をされました河野先生が本日は都合がつかないということでしたので、私と教育推進部の中崎部長とで対応させていただきます。

進行は分科会長の河野先生をお願いをし、出席者は教員が10名、職員が15名、合計25名でした。



第6分科会では、まず学生さんがどういう問題を抱えているのか、そういった学生さんに対して教職員としてどう対応していくのかということで、3名の方々から話題提供をしていただいて、それに対する質疑、それから意見交換をするというようなことで進めました。内容的には3点です。「学生相談の現状と課題」ということで青木カウンセリングセンター長にお願ひし、「障害のある学生への支援」ということで、これは教育推進部と、青木センター長、それから「キャリアサポートの現状と課題」ということで鱸キャリアサポートセンター長にお願ひしました。

まず、「学生相談の現状と課題」ですが、年間500人延べ5,000件の相談を受けているということで、これは他の大学と比べても非常に多い、突出しているというご報告でありました。それから近年の特色として、親・教員からの相談も増加している。また、特に母親から父親に相談がかわるんですが、父親にかわるタイミングも近年非常に早まっているという特色があるという報告がございました。相談はよろず相談だと。

まず一つのケースとして、「なぜ卒業できないのか」。特に保護者からこういう質問が多い。「それは大学の指導が悪いのではないのか」というような質問が多々あるということもございました。それは、学生さんもそうですし、親御さんもプライドが高い。単位が未履修、取得単位が少ないといったことが、親に言えないというようなこともある。それは当然少子化も原因しているであろうということが報告されておま

す。

そこで、第3分科会でも触れられていたかと思いますが、まず親を早い段階で取り込むというようなことを考えてもいいのではないかと。成績表を親に送るということを考えてもいいのではないかと。これは東北大学ですでに実施をしているという報告もございましたが、ほかにもいくつかの大学ですでに実施しているというケースも見ております。それから、「授業料納付の連帯保証人に親になっている。私には成績を知る権利があるんだ」というような意見も多々あるということです。やはりこのあたりは何らかの工夫を考えていく必要があるかと思えます。

それから「就職活動をしない。なんとかしてほしい」。これもまた親御さんからの質問ですが、学部段階でオーバーペースで、それがだんだん意欲低下につながり、ひいてはうつ病等になっていくことがあるというお話があります。稀なケースとしては、親には大学院に進学すると説明していて、6年間で取得単位数がゼロだったというような非常に厳しいケースもあったということです。

やはり「挫折は悪いことではないんだ」というような教育が必要なのではないかと。これはどういうふうに進めようかという難しい問題だとは思いますが、一つのコースだけが進む道ではないということや、どのような形で教えるか。ちょっと難しいことかとは思いますが、そのような検討が必要であろうということだと思います。

それから研究者志向が強い。研究者になれずに挫折するケースがあるということですが、研究者志向は本学の特色ですから、これはどうしようもない話です。ただ、それに挫折をした学生に対してどのようなケアをするか。進路状況等を見れば明らかですが、特に文学部・理学部の学生にこのような状況が多いということで、これは低学年段階でのキャリア教育、特に1・2年生向けのキャリア教育の重要性というようにご意見が出ております。

それから総体的に言えることで、本学学生の場合、勉強はできるんだけど、人間付き合いが下手だ。携帯電話が最近普及し、あるいはインターネット、メール、そういったものの普及によって、人と人との付き合い、あるいはコミュニケーションがうまくとれない学生が、本学だけではなく、最近の学生の特色かもしれません。そういう部分が問題点である。それから本学の学生に特に言えることとしては、無理・無茶をしてしまう学生が多いというようなことで、いくつかのケースが報告されております。

それに対しては、持続可能なペースを保てるような工夫が必要であろうということで、例えば1・2年生については科目制限を設ける、あるいは卒業の総単位数を、124単位以上という定めがありますが、それに近づけるとか、そういった形をとりながら、なおかつ1・2年生での少人数教育の時間を増やすというようなことで、人と人が接する場を増やす工夫が必要ではないかというご意見も出ています。

一方で、やはり課外活動を学生さんにどんどん勧める必要もあるんじゃないかという意見と同時に、むしろ課外活動にのめりこんで正課がおろそかになるという例も報告があり、ここはちょっと学生さんの対応の在り方にも問題があるのかもしれませんが、総論的に勧めるべきではないかということです。

それから2つ目の問題点、「障害のある学生への支援」ということで、まず教育推進部から身体障害学生支援室の紹介がありました。昨日の分科会出席者の中では、約3割の方が知らないというお話でしたが、昨日出席した教職員、特に職員の場合には、同室は文学部東館の1階にありますが、耐震改修の関係で今一時移転して同じ建物に入っている職員が多いということで、知らないのが3割という程度だったのかもしれない。全体的にはもっと知らない方の割合が多いのかもしれない。

この身体障害学生支援室ではどのようなことに対応しているかと言いますと、身体に障害のある、また発達障害等の学生さんにも対応しているということですが、就学上のさまざまな悩みや相談に対応しています。所属部局とも連携しながら、例えば視覚障害者等に対するノート提供であるとか、必要備品の貸し

出し、支援学生との連携、教職員との交流の場を提供していくということです。現在、身体障害学生支援室で把握されている学生さんは約30人。2人の職員が対応するというので、今は徐々にノウハウを蓄積している段階であるという報告がございました。やはり2人というのが非常に厳しいということで、この体制の強化、あるいはハード面の体制の充実が必要であるという報告になっております。

発達障害、先ほどちょっと触れましたが、発達障害者支援法というのがありまして、広汎性発達障害、精神遅滞、学習障害、このあたりは聞いたことがあると思うんですが、広汎性発達障害は、発達に歪みがあって普通はしない特異な行動が見られる。例えば「あそこを見なさい」と言うと、1点を見据えてしまう。それから人と接する場合に、にらめっこをするような状況になってしまうというようなことも報告されました。精神遅滞は、発達に遅れがあり、スキルの習得に時間がかかる。それから学習障害、注意欠陥、多動性障害は、特定の分野について困難が見られるような障害だということです。

このような発達障害のある学生をどのように見つけだして支援をしていくのかが非常に難しいというお話でした。母子手帳等を見せていただくと状況がわかるということですが、なかなかそこまで見せていただくのも難しいでしょうし、どこまで踏み込んでいけるのかというところで、非常に難しい問題であるということでした。

もう一つ、身体障害学生支援室というこの名前が、発達障害の学生さんの来室を疎外しているんじゃないか、ネーミングをもう少し考える必要があるんじゃないかというお話もありました。

青木センター長は、以前から、発達障害学生支援センターといったようなものを設置して、発達障害のある学生さんを支援していく道をつけることが必要だということをおっしゃられます。これはあくまでも、この学生はこちらで、この学生はそちらでということではなくて、相談窓口を複数設けて、どこでもいいから相談に来られる体制をつくる。それで、連携して支援をすることが必要であろうという報告でありました。

3点目は「キャリアサポートの現状と課題」ということで、これはよく聞くことですが、キャリアサポートセンターで企業の方々と対応していて感じることとしては、本学の学生は非常にスキルが高いので、特に学力を求めるということではなく、「広い能力、仕事への意欲、あるいは人間性を期待しています」ということがよく言われております。ただ、そうは言いつつも、最近本学でも、うまく自分を表現できない、あるいは面接に弱いということで、就職活動等に失敗をしてしまう学生も多い。近年の厳しい雇用環境も反映されているとは思いますが、失敗をする学生もいるということのようです。相談件数は、平成16年度、このキャリアサポートセンターを立ち上げたときは301件でしたが、20年度には1,232件に増えているという状況です。

本学学生の特徴としては超安定志向とのこと。これは親御さんの期待も高いということも関係しているのだらうと思います。中堅企業は恥ずかしいとか、あるいは親が納得しない。それから「中堅企業は負け組」という意識が強いというような考えが作用していると言えます。

それから正解追求型ということで、相談に来る学生が模範解答を求めてくる。あるいは「人より早く正解に到達したい、それには必勝法があるんじゃないか」というような質問、あるいは相談に来る学生がいるということです。

それから依存度の高さということで、先ほどの青木先生の話の中にもありましたが、親に対する依存、逆に親の干渉の強さ、これが最近の特徴だということで、例えばキャリアサポートでも、保護者向けの就職説明会を他大学で実施していますが、今後はこのようなことも考えていく必要があるのかな、というお話もありました。

全体的な課題ということで、キャリアサポートセンターではこれまでは就職意識の乏しい学生へのサポ

ートが中心になっておりましたが、今後はポストクの方々などを含めた多様なキャリア設計へのサポートの転換が必要とのことです。特に博士後期課程の学生さん、それからポストクの方々へのキャリア支援ということで、これは平成19年度から3カ年で文科省から特別に予算をいただいております。今、力を入れております。この予算が今年度で終わってしまうということもありますので、その後どのような形で体制を維持していくか、あるいは充実していくかということも、課題になっています。

ただ、全体的に言えるのは、どうしてもキャリアサポートというと、キャリアサポートセンターが孤立しがちだということがありますので、教員との連携、あるいは協力が必要だということ、それから関係部局との役割分担をもう少し明確にするということも必要であろう。そして、専門性の高い職員をどのように養成していくのか、企業あるいは研究施設との連携強化を今後どのように図っていくかということが、キャリアサポートセンターでの課題だという状況でございます。

山本 ありがとうございます。

それでは今一度パネリストの先生方にご登壇いただいて、これから全体を通じまして、分科会を通して統一的に流れるような問題点はあったと思いますので、そのへんをフロアの先生方ともどもご議論いただきたいと思うんですが、まず西村先生、口火を切っていただけないでしょうか。

西村 いろいろ伺って、感想を2点ほど申し上げたいと思います。私は、かなりどぎついことを言っても、『へっへ』と笑うので、総長に、「憎まれたいタイプの人間やな」と言われています。そこで、かなり激しいことを言わせていただこうと思います。笑いながら言うので許してください。

全体の印象は、要するにオーバー・エデュケーション。つまり、月曜の1時間目から金曜の夕方までコマ数は決まっています。それで、あれもやったほうがいい、これもやったほうがいいということばかりがずっと出てきて、最後の課外活動に関して言うと、別の分科会だったんですが、課外活動をもっとやらせたほうがいいという意見が一方でありながら、課外活動をやるあまり勉強がおろそかになるという話もありました。

例えば夏休みをどう使うかということを含めて、今一番京都大学が抱えている問題は、ご指摘はみんなわかるんですが、例えば情報教育をI群化することには私は賛成ですが、極端なことを言ったら、I群は4単位だけというようなことができないのだろうかというようなこと。

あるいは課外活動には国際交流科目がとていい。私は、国際交流担当なのでちょっと言いにくいんですが、いい科目です。しかも受けている学生が数年間でたった60人で、私としてはもっと増えたほうがいいと思うんですが、それはいつやったらいいんだろうとか、要するにこれもいい、あれもいい。今日は話題になりませんでした。体育も私はぜひやりたい。しかし、体育もやりたいけれども、そうしたら学生はいくら時間があっても足りない。あるいは、そうじゃないんでしょうか。つまり暇すぎるからもっと忙しくしたほうがいいんだろうという割と根本的な…。

実は、一番京都大学が抱えている深刻な問題は、これが教育制度委員会です。いぶん議論になったんですが、専門科目が2回生にずいぶん下りてきているんですね。場合によったら1回生にまであつて、実は議論としてどういうことになっているかということ、いわゆる全共がしっかりやってくれないから、専門で早めに下ろして早く教える必要があるから下ろしてきたんだというのが学部の言い分です。

全共の言い分は、もっとしっかり時間を取って、さっきの私が申した unlearning という表現がありますが、大学に入ってすぐに同じようなタイプでどんどん詰め込むのは学生にとってよくないから、少しは余裕を持って、しかも、くどいようですが、月曜の1時間目から金曜の5限までのコマ数は限られていて、A群科目を提供する先生方は、「できるだけ最低限これだけというようなことを決めないで、多様な講義を提供することがA群として意味があるんだ」というお話をされるんです。

それはいいんですが、実際はコマ数で、上から下りてきたコマをポンポンポンとあてはめて、しかも一方でサークルに入って体育もしたいから、最後の時限は入れないでおこうとやったら、理系の人間にとってA群科目の選択の余地は、コマから、1週間でこことこことここと決まってくるんです。そしたら、そこで提供されている多様な講義なんて関係ない。自分の取りたい講義なんて関係ないんです。

これは分科会で言った話で、ぜひともご反論をいただきたい。それは例えば情報に関しては4単位で、さっきの東大ですわ。ここでこれだけのことを最低限知っておく必要がある4単位の講義を1年間やりま。もうこれだけです。あとはもちろん取りたい人がどこかで別のことを取ってくださいというやり方。

あるいは物理に関して、分科会で「熱力学のこういう授業が医学部の専門にとってとても重要なので、ぜひとも教えてほしい」という意見がございました。そういうことももちろんいいんですが、やはり全体のトーンとして、大変失礼な言い方で恐縮ですが、教えすぎ、オーバー・エデュケーションということについて反省する必要があるのではないかと。

かと言って、じゃあオーバー・エデュケーションをやめるとい話をすると、あえて、本当にひどい言い方をします。人格無視。何にもしない派が跋扈するんです。「教えすぎやから放つといたらええやないか、何にもせんでもいいやないか」という人が跋扈するんです。私は両方違うと思います。やはりうちの大学の、自由である程度創意工夫を学生の自発性に任せることは大事ですが、私の印象は、やはりある程度標準化して、これだけは最低限です。だからもっと教えてほしいということがあったら、それは専門でやる。しかし本当は、2年ぐらいいはゆったり最低限基礎的なことを勉強して、体育もやり、部活もやり、ゆったりとした時間の中で基礎的な学力、学問への意欲を高めることができないものか。もちろんこれも理想であって、そうはいかんよという話があることは承知の上で申しております。しかし、全体の印象は、やはり全体の分科会のご報告を聞いていて、オーバー・エデュケーションという印象を持ちました。

山本 かなり突っ込んだお話で、「反論をお願いします」と西村先生がおっしゃっていますので、ぜひともここはご意見をお願いしたいんですが。私なりに要約すれば、各部局、あるいは各分野で、これは大事だというものをごんごんと出すから、全体としては構造化できなくて、出しすぎじゃないか。やはり整理をして、学生にとって、例えば初年次だったらこういうものが最低限必要だというようなところで絞り込んだ形で出すほうが、真の教育じゃないかというようなご発言でしたけれども、ぜひとも。

田中 西村先生から例えばということで情報教育をあげていただきました。反論ではございません。まず、I群化ということに関してご賛成いただきましてありがとうございます。それで、東大は1科目ですね。1科目をトップダウンで設計して画一的な内容で全学必修ということをやっておられる。「そこまで極端なことは」というふうに考えております。かと言って、各学部の卒業生はI群科目10単位を取れとか、そういうつもりは毛頭ございません。ですから、ちょうど先生がおっしゃいました例えばということで、4単位とか4～6ぐらいのイメージかなと、ミニマムとしては思っています。

やはり全学共通の話は、単位の呪縛からどう逃れるかという話がとても大事だと思っております。実は大学院の情報教育のニーズ調査も、ずいぶん医学部の先生方からも伺いまして、必要でこの内容は重要だというのは、学生は単位と関係なく取ります。ですから、単位の呪縛にあまりこだわっていてもしょうがないわけで、京都大学方式と言いますか、多様な科目をたくさん用意して、学生が必要に応じて取るという形でやりたいわけですが、そのときに単位ということだけに縛られると、そういう議論になっちゃうのかなと思っております。

例えば大学院生が講義をするというのもいいんじゃないか。補習教育で大学院生が中心になって講義をする。その講義をしたほうに単位を与える。講義をされたほうは補習ですので単位は与えないというふうな議論もございます。ですから、単位の呪縛には、あまり情報教育のところでは実はこだわっていないと

いうことでございます。

山本 単位の話が出てきましたので、そのへんのことをご議論いただいた第1分科会に。

今井 単位のことについてですか。単位の実質化というところを議論したんですが、実際問題としては、教育内容の実質化のほうが本来我々の考えていることであって、そういう意味ではちょっと話が違いますが、一時はかなりの科目を2回生に下ろしたんです。当時は、京大教養生は結構楽みたいなのがどこかに書かれたりして、それで2回生にどんどん下ろした。それは、しかしながら消化不良という印象を持ちまして、重要な物理の科目をいったん2回生に下ろしたけれども、また戻したんです。全部ではないですが。

やはり先生がおっしゃったように、反論ではありませんが、適正な、本当に基礎的なところをしっかりとやって、あまり詰め込まないというのは重要だと思います。

キャップ制とも多少関係するんですけれども、単位をあまり取りすぎるとするのは、アンケート調査でも自学自習の京都大学が授業外の勉強時間が非常に少ない。これは一つの大きな問題だと思っています。そういう意味では単位の取りすぎを、授業はたくさん取ってるということですから、そちらのほうはちょっと問題になってきます。

山本 今のは、履修申し込みをある程度制限して、本当に勉強できるというのだったら1週間に何科目ぐらいでしようというので、それでキャップ制という形で強制的に状況を決めるというような議論があるんですが、分科会のお話を聞いて、それを直接やるようなのは京都大学らしくないというようなご意見だったと思います。しかし今、西村先生から問題提起いただいたように、たくさん出てるから、何が何でも履修登録だけしておいて、あとは試験だけ受けて通ればいいわというような傾向があることも事実ですね。その中でじっくり、単位の実質化という意味で、これという形で絞り込んで学生さんに履修してもらうとするならば、やはり全体を見通した入門科目、入門科目というのは決してやさしいという意味ではなくて、これから始まる大学での勉強を全体で見通すような、そういう授業が提供されるべきであろうというのは、私が参加しました初年次教育のところの議論でも出ていました。

このへんに関してさらに先生方、あるいはフロアの先生方に。

田村 私の専門ではないのですが、長い間、教養部の1年生に数学を教えています。やはりここ数年、少子・高齢化の少子のほうで、子どもの数が減ってきているけれども定員は減っていないということで、はっきり言って京大生のレベルは、明らかに下がっていると思います。つまり、同じことを教えても、10年前の学生だとわかってくれたことが、今はわかってくれない学生がどんどん増えている。

だから、こういう議論をするときに、いつもとまどうのは、いったいどのあたりの学生を対象として議論をしているのかがわからない。答えはいっぱい出てくると思うんです。トップの学生であればこういう答えが出てくるし、下の学生だとこういう答えが出てくると思うので、そのあたりを明確にして議論しないと、と思います。私はどちらかと言ったら、大学としてはやや下の学生のほうに焦点をあてて議論するのが社会的な責任じゃないかと思っております。

だから、かなりオーバー・エデュケートなのかわかりませんが、私は京大生であつてもかなり枠にはめたような、言い方は悪いですが、割と「勉強させる」という方向のほうが、今後はいいんじゃないかという気がいたしています。

山本 先ほどのホームランバッターの話と。

西村 私は文科系ですから、自然科学系の経験をぜひ教えてほしいと思うんですが、私も、別にこれは決して自慢ではなく、ゼミという形式で合計300人ぐらいの学生を指導してきました。1学年十数人で25年間です。そのとき、ずっと過去を振り返ると、優秀な研究者が3年ぐらいに集中して輩出しています。ちょ

っとだけ自慢すると、学士院賞をもらった研究者をはじめ、日本のトップレベルの経済学者と言われる人を、今私は4～5人養成していて、それが唯一の自慢ですが、そういう人は集中しています。

全体的に低下しているというのは、もちろんそういう感じはあるんですが、とにかく優秀な人は4～5人まとまって出る傾向があります。これは理工系に関してどうでしょうという質問をしたい。この仮説がもし正しいとすれば、そこで学生同士が共に学びあうということが、すごい大きな効果があったということ、私は三代ぐらいに関して実感しています。

実は私自身も大学時代、決してトップではありませんでした。すごく優秀な友人がいて、その人の力で引っ張ってってもらった。あまり個人的なことを言うとよくないんですが、大学院に入ってから、「ついにおれは追い越した」という自負があったんですが、それはちょっとおいて、自分自身もそうです。教えた学生もそうです。

そういう一つの私の仮説が正しいとすれば、共に学生同士が学びあう環境をどういうふうにつくるかというのが大事ではないかと思っています。それには、トップの人にも目配りをし、かつ、それについて勉強している、もうちょっと下の人にも目配りをしという、そのあたりも大事かなと思うんですが、このあたりの議論は、あまり本なんかでも見たことがないので、ぜひ教えていただきたいと思います。

田村 先生がおっしゃった3～4人のホームランバッターがおるかと言ったら、私はいると思います。例えば100人の学生を取ったとしたら、トップ10人は昔と変わっていないようなレベルの学生がいると思います。私が心配するのは、尾っぽがものすごく伸びているということで、その尾っぽの対策をせずに、ホームランバッターばかり見ていたら、じゃあ尾っぽのほうの数十人はどうなっていくんだということになり、京大として、とても無責任な教育をしているんじゃないかなという気がいつもいたします。

西村 トップが尾っぽを教えるということはないですか。

田村 そういうことができたらいいと思います。それは昔ならできたのかもわかりませんが、だんだんそういうことができにくくなりつつあるということは言えるかなという気がいたします。これは私が教えている工学部の学生の例で、ほかの学部はどうか知りませんが。

山本 私が参加しました分科会でも、京都大学の教育の制度として、途中で「もうやめたらどうや」というようなのがないんですね。そうしますと、先ほどの学生支援のところの発表でありましたように、ずっとゼロのままでも6年間いこうと思っただらいつちゃうというのがあるわけですね。このへんに関して、そのことを発表された先生は、あめとムチというような形で、いい教育をするのもいいんだけど、もうひとつそっちも必要じゃないかというようなお話もあったわけです。

一部の学部、学科では、そういう関門を設けているところはあるわけです。ところが、京都大学全体としてはそういうのは設けないで、卒業時の達成度で学士という形で卒業させるというシステムですね。それが、何回か話題に出ていますように、東京大学の場合には〇〇学部の学生さんという形では取りませんので、そこで1回関門があるわけです。このへんのことに関して、京都大学の教育は今後どうあるか、ご議論をいただきたいと思うのですが。

八尾 少し理学部の宣伝みたいなことになるんですが、理学部では少人数担任制度を数年前から導入しておりまして、10名ぐらいの学生に対して、教授クラスと准教授クラスがペアを組みまして指導する。それで成績表を順番に部屋に呼んで9月と2月頃に手渡す。そのときに、「がんばれよ」というよりは、むしろ「なぜがんばれないのか」というようなことを少し話るとか。あるいは、私も今は物理をやってますけど、かつて教養の時は物理が全部60点でしたみたいな、そんな私のことも含めて話すと、「なんや、あまり変わらんやん」という気持ちを持ってくれるようです。はじめは理学部でもその導入にはかなり抵抗があったんですけど、今や結構根付いていますので、他の学部ではどうでしょうということなんです。

山本 制度的に理学部ではそういう担任制を設けられたというお話で、私は、初年次教育のところで、「学部でどういう取り組みをされていますか」ということを前もってお聞きした中でも、担任制というような形は割とやっておられるところがある。

田村 工学部の私の学科でも同じようなことをやっておりますが、問題はそれに出てきてくれたらいいんだけど、それにすら出てこない学生もおるわけで、そのあたりの学生に関してはどうしようもないというところがありますね。

今井 理学部は担任制が強いんですけども、それは3年までですね。3年を超えてどうしようもない学生は、呼び出したりいろんなことをして、なかなか。少人数担任制度を導入してそういうのが少し減ったんですけども、やはりどうしてもいまして、今年から親に連絡するという、そういう対策もある程度はやっていかなきゃいけないという状況にあります。それより本当は、よくできる学生をしっかりと選別して、入学試験も問題なんじゃないかとも思いますけれども。

山本 西村先生からはじめに問題提起がありましたね。教育全体をもっと構造化して、標準的などという視点も必要じゃないかというようなご発言がありましたので、とりわけこの意見に対して、「いや、こうじゃない。我々はこういうふうにしてやってきたし、このままのほうがいい」というようなことは、フロアのほうからぜひともご意見をいただきたいと思うんですが、いかがですか。あるいは、「そのとおり」だということでも結構です。

小山 元理学研究科の小山です。ここにいらっしゃる先生方、教育熱心でがんばっていらっしゃるのによくわかるんですけども、実は、学生に先生方の気持ちが伝わっていない場合があるんですよ。先生方の意欲だけが浮かんじゃってる。前に共通教育のB群の担当で委員になったときにつくづく思ったんですが、理科系の学生も文系の素養が必要だということが強調されている。そういう心意気はよくわかるんですが、それが学生には伝わっていないということが非常に問題です。1・2回生というのは非常に自由な場合が、特に理学部・文学部では多いので、そこでドロップアウトしてしまう人が多いんです。ところが、そういう人でも無事学部まで来て、専門教育ができて、例えば卒業研究とか卒業演習、理学部で言うと卒業研究、文学部だったら卒論ですか、そういうふうにある程度焦点を絞って自分の好きなことをやれるようになったら、ものすごく脱皮する。必死でやってくる。確かに理学部は必死でやるんです。じゃあ、むしろそういう専門教育を下まで下ろしたらいいんじゃないかという気がするんです。

そうすると一方では反対があって、「いや、教養教育は重要だ」と。しかし、教養教育は重要なんだけれども、先生方の思いどおりには学生は受け取ってくれない。学生はおもしろいと思ったことは必死でやるんですよ。それは往々にして、自分がやりたいと思っているような専門的なゼミとか、あるいは割合いろいろと調べるような、そういう教育なんです。

だから私はあまり「ここまでが教養教育でここから専門教育だ」と言わずに、専門教育的なものでももっと下まで下ろして、学生が本当におもしろいと思ってくれるような見せ方をしないと、宙に浮いたような、こんなことを言うと失礼ですが、なにか先生方の意欲だけが空回りするような気がしてしょうがないんです。それは非常にはっきり言うと消耗なんですね。私みたいに特に気の短い人間からすると、なんでもしょうもない議論をしているんだろうという気がせんでもないので、そこはもうちょっと具体的なことを考えて、あまり理念ばかりが浮かび上がらないほうがいいと思うんです。

本当にどうやったら学生がおもしろいと思って一生懸命勉強してくれるかということを考えて、専門教育でもやっていきますと、やっていく段階で、「あ、この基礎をやらないといかん」ということがわかるんです。例えば私は物理ですので、量子力学なんて非常に専門的な教育ですが、割合早い時期から「この物性は何か」という感じの研究を勉強させると、「あ、量子力学が本当に必要なんだ」と思いながら量子力

学をもう1回見直すと、全然上達度が違うんです。目的意識がはっきりすると。そのところをもう少し有機的に考えないと。

ここまで基礎をやらないと次に進まないんだというような機械的な判断じゃなくて、物理学といえども、物理学というのは非常に積み上げる学問ですが、それでもそういう踏み込んだ柔軟な姿勢がないと、京大らしさが逆に出ないんじゃないか。理念は非常にいいですけども、残念ながら出ていないです。それを非常に気にしています。

西村 反論というか、議論を深めるために。先生、今、有機的に考えたらよいとおっしゃいましたが、有機的ってどういう意味ですか。つまり、一部専門を下ろすということは賛成です。しかし、当然量的な議論だけではだめだというのはわかりますが、やはり量的な議論もする必要はありますよね。どれぐらいを基礎で、どれだけぐらいを専門に下ろすという議論をやはりする必要があり、かつ同時に、物理なら物理、経済学なら経済学、西洋史なら西洋史という、1個1個の分野についてもっと詰めて、「これを教えよう、これはやめところ」という議論は、残念ながら今京都大学ではまだ、一部物理等ありますが、全科目についてないんですよ。

東京大学はそれをかなり、ただし全体的には教養学部ですが、懸命にやってきて、さっきのこれがいかがいかな、私は専門でないのだからわかりませんが、情報教育について教科書をつくっておられるんです。そういう具体的な話として情報教育をどうするという話をやらないと、失礼な言い方ですが、有機的という言葉にだまされるということは、まずいと思います。

小山 反論ですけども、私は有機的と言ったとき、具体的なイメージを持って言っているわけで、各部局とかによって違うと思うんですよ。例えば私の分野で、宇宙物理のことを教えると、これを本当に理解するためには「量子力学をやらなきゃだめだね」とか、「原子物理学をやらなきゃだめだ」というのがわかるんです。それで大学院生に、「もう1回勉強し直してこい」というわけです。「おまえ、量子学なんか全然わかってないじゃないか、試験は受かったかもしれないけど、わかってないじゃないか。これは簡単に計算でできるんだ。もう1回勉強し直してこい」とよく言うんです。そういうのが有機的なものであって、彼らは必死でやります。おもしろいから。

西村 先生、今のは大学院生についての話。個人的には先生を尊敬してますから、こういう話をしたくないですよ。しかし。

小山 学部でも同じと思う。

西村 1・2回生にどうするという話を今はしているわけですから。1・2回生に基礎をどの程度教えるかなんですが。

小山 私はそういう意味では反対なんですけれども。

西村 専門をどの程度。だから大学院に対して。

小山 僕は大学院生を例に出して言っただけで、これは学部生でも教養生でも成り立つ。有機的と言ったのに反論されましたが、画一的にやろうとすると有機的であり得ないんですよ。やはり個々の分野で個々の部局でいろんな特徴があるから、それを生かす。どうしたら有機的になるかということを考えるのが先生方じゃないですか。

西村 私が言いたいのは、別に有機的がおかしいと言ってませんよ。そうじゃなくて、一人ひとりの先生が考えるだけでは有機的にならないと言っているんです。考えて何人かの先生が議論して、それを最終的にまとめないとだめだと言ってるんです。

小山 考えていただけじゃだめだということ言ってるんですよ。だから、考えて、考えて、議論して、全体で統一的にしようというのは不可能であろうと。そう言っているわけです。

西村 だからそれをどこでどうやって具体化するかという。

小山 もっと部局の特徴性を認めないと不可能であろうと言っているわけ。

たぶんそんなに単一化してないと思うんですけど、議論だけではだめだということは当たり前です。何らかの行動が必要なんだけども、それを画一的にしようとする逆効果になる。まず先生方が反発する。それから実際に画一的・技術的な制度は実はないんだと思います。やはり部局の特徴が非常に生きてくるようなものでないと、有機的と言えないんじゃないかと思っています。

西村 全く反論でないんですが、具体的にそういう話は、今全学共通科目に関してはいくつか専門部会があります。情報教育専門委員会、A群科目部会、B群科目部会、そこで10人程度の先生方の専門的知識が戦わされて、いかに有機的にやるかという議論をされているんです。しかし、あえてこの場で疑問を呈するとすれば、本当にその議論だけで十分なのだろうかということを私は問題提起しているつもりなんです。ですから、どの場でどういうタイミングで年何回、どういう人が集まってどういう議論をしたらいいということを考える。だから、先生、全く反論ではないんですよ。「有機的に考えましょう」と言って、今日みんな「それは正しいよね」と言って帰ったのでは、現状に対して。

だから、「現状で本当にいいんですか」ということですが、情報提供が十分でないので、各委員会でされていることは、聞いてみたら、「たいしたものや、だからわかった」、そういう方向でやっておられるので、「私はそれで結構です」と言うか、それともその議論が現在外に見えないので、私としては、その議論の内容について私も反論したいけれども、どういう場で反論させてもらえるのかというような議論を私はしたいということです。だから、先生、すみません、本当に個人的に尊敬してますので、誤解しないでください。

小山 ごめんなさい。私は、具体的にステップを踏んでいかないとなかなか進まないなというのを非常に気にしているから。

西村 同じです。

小山 個々の先生の努力と、それから体制ですね。その努力をどうやったら生かしていけるかという体制をつくるかというのはちょっと別な話があるので。体制づくりは非常に重要だと思うんです。ただ、残念ながら京大の先生は、体制と言うと急にアレルギーになるから、なんとかうまくだましながら、納得していただきながら、個々の先生の努力だけじゃなくてものごとが進んでいくようなシステムが重要だろうなということ。

山本 ありがとうございます。このシンポジウムを始める前に、松本先生から必ずここでの討論内容が部局あるいは委員会にフィードバックするような形でやってほしいと要望がありまして、今まさにそういう点を鋭く突かれるようなご発言があったと思うんです。

必ずしも今の高等教育研究開発推進機構にありますシステム委員会をはじめとする専門委員会・各部会が、今の問題を十分議論する、あるいは十分議論した内容を実現化するというような体制にあるとは、残念ながら言えません。やはり現状は科目の適合性を審査するようなところで手一杯というところがありますので、そのへんを踏まえ、どういうところで各部局の特色を生かしながら、あるいは各部局の要請を考えながら、どういう弾力的な運用があるのか、そういうところを考えるという仕組みも私は必要だと思います。

そろそろこの会を閉めなければならぬ時間になってきたんですが、最後に松本先生、どうですか。

松本 ずいぶん幅広い議論を聞かせていただいて、大変勉強になりました。全学教育というのは、字のとおり全学が協力して教育にあたるべき問題です。全学共通科目という範疇の中で、主として1・2回生の教育を中心に議論されたと思うんですが、現在行われているいろんな委員会での議論は、大変だったとす

るのが多いと西村理事がおっしゃいました。私も中身についてはこれから勉強させていただきますが、その努力は大変なものだったろうと思います。しかし、このままでいいのかという西村理事の提案にも、私は大変共感を覚えていまして、どういう学生を我々京都大学は送り出すのかという議論を、もう少し個々の教科を離れて議論する必要があると感じておりました。

また、田村先生がおっしゃった、どのレベルの学生をどこまで面倒みるのかという話と、最後のキャリアサポートセンターをはじめとする学生支援の問題とも結びつけて、京都大学としてはここまでの学生をこれだけの形でちゃんと見る、それから小山先生がおっしゃっていたように、ユニークな学生をどう育てるかという手法、そういうものを当然織り込んでいく必要があろうと思います。やはり私は、今のシステムの中で、自学自習あるいは自由にできるという言葉のもとに、あまり勉強せずにドロップアウトしていく子がいるという事実を目をそむけてはならないと思っています。

全学共通教育は、大きく三つか四つのカテゴリーに分けられてA群とかB群とかAB群とか、一般の人が聞いたらわからないような名前がついていますが、具体的な内容のくくりで、これだけは履修すべきだという意義を学生にいかにつなげるか、初年次教育はそういうところで重要であろうと思います。学問体系はどうか、なぜあなたはこういうことを勉強しないといけないか、なぜあなた方は心技体を鍛える必要があるのか、それに知識を加えていく必要があるかということ、十分にまとめて議論できるような、日々の教科の審査じゃなくて、教育の在り方を考えるグループというものを結成していただきたいと、強く感じました。

また、あまり議論にならなかったようですが、体育についても、最近の学生のひ弱さというのは身に沁みて感じておまして、健康ということが大変重要で、若いときに体育についても教員ともども考えていく必要があろうかと思っておりますので、それも議論していただきたいと思っております。

山本 最後に松本先生にまとめというようなことで適切にご発言いただき、こちらとしては非常にありがたく思っております。前に出ていただきましたパネリストの先生、昨日来この議論を深めるためにご努力いただきましてありがとうございました。フロアの先生方も、昨日からの議論に積極的に参加していただき、またこのあと、各部局あるいは委員会に参加していただいて、そこでの議論に今回のシンポジウムの議論が反映されるように努力をしていただくようお願いして、閉会のごあいさつにしたいのですが、その前に一つ、お願いがありまして、それはアンケートについてです。

先生方どうもありがとうございました。

(パネリスト降壇、拍手)

山本 これをもちまして今年度の京都大学全学教育シンポジウムをお開きにさせていただきます。今お願いがありました本シンポジウムに対するアンケート、それから京都大学の評価の資料にしたいというアンケートと2枚ありますので、お書きになっていただいた先生方は出口のところで提出していただきたいと思っております。

**全学教育シンポジウム
第1分科会**

単位の実質化などについて

今井憲一(理学研究科)
(銚井修一(工学研究科))

単位の実質化・プログラム

(1) 趣旨説明: 資料3、銚井先生PPT ⇒ 質問
 (2) シラバス標準化: 資料 ⇒ 質問と議論
 (3) 学生の学修の実情: 溝上先生PPT ⇒ 質問と議論
 ・単位の実質化、シラバス、成績評価、キャップ制など
 (4) キャップ制について: 州崎先生 ⇒ 質問と議論
 ・目的、実情、問題点
 (5) 評価の厳格化、公平化: 山本課長PPT ⇒ 質問と議論
 ・評価結果の公表、教員間での情報伝達など
 (6) 教育の実質化: 今井PPT ⇒ 質問と議論
 ・各部局の状況、授業のあり方、サポート体制(TA)など
 ・溝上先生からUSAの状況を含めた説明(学修時間の確保)
 (7) まとめ

(第二期) 中期目標・中期計画

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標
 目標: 5 各学部・研究科等において学生に示した教育方法、教育内容、授業計画、多面的成績評価法・基準及び卒業・修了認定基準を踏まえた、体系的で質の高い授業と適正な成績評価を行う。

計画: 1 各学部・研究科等において、授業の目的、教育方法に応じた授業の展開、授業の達成目標、成績評価の方法並びに基準が明確に把握できるようシラバスを整備し、多面的な観点から踏まえて学習成果を客観的に評価する。

中教審答申

◆「学士課程教育の構築に向けて」
 第2章 学士課程教育における方針の明確化
 ・教育課程編成・実施の方針について
 -教育課程の体系化
 -単位制度の実質化
 シラバス、セメスター制、キャップ制、GPA
 45時間学修/単位 (15時間授業/単位)
 -教育方法の改善
 -成績評価
 GPA

**教育制度調査検討部会
WG2検討結果**

- ・ シラバス
15回を念頭においた、標準的なシラバスの作成
- ・ 単位の実質化
キャップ制 (慎重に)
45時間学修時間 (まずは15時間の授業)
公平な成績評価 (教員間での情報公開)
教育の実質化 (講義と演習の連携などでの学修支援)

シラバスの標準化

- ・ すべての教員が書くが 説得できるか?
- ・ 体裁を整えるだけではないか?
- ・ 学生がシラバスを見て選んでいるか?
- ・ 米大学のシラバス(数ページ)とのちがいが
- ・ 学生への約束
- ・ 他学部や外部への教育情報公開
- ・ 単位互換との関係
- ・ たいして負担にはならないのでは
- ・ 京大としてのシラバスの考え方→充実

**授業にでていない時間(溝上先生)
以外に多い!**

	全員の旧帝大生 (京大生を除く)*	京大生**
1 全無ない	5 (2.1)	10 (0.5)
2 1時間未満	3 (1.0)	5 (2.5)
3 1~2時間	5 (1.7)	16 (3.0)
4 3~5時間	23 (8.0)	66 (5.7)
5 6~10時間	19 (6.6)	134 (7.1)
6 11~15時間	51 (17.7)	228 (10.8)
7 16~20時間	73 (25.3)	266 (17.3)
8 20時間以上	108 (37.5)	352 (49.1)
合計	288 (100.0)	1080 (100.0)
	62.8%	66.9%

(*) 慶由美子科研(2006年実施)、2年生(N=329)だけを抽出して再分析
 (**) 山田礼子科研(2005年実施)、京大生2年生を抽出して再分析

**授業外学修時間
64%が5時間/週以下!
自学自習していない!**

	全員の旧帝大生 (京大生を除く)*	京大生**
1 全無ない	5 (2.1)	31 (2.9)
2 1時間未満	21 (7.3)	111 (10.3)
3 1~2時間	52 (18.0)	221 (20.5)
4 3~5時間	85 (29.4)	328 (30.4)
5 6~10時間	51 (21.1)	206 (19.1)
6 11~15時間	31 (10.7)	69 (6.4)
7 16~20時間	4 (1.4)	33 (3.1)
8 20時間以上	29 (10.0)	81 (7.5)
合計	288 (100.0)	1080 (100.0)
	56.8%	64.1%

(*) 慶由美子科研(2006年実施)、2年生(N=329)だけを抽出して再分析
 (**) 山田礼子科研(2005年実施)、京大生2年生を抽出して再分析

キャップ制

- 法学部の例
2単位10科目/ Semester
勉強しないで試験を“数打てばあたる”で受ける
→ 答案の質向上（法科大学院）
- キャップ制は多くの大学で導入したが授業外学修時間は増えていない？
- 学部の事情による→ 慎重な対応

成績評価の厳格化と公平化

- 成績分布の一般公表（同志社）
楽勝科目をなくし、学生の不公平感をなくす。非常勤講師
- 共通教育クラス配当科目の不公平、教員の考え方
→ WG 教員組織への公開（学生も？）

教育の実質化

- 単位の実質化→（基礎）教育の実質化
- 理学部の例
基幹科目（量子力学、電磁気学など）の授業に多くのTAによる演習をつける。
→ 基礎を身につける

教育目標を実現するために

- 知的創造を担う研究者
 - 社会各界の指導者
- 知的体力**
基礎を身につける（思考力、計算力、読書力）
（共通教育の課題！自学自習を援助する教育が必要、TAの活用）
- 人間力**
対話、熱（少人数教育、発表、討論、実習）

第2分科会

平成21年度 京都大学全学教育シンポジウム 2009/09/24-25 学内

学士課程教育を再考する
— 第II期中期目標・中期計画の実現に向けて —

第2分科会： 本学における全学共通教育の 在り方について

進行

八尾 誠(理): 高等教育研究開発推進機構副機構長
田中一義(工): 基礎教育専門委員会委員長

本分科会開催の趣旨

- 中期目標・計画が来年度から第二期に入る。
- 第二期中間目標・計画素案が、本部と各部局間での繰り返しの議論に基づき作成され、文科省に提出された。
- 教育に関する部分は4項目から構成されている。(1)教育内容・成果、(2)教育実施体制、(3)学生への支援、(4)教育の国際化 [配布資料参照]
- **第2分科会は、「教育実施体制」に関わる部分について、目標達成のための具体策について議論する。**
- **お願い: 「学生にとって、どういう教育がベストか？」を、第一義に考えていただきたい。**

第2分科会の進行

I. 研究所・センター・独立研究科の全学共通教育への参加

- A. 化学研究所の「基礎化学実験」:
中村正治 先生、則末和宏 先生[担当者]
- B. フィールド科学教育研究センターの講義・ポケットゼミ・実習
山下 洋 先生(舞鶴水産実験所)
- C. 全学共通教育の在り方ノ講義:
八尾 健 先生(エネルギー科学研究科長)

II. 全学共通教育の実施責任部局の在り方

- A. 人間・環境学研究科長: 堀 智孝 先生
- B. 理学研究科長: 吉川研一 先生

I-A. 化学研究所の「基礎化学実験」: 中村正治 先生、則末和宏 先生

- 平成20年度、21年度:それぞれ教員4名(アンケートで、38名の教員が前向き)
- 初年次教育としてうまく機能している。若手教員を注ぎこむことは重要(教育経験)。化研から出て行くのは良いこと。担当可能教員のパイの大きさ。教員数はもう少し多い方がよい(密着型教育のため)。

I-B. フィールド科学教育研究センター 山下 洋 先生(舞鶴水産実験所)

- ☆学術目的: 森里海連環学の創設。
教育目的: ラボから連れ出す(ノンパーチャル)
- ☆提供科目
・講義: 4コマ(年間700名受講:文理半々)
・ポケゼミ: 15科目(講師以上13名で):全ポケゼミの1割以上に相当
・実習: 3コース+3科目
- ☆経費(教員旅費など) 日本財団からの助成
寄附講座でコーディネーターを雇用
- ★問題点
・遠隔地施設の整備: 宿泊施設、実習用分析機器の貧困など。
・今後の旅費の問題: 競争的資金の獲得が必要

I-C. 全学共通教育の在り方ノ講義: 八尾 健 先生(エネルギー科学研究科長)

- ☆何をどう教えるのか?
- (例えば)最先端を教えてもすぐ古くなる。
 - (結局)勉強から学問へ。学問を愛する心。
- ☆提供講義
• 28科目: 一般設定科目(受講者が少ない)から**基盤科目**へ

II-A. 人間・環境学研究科長: 堀 智孝 先生

- ☆30年間全学共通科目を担当した。毎年500人を相手。30年で15000人。
- ☆「変えるべき」と「変えざるべき」がある。
例えば、人文・社会科学群:
各科目は増設・合併してもよいが、**群のくくり**は消してはいけない。
これを変えるなら、時計台決裁が必要なくらい重要。
- ☆「教養」の定義: 人格の形成。自立する力。
- ☆(今後も)責任部局の義務と権利を果たしていきたい
但し、「足を組め」と命令されるとその瞬間から苦痛になる。

II-B. 理学研究科長: 吉川研一 先生

- ☆問題点
- 平成3年の大綱化 教養教育について、京大と似ているのは名大のみ。名大は全学部が責任を持つとして改組。京大では先に総人・人環を作って、あとに負担をどうこう議論した。
 - 京大として育てるべき学生を考えて話を始めるべき。もっと責任感を持って。
 - (教員減で)物理教育には問題がある(特に初修物理学など)。
- ☆このあたりで、総人・人環と理学だけが責任部局であるのはやめれば良い。

自由討論より

- 総人・人環が責任部局というのは、納得ができていない。能力・資格がないから。総人・人環は単に実働部隊に過ぎない。A群部会で全学要請してもほとんど協力が無い。全学実施体制で行かねばならないだろう。
- 何が「教養」にとって重要か？教員の「最先端」を見せる方が良いかも知れない。万人に共通的に役立つものはない。
- 形の上からは「XX学の基礎」という題目も必要だろう。ある科目（「XX学の基礎」）を文学部にお願したところ、特論的なものを提供しているということで、断られた。
- 京大として「実施責任組織」が必要。基礎教育と教養教育の区別は難しいが、各部局のミッションの違いと教育に対する考え方は、分けて考えることが重要

最後に個人意見

☆現状

- 研究所等の前向きな取り組みを歓迎。
- 反面、学部学生を擁する学部・研究科からの積極的な意見が少なかった。特に、文系。1, 2回生はどうであろうとも、3回生になれば、どうせやってくるからという安心感からか？

☆今後

- (とりあえず) 高等教育研究開発推進機構のコーディネーター機能の強化。例えば、教養教育については、教養教育専門委員会等において検討。その際、文系科目の多様性に鑑み、大きな方向性の下に、**複数のモデル作り**が望ましい。[path-integral 構想]
- 「多様性」を新入生にも分かるように工夫をしていただきたい。個を区別できなければ、「多様性」ではなく、単に「沢山」。

第3分科会

理事
西村周三

初年次教育

- 座長(山本機構長)趣旨説明
- 医学研究科(平出教授)
- 工学研究科(グローバルリーダーシップ工学教育プログラム、伊藤教授)
- 成績を親に連絡
- 経済学研究科(菊谷教授)

入学後(ないし直前)の数週間の重要性

西村コメント

- 知育
- 徳育 「人の立場に立って考える！」
- 体育
- 技育←skill 教育 ベッカー教授からの指摘
- 人間力 しかしその後の議論の展開も知力重視
- 「学生が何を学びたいのか」に対する配慮はあるのか？

ディスカッション

- 志
- Unlearningの意味
- 部局でやること、全体でやること。
- 組織化された教育か個人プレーか？
- 集中的な講義体系→ 8週間で週2回講義
- 魅力的な(おいしい)講義を見せる
- 東京大学との比較

第4分科会報告

教育の国際化について

1

(1) 学士課程の教育国際化の経験

司会: 長山 浩章先生

- KUINEP科目提供の経験と課題
石原 慶一先生
- 国際交流科目提供の経験と課題
水野 啓先生
- KCJS/SCTI 講義提供の経験と課題
河合 淳子先生
- 海外大学との遠隔講義の経験と課題
竹安 邦夫先生

2

(2) 学士課程の教育国際化への 将来展望

司会: 河上 志貴子先生

- K.U.PROFILEにおける学士教育
田村 武
- 留学生への日本語・日本文化教育
森 真理子先生
- 学士課程の教育国際化とFD
田口 真奈先生
- 短期学生受入の課題
縄田 栄治先生

3

長山先生コメント

欧州教育国際会議(スペイン)に参加

- アジア諸国で英語での講義が議論された。
- G30も話題に上がっていた。

4

KUINEP科目提供の経験と課題

- 1997年発足、16科目、「日本の。。。」
- 目的の1つは国際社会の形成に貢献
- やや「泥縄式」に出発
- 講義形式に批判→2005年に改革
- 現在は広い範囲、24科目、名誉教授も提供

5

課題と要望

- いわゆる「duty科目」でない
- 「特殊な全共科目」としての位置づけ
- 留学生3, 4年、日本人1, 2年
- 英語で提供する全共科目→KUINEP科目
- 提供科目数の増大
- KUINEP専門科目の必要性

6

国際交流科目提供の経験と課題

- ベトナム、特にフエ大学を中心に
- 「知識を与える」よりも「感性を磨く」
- 2週間、11万円+お小遣い程度
- 4年間で60人(9学部)が参加
- 参加した学生へのインパクトは計り知れない。
- フエと西条市との交流までに繋がる

7

課題と要望

- 参加人数に限界、コース数が増やせるか？
- 安全性確保
- 受入れプログラムの場合のコスト
- 学術的な評価(第2期中期目標・中期計画)
- 担当職員の増強→コース数の制約の根源

8

KCJS/SCTI 講義提供の経験と課題

- Kyoto Consortium of Japanese Studies
Stanford Center for Technology and Innovation
(現在は同志社大学今出川キャンパスに)
- アメリカの大学生が日本で数カ月学ぶ。これに京大生の聴講が許されている。疑似留学。
- これまでに延べ180名以上が参加
- 最終到達率:75~80%

9

課題と要望

- かなりの内容にもかかわらず単位にならない。
- 全学共通科目あるいは専門科目に？
- KCJS/SCTIの学生への京大での身分がない。
先方は、メディアセンター、図書館、京大での講義の聴講を希望
- 「短期交流学生」制度の活用
- 同様の短期プログラムとの連動
- 日本人のディベート能力の向上に役立てる

10

海外大学との遠隔講義の経験と課題

- 1998-2006年 TIDE(京大とUCLA)
- 現在では、台湾大学と。支援なし。
- 工学で、京大、北京大、マラヤ大学で進行中
- 全共科目であるが、「勝手にやっている」という評価。英語による相互交流科目のような表示もない。
- 日本人学生の消極性を打破。

11

課題と要望

- 学年歴、時差の違い。
- 夜、休日の設備の使用。
- 今後、E-JUST等種々のプログラムで遠隔講義が増大すると思われるが、技術職員、TAの補充、設備利用の障害をなくしてほしい。
- このような全共科目の認知。

12

K.U.PROFILEにおける学士教育

- 工学部地球工学科国際コースの新設。
- 平成23年4月から。留学生枠30名。内数。
- K.U.PROFILEで唯一の学部英語コース。
- 発展途上国の社会基盤の充実に貢献。
- わが国の技術と技術支援の経験。

13

課題と要望

- 優秀な学生の確保。
- 入学試験の内容、時期、方法。
- 多くが手探り状態。
- 種々の書類の英文化。
- 英語講義の提供とその準備。
- 5年後の体制。
- 奨学金、授業料免除。
- 全学的な理解と支援。

14

留学生への日本語・日本文化教育

- 学部レベルの学生:140名程度を教育。
- 日本で学ぶ価値:日本文化の理解
- 日本語・日本文化研修留学生(日研生)、KUINEPでの経験
- 漢字圏からの学生の上達が早いとは必ずしもいえない。

15

課題と要望

- 英語を用いた日本語教育
- 日本語を第一外国語にする？
- 応用できる日本語技能の習得
→日本人の論理、考え方
- 日本文化教育
初中級は英語、上級は日本語(全共科目)
日本人学生に日本文化を知らしめる
- 2週間程度でも、次へのステップに繋がる。

16

学士課程の教育国際化とFD

- FDとは本来、広い意味がある。
FD as a teacher, FD as a professional
FD as a person
- ハーバードでは、学部学生を教える大学院生のためのサービス。 Food & Drink!
(デレックボク教授法学習センター)
- 日本は法令のもとに始まった。FD後発国。

17

課題と要望

- FDとは国際的な概念である。
- 質の保証制度
- 個人の教育技術ではなく、学習環境全体を指す。
- 英語講義のFD実施の要請

18

短期学生受入の課題

これまで多くの外国人学生を短期間、受け入れた経験がある。課題(要望)として

- 身分の付与:「短期交流学生」
- 経費:大学として外部資金を取りに行く体制。
- 事故対策:組織的対応のできる体制・資金
- プログラム:日本文化、日本語
- 受入職員:全体的に不足→教員、学生への負担

19

国際交流科目のコース数が増えない本当の理由でもある。

- 学生ボランティアの協力:サークルは多い。
TA, RA
- 多様化:サマースクール、短期研修コース

20

まとめ(森 機構長)

- 教育と国際を分離させない。
- フィンランドのある大学では「国際部」はバーチャルな組織である。

21

第5分科会(報告)

情報教育の在り方について

田中克己
 (情報学研究科教授 社会情報学専攻)
 (情報教育専門委員会委員長)
tanaka@dl.kuis.kyoto-u.ac.jp
<http://www.dl.kuis.kyoto-u.ac.jp>

高等学校の教科「情報」の動向と京大の初年次情報教育

- 教科「情報」の未履修問題と、今後の更なる学習指導要領改訂(H25~)
- 京都大学における新入生アンケート

情報教育のi群化について

- 情報教育の科目区分(B群/AB群, 基礎/教養, 情報/II/III類)
- 科目区分の独立化(i群化)

情報教育の目的・意義, および, 国際化・情報化

- 学術研究における情報学の素養とITスキル (論理思考, 情報, 英語の3本柱)
- 情報セキュリティ・情報倫理教育の問題について
- 大学院における情報教育
- 教育の情報化とFD
- 教育の国際化(英語による全学情報教育)

教科「情報」の未履修問題と京大の初年次情報教育

未履修問題の影響

- 入学生の2極化
 ハウツー教育(「情報A」)の補修教育
 東京大学の初年次「情報」全学必修化方式
 今後の学習指導要領改訂に伴う内容の高度化への対処

初年次情報教育

- ハウツー教育ではなく, 情報の科学的理解, 情報倫理・セキュリティ・知財等(「情報B,C」)の教育の重要性
- 体系的な情報教育, プログラミング教育, 情報収集・検索・分析の教育. 実践的な情報教育の重要性

現行学習指導要領における情報教育

-情報教育の目標としての「情報活用能力」-

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/020701.pdf

情報活用の実践力「情報A」

- 課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて, 必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し, 受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力

情報の科学的な理解「情報B」

- 情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と, 情報を適切に扱ったり, 自らの情報活用の評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解

情報社会に参画する態度「情報C」

- 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し, 情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え, 望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

新学習指導要領(平成25年度~)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youyou/kou/kou.pdf

目標

- 情報及び情報技術を活用するための知識と技能を習得させ, 情報に関する科学的な見方や考え方を養うとともに, 社会の中で情報及び情報技術が果たしている役割や影響を理解させ, 社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てる。

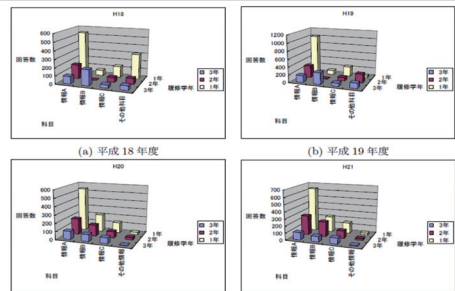
「社会と情報」

- 情報の活用と表現, 情報通信ネットワークとコミュニケーション, 情報社会の課題と情報モラル, 望ましい情報社会の構築

「情報の科学」

- コンピュータと情報通信ネットワーク, 問題解決とコンピュータの活用, 情報の管理と問題解決, 情報技術の進展と情報モラル

履修状況



(e) 平成20年度 (情報履修なし等)			(f) 平成21年度 (情報履修なし等)		
履修状況	人数	(%)	履修状況	人数	(%)
情報系科目を履修しなかった	109	4.4	情報系科目を履修しなかった	150	5.2
情報の時間に数学を履修した	136	5.5	情報の時間に数学を履修した	122	4.2
覚えていない・わからない	809	32.9	覚えていない・わからない	963	33.2
その他	28	1.1	その他	5	0.2

(分析対象者に対する%)

情報教育のi群化

i群化の理由

- 情報教育は文系・理系横断的, 多様な分野での「基礎」科目学術研究における素養とスキル(論理思考, 情報, 英語の3本柱)
- A群, B群科目に対する各学部の履修推薦(指定)に余裕無し
- 東京大学のような画一的な教育プログラムではない情報教育
- (大学院の副専攻的教育プログラムの可能性)
- (補修科目のアウトソーシング)

i群化の課題

- 実装(各学部卒業要件, できるものからやる, 仮想的にやる, 等)
- 高いレベルの研究・素養と「低次元」のコンプライアンスの問題をi群化で解決するしか無いのか

論点

- 自由の学風
- 内容の高度化
- 情報フルエンシー
- 情報の文理融合的側面
- 内外の評価に耐える教育システム

① 京大の自由の学風
 情報教育に際しては、統一した科目を設計するのではなく、京大の自由の学風を尊重し、学生の自主的な履修選択に促すための情報教育科目についても多様な選択ができるよう配慮が必要である。

② 内容の高度化
 内外的評価に耐える教育システム
 情報系科目における教科書(情報A・B・C)履修者の入学に対応して、京大における全学共通情報教育科目や学部専攻教育科目については、内容の高度化などの見直しを提案している。

③ 内外の評価に耐える教育システム
 情報系科目における教科書(情報A・B・C)履修者の入学に対応して、京大における全学共通情報教育科目や学部専攻教育科目については、内容の高度化などの見直しを提案している。

④ 文理融合的側面
 情報系科目における教科書(情報A・B・C)履修者の入学に対応して、京大における全学共通情報教育科目や学部専攻教育科目については、内容の高度化などの見直しを提案している。

⑤ 内外の評価に耐える教育システム
 情報系科目における教科書(情報A・B・C)履修者の入学に対応して、京大における全学共通情報教育科目や学部専攻教育科目については、内容の高度化などの見直しを提案している。

京都大学の全学共通情報教育(H18～)

年間約60コマの講義
学部基礎情報処理科目

情報I類科目:
スキル教育

情報II類科目:
コンセプト教育

情報III類科目:
ケーパビリティ教育

情報I類科目の分類
(I, II, III類科目)と公表


A群(文系), B群(理系), AB群の分類

B群科目の分類
教養, 基礎, 教養基礎

情報教育の目的は、以下(以下)に示す通りである。
情報教育の目的は、以下(以下)に示す通りである。
情報教育の目的は、以下(以下)に示す通りである。

情報教育の目的は、以下(以下)に示す通りである。
情報教育の目的は、以下(以下)に示す通りである。
情報教育の目的は、以下(以下)に示す通りである。

東京大学の情報処理教育(教養課程)

ニュース 

東大の情報処理教育が変わる

記事一覧へ >>

東京大学は、2008年度から教養課程における情報処理教育の内容を見直す。パソコンの操作教育を縮小し、アルゴリズムやプログラミング、コンピュータの構造といった情報学の基礎を強化。同時に、情報システムと社会生活のかかわりや、情報倫理など文系の内容も盛り込む。

内容を見直す理由は、2000年度から全国の高等学校で教科「情報」の教育が始まったため(参考記事)、高校卒業時にコンピュータの操作法といった基本的なリテラシー教育は終わっており、大学で同じ内容を教える意味が薄れた。

東大は学生に対して文系・理系の違いにこだわらずコンピュータの基本的な仕組みを理解させ、コンピュータを社会で活用できる能力の育成を狙う。高校の情報処理教育を考慮し、情報処理教育の改革に乗り出した大学はまだ少ない。

(高下 義弘=日経コンピュータ)

[2005/07/25]



情報 (東京大学教養学部テキスト) (単行本)
川合 慧 (著, 編集)

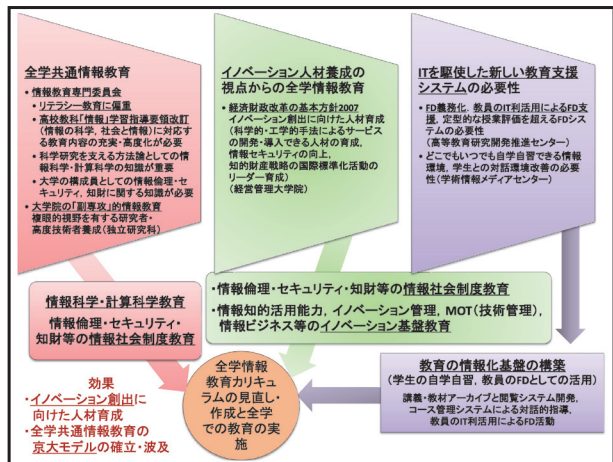
情報教育の目的・意義, 国際化・情報化

情報学研究科 特別教育研究(教育改革)(平成21~25年度)

- 学術研究推進のための情報学の素養とITスキル
- 情報セキュリティ・倫理・知財教育(京大構成員のコンプライアンス)
- 大学院における情報教育: 副専攻の科目
- 教育の情報化とFD(講義映像・教材のアーカイブ閲覧)

教育の国際化(英語による全学情報教育)

- 英語教育への携帯閲覧システムの活用(日本人教員のFD)



全学情報教育プログラムと実施体制

本事業

全学共通情報教育(学部)

- 全体で年間約60コマ
- 各部署が分担して提供, 体系的なカリキュラムになっていない
- コンピュータリテラシー教育
- 情報科学教育
- 情報セキュリティ・知財教育(一部実施)
- 情報の知的活用能力教育(一部実施)

学部情報教育カリキュラム

- 情報科学・計算科学「情報」「情報演習」「シミュレーションプログラミング入門」「シミュレーションプログラミング演習」
- 情報社会制度「情報と社会」「情報と知財」「情報と教育」
- イノベーション基盤「IT知的活用」「技術経営(MOT)」

大学院情報教育カリキュラム(一部, 学部・院共通科目を設定)

- 情報科学・計算科学「情報科学基礎論」「情報管理」「メディア情報処理」「計算科学特論」「シミュレーション科学」「スパコン特論」「情報演習」「メディア処理演習」「計算科学演習」「シミュレーション科学演習」「計算科学演習」
- 情報社会制度「情報社会論」「情報と知財」「情報と教育」
- イノベーション基盤「ITサービス知的活用論」「技術経営(MOT)」

全学共通情報教育(大学院)

- 研究科の講義の一部, 他研究科に開放

講義・教材アーカイブと閲覧システム開発

社会情報学専攻 オンライン履修

社会情報学専攻 オンライン履修

講義・教材アーカイブ(予習・復習, 教員FDに活用)

モバイル閲覧システム

小中高の教育課程: 大学のH18年度問題

旧教育課程	新教育課程	
小学校 各教科等において教育機器の適切な活用をはかる	小学校 総合的な学習の時間や各教科でコンピュータや情報通信ネットワークを活用	平成14年度～
中学校 技術・家庭科「情報基礎」領域(選択) 理科, 数学でコンピュータについて学ぶ	中学校 技術・家庭科「情報とコンピュータ」を必修(発展的な内容は生徒の興味・関心に応じて選択的に履修) 総合的な学習の時間や各教科でコンピュータや情報通信ネットワークを活用	平成14年度～
高等学校 設置者の判断で情報に関する教科・科目の設置が可能 総合学科, 専門学科では情報に関する基礎科目が原則履修科目	高等学校 普通教科「情報」を新設し必修(「情報A」「情報B」「情報C」(各2単位)から1科目を選択必修) 専門教科「情報」を新設し, 11科目で構成 総合的な学習の時間や各教科等でコンピュータや情報通信ネットワークを活用	平成15年度～
高等学校・専門学校 小, 中, 高等学校に準じる	高等学校・専門学校 小, 中, 高等学校に準じるとともに, 障害の状態等に応じてコンピュータ等の情報機器を活用	

現行学習指導要領における情報教育

-情報教育の目標としての「情報活用能力」-

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/020701.pdf

情報活用の実践力「情報A」

- 課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて, 必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し, 受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力

情報の科学的な理解「情報B」

- 情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と, 情報を適切に扱ったり, 自らの情報活用の評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解

情報社会に参画する態度「情報C」

- 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し, 情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え, 望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

高校普通教科「情報」の導入

現行学習指導要領で普通教科「情報」が必修科目として導入

- 2単位(1年、週2時間)
- 科目は「情報A」「情報B」「情報C」から選択
- H15年から、大学進学はH18から

大学での情報教育の高度化が必要？

教科「情報」の実質化への懸念

未履修の社会問題化(H18年度、後半)

全学教育シンポジウム
第6分科会報告

テーマ: 学生生活・学習支援の在り方
について

- ・司会進行; 河野 明 (理学研究科教授)
(学生部委員会第四小委員会委員長)
- ・主席者: 教員10名
職員15名 計25名
- ・内容: 1) 学生相談の現状と課題
話題提供; 青木カウンセリングセンター長
2) 障害のある学生への支援
話題提供; 教育推進部、青木センター長
3) キャリアサポートの現状と課題
話題提供; 産学キャリアサポートセンター長

1-1 学生相談の現状と課題

- ・年間500人が5,000件の相談
(他大学と比べても多い。)
- ・親、教員からの相談も増加
特に、母親から父親の相談に早期化
- ・内容は、よろず相談

1-2 学生相談の現状と課題

- (ケース1)
- ・なぜ卒業できないのか → 大学の指導が悪いのではないか。
 - ・原因; プライドが高い → 親に言えない
少子化も原因
 - ・対策; 成績表を親に送ってもよいのではないか。
(東北大学では既に実施。)
連帯保証人である親には、成績を知る権利がある。
工夫が必要。

1-3 学生相談の現状と課題

- (ケース2)
- 就職活動をしないう、何とかしてほしい。
(特異ケースとして、親には大学院に進学すると説明し、6年間で取得単位0のケースもあり。)
- ・原因; オーバーペースから意欲の低下
 - ・対策; 「挫折は悪いことではない」との教育が必要

1-4 学生相談の現状と課題

- (ケース3)
- ・研究者志向が強い。研究者になれず に挫折するケースも。特に、文、理の学生。
- ↓
- (対応案)
- 低学年段階でのキャリア教育の重要性
特に、1~2年生向け

1-5 学生相談の現状と課題

- ・総体的に言えること
 - 1) 勉強はできるが、人間付き合いが下手
(携帯電話の普及等によりコミュニケーションがうまく取れない)
 - 2) 無理・無茶をしてしまう(結果を求める)学生が多い
- ↓
- (対応案)
- 持続可能なペースを保てる工夫が必要
例えば、1~2年生は科目制限を設けるとともに、少人数教育の時間の増等
 - 「課外活動の進め」の意見もあり。

2-1 障害のある学生への支援

- ・教育推進部から、「身体障害学生支援室」を紹介
→ 存在を知らない者が約3割
- ・身体に障害があるなどの理由により、修学上の様々な悩みや相談に対応
- ・所属部局とも連携しながら、ノートテイクや必要物品の貸し出し、支援学生や教職員との交流の場を提供
- ・約30人の障害のある学生に、2人の職員が対応
- ・体制の強化やハード面の体制強化が必要

2-2 障害のある学生への支援

○発達障害について

- ・広汎性発達障害
発達に歪みがあり、通常はしない特異な行動がみられる。
- ・精神遅滞
発達に遅れがあり、スキルの習得に時間がかかる。
- ・学習障害、注意欠陥／多動性障害
発達に偏りがあり、特定の分野において困難がみられる。

2-3 障害のある学生への支援

○今後の検討の必要性

- ・発達障害のある学生をどのように見つけ出し、支援していくか。
- ・「身体障害学生支援室」というネーミングが発達障害のある学生の来室を阻害していないか。
- ・「発達障害学生支援センター」(仮称)の設置を検討する必要あり(青木センター長)
※相談窓口の多様化を図りつつ、連携して支援

3-1 キャリアサポートの現状と課題

・企業の求める人材

学力ではなく、広い能力、仕事への意欲及び人間性



うまく自分を表現できない学生、面接に弱い学生(教員推薦でも落ちてしまう学生)の急増

・相談件数は、

H16年度 301件→H20年度 1,232件に増加

3-2 キャリアサポートの現状と課題

本学学生は、

- ・超安定志向
中堅企業は恥ずかしい、親が納得しない、中堅企業は負け組等
- ・正解追求型
模範解答があるはず、人より早く正解に到達したい、必勝法を求める等
- ・依存度の高さ
親への依存、逆にみれば親の干渉度が高い
→ 保護者向け就職説明会？

3-3 キャリアサポートの現状と課題

今後の課題

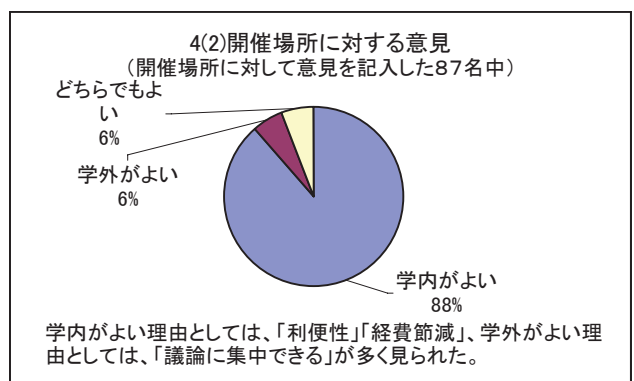
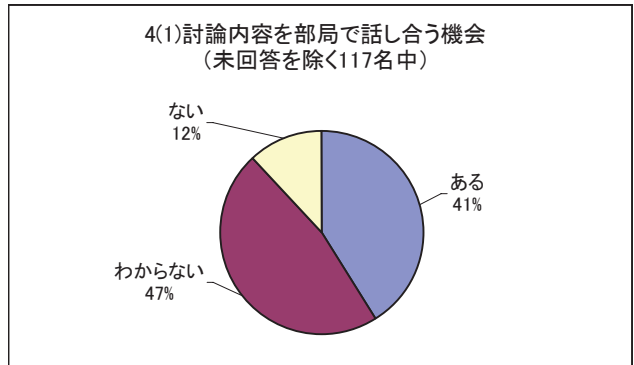
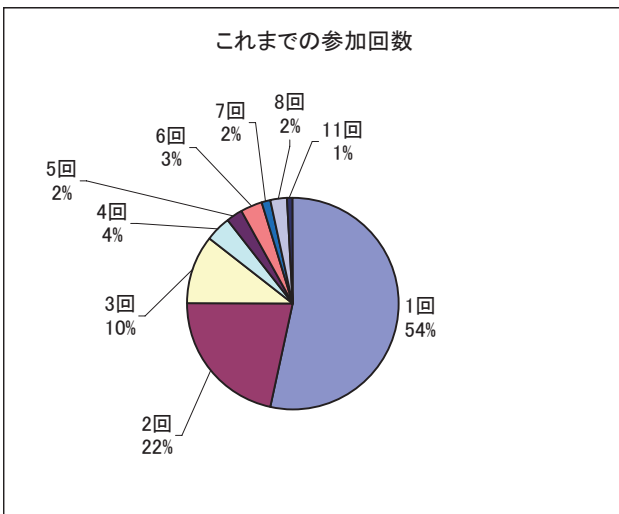
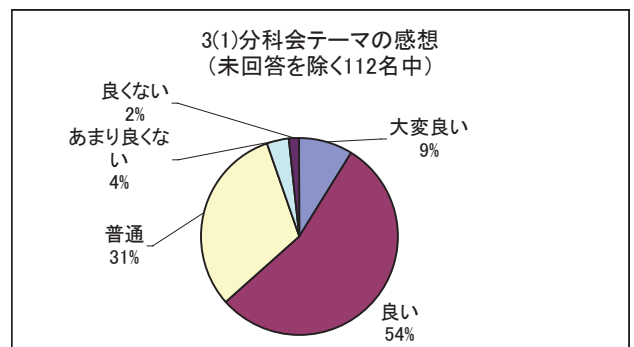
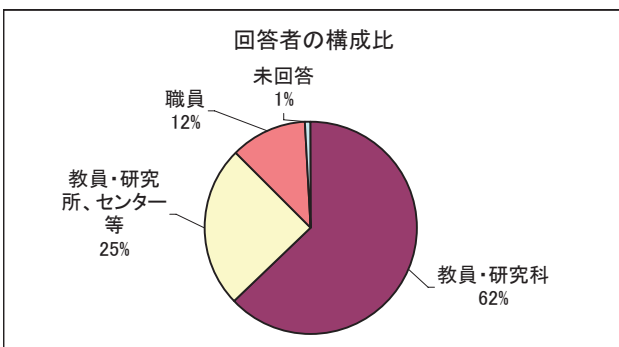
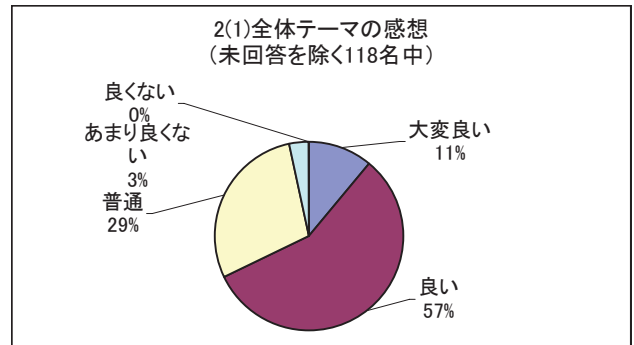
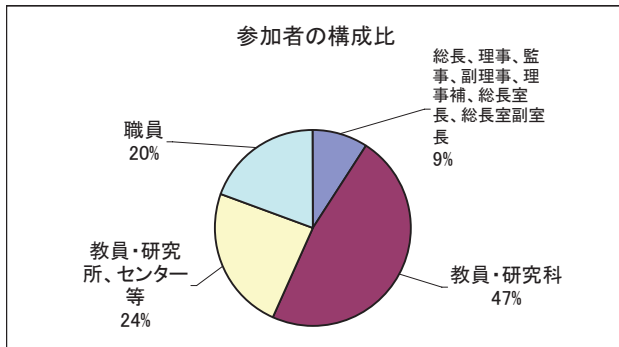
- ・これまでの就職意識の乏しい学生へのサポートから、PDを含めた多様なキャリア設計のサポートへの転換が必要
- ・教員との連携と協力
- ・関係他部局との役割分担
- ・専門性の高い職員の養成
- ・企業、研究施設等との連携強化 (了)

8. アンケート結果について

今後の改善に資するため、参加者全員にアンケート(内容は次ページ参照)を実施した。

○ 参加人数 235名

○ アンケート回答数 121名(スタッフを除くアンケート対象者220名、回収率55.0%)



平成 21 (2009) 年度京都大学全学教育シンポジウムに関するアンケート

今後のシンポジウムの在り方を検討するために、例年アンケート調査を行っております。忌憚のないご意見・ご感想をお聞かせ願いたく、ご協力方よろしくお願いたします。

なお、ご提出は、会場出口の回収箱にお入れいただくか、後日、教育推進部共通教育推進課（内線：9346、FAX：6691）あてにご送付願います。（勝手ながら、集計作業の都合上、10/5 までにお願いたします。）

選択式の回答の場合には、該当部分の に をつけて下さい。

- 教員（研究科所属）
- 教員（研究所・センター所属）
- 職員

1. このシンポジウムへの参加は何回目ですか。（これまでに今回を含め、13 回開催されています。）

_____ 回目

2. 全体会議（1 日目の総長基調講演、問題提起、2 日目のパネルディスカッション）についてお尋ねします。

(1) 今回の全体テーマ（学士課程教育を再考する－第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて－）についてどう思われますか。

- 大変良い 良い 普通 あまり良くない 良くない

(2) 全体会議についての感想をお聞かせ下さい。

[_____]

3. 分科会についてお尋ねします。一分科会に参加できなかった場合は 4 に進んで下さい。

(1) 今回の 6 つのテーマ設定についてどう思われますか。

- 大変良い 良い 普通 あまり良くない 良くない

(2) どの分科会に参加されましたか。

- 第 1 分科会 第 2 分科会 第 3 分科会 第 4 分科会
- 第 5 分科会 第 6 分科会

(3) 参加された分科会についての感想をお聞かせ下さい。

[_____]

4. シンポジウム全体についてお尋ねします。

(1) 今回の討論内容をあなたの部局で話合う機会がありますか。

- ある わからない ない

「ある」と答えられた方にお尋ねします。それほどのような機会ですか。

[_____]

(2) 今回は学内で開催いたしました。開催時期、会場等について、ご意見をお聞かせ下さい。

[_____]

(3) シンポジウムについて、ご自由にご意見をお願いたします。

また、今後このようなシンポジウムを開催する場に取り上げるべき討議テーマについてもご提案があればお書き下さい。

[_____]

ご協力ありがとうございました。

裏面に続く

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
1	かなり散漫。議論としてはもっと絞り込むべき。	1	参加者の水準にはらつきがあり、情報の多寡に差があり、参加意欲も異なる。	2		学内のほうが参加しやすい。	基礎的な参加要件をそろえるべきで、部局からの選択基準が明確になっていない。
2	後ろのほうに座って居眠りしている参加者が多い。こんなことで、授業のあり方を論じたリ、学生に対してえらそうなお話ができるのか？	1	問題点が明らかになったのはよいが、「自学自習は大学のモットーなのに、みんなあまりやりませぬねえ」という話で終わったような気がする。物足りない。	1	教務委員会	学内開催でよいと思うが、学外で実施すると気分が昂揚していい議論ができるような気がする。学内でやるなら1日で終われないか？	
3		1		3			
4		1		1	専攻内の委員会 (教育・企画・入試 etc.) ・専攻会議	適切と考える。	・産業界との戦略的連携 ・京(都市)の文化と復興 ・国際化と戦略的發展 ・脱・グローバルバリエーション
5	とても参考になりました。	1	はじめに結論ありきの強引な議論運びに違和感をおぼえた。「アメリカではこうです(だからこうしなさい)」という押しつけがひどい。	2		毎回学内がよい。	入試の直前はやめてください。(9/28-29がASAFASの入試で今後は非常に忙しいのです。)
6	総長と西村先生のお話はよくまとまっていて、インパクトもありました。総長のお話では、「学問とは何か」、西村先生のお話では、「真大における初年次教育」が、とくに興味深く思われました。	1	分科会では教員だけの視点からの議論が多いようでした。シラバスの改善(標準化)、単位の実質化は学生の視点、卒業生の視点、社会(企業、自治体、地域社会等)の視点も踏まえた議論が必要だと思えました。そのためには、アンケート調査を継続していくことが不可欠であると思えました。センター等で取り組んで頂けると幸いです。改善・実質化の成果に関するデータも視覚的な形で揃えておく必要があると思えました。	1	FD委員会を中心にして 良いと思います。淡路島の開催だとスケジュールの関係で出席できませんでした。		討議されたテーマが経年的にどのように具体化され、どのような成果を生み出したかを具体的なデータに基づいて、継続的に議論するよう工夫が必要だと思えます。毎年、重要なテーマについてかなり突っ込んだ議論が行われていますが、シンポジウムの時だけの議論で終わることが多いようです。貴重な時間と学内資源を割いて開催されるシンポジウムですから、具体的な成果を後に残すような取り組みが必要だと思います。その意味で、溝上眞一先生のプレゼンテーションは大変興味深い問題提起を含んだ内容でした。引き続きこうした実態分析を行っていただき、それに基づいて、本学において真に求められる取り組みを進めていく必要性を痛感しました。
7		1		1	教務委員会	今回の方式でよい	本学の方針としての「意思決定」に何らかの「権限」のようなものがあるといい。サロンの「意見や心情を述べるだけの会議」はむなし。
8	真剣な議論があった。	1	率直な意見交換がよかった。	2		良いと思う。	外国人学生の宿舎問題。
9		1	勉強になった。他学部の状況を理解できた。	3		学内で行うべき。	
10	大変勉強になりました。	1	色々な意見が出され興味深かった。	2		学内開催が参加しやすく、無理が少なく、良い。会場が分散していたのは改善の余地あり。	
11		1	議論が散乱してなかなか前に進んでいかなかった。	2		学内での開催は参加しやすくよいと思う。	
12		1		2			

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
13		1		2		学内でやる方がよい。	
14	文科省・中教審の考え方とそれに対する京都大学のスタンスに分けて講演を設定してほしかった。後者ばかりが勝っていたように思う。総花的である。	1	議論に学生が不在。単位制度を実質化(講義を15コマ行うなど)によりどの程度単位が実質化するのか?単位の実質化を言うのが大学院へ進学する中で、学部と大学院という一連の流れの中で学士課程を位置づける必要がある。単位をよい成績で揃えることに学習の目標があるのではなく、「自学自習」により自ら学を高める能力を培うことこそ学士課程の目指すところではないか。中教審の考え方では、大学の高等学校化が進む。	2		利便性の点からも学内開催がよい。	FDに関するテーマ。発達障害、精神障害を持つ学生の教育、ケアに関するテーマ。
15		1	いろんな学部の教員の考え方の違いや、種々のテーマがわかってよかった。	1	関係する委員会において、また、専攻会議において	参加者の往復時間の浪費、交通費、会場費等の諸費をなくす意味で学内開催すべき。	学生生活の分科会では、課外活動についての検討もすべき。
16	京大の状況を理解でき、参加する価値はあると思う。	1	他の研究科の状況を知ることができ、有意義であった。	2			
17	大事な議論だと思います。もう少し「学士課程教育」としての議論がなされた方がよかったかもしれません。	1	面倒な検討課題で現場が変わるにはまだまだ議論と準備が必要だと思いますが、この場での議論はかなり良かったと思います。	1			全学共通科目ではキャップ制を敷いてしっかりと自学自習をさせる大学での学修に移行させるべきだと思います。単位にふりまわされて、いろいろなものが落ちていように見えます。
18	パネルディスカッションの時間が短いと感じました。	1		1	センターの課題に関連しているの随時。		
19		1	項目が多すぎて深い討論を行うには時間が足りなかった。	1	今回の出席は、学部教務委員を主体として出席いただいているので、今後、教務委員会の話題についていく予定。	場所は良いのですが、SW明けの時期は少々つきついでです。	
20	本シンポジウムは2日間にわたっているが、実質1日間で、充分議論するには短いように思いました。例えば、1日目の午前10時から「基調講演」と「問題提起」、午後から翌日の午前中までは「分科会」そして2日目の午後には分科会での議論を踏まえた「パネルディスカッション」というようにすればよいのではなにかと思います。	1	参加して参考にはなりませんでしたが、論点が多すぎて、いずれの課題も充分議論ができず、今後の方向性を見い出すことができなかつたように思います。(分科会での時間が短かつたのかも知れません。)	2		参加しやすいので、今後も平日に学内で開催していただければと思います。	
21	議論が拡散がちで、目的がよくわからなかった。	2	個別のプレゼンは興味深かったが、討論がまとまりなく、論点が明確でなかった。	2		10月のほうがよい。	

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
22		2	授業負担は公平にすべき	2		淡路島よりずっとよい。	高校までにもっと勉強すべきことを国に働きかける。
23	<ul style="list-style-type: none"> 「大学は学生のためにある」という意識が殆ど感じられない。 「教育とはこうあるべきだ」という議論が多かったが、基本は学生個別で対応が変わるべきものだと思う。 	2	<ul style="list-style-type: none"> 着任したばかりなので、現状を理解するに留まった。 全体の流れがまとまっておらず、何かを決めようという意志は感じられなかった。 	1	教授懇談会のような機会で紹介したいと思う。	京大の理念はよくわかりました。100年前の理念が通用する学生もいるので(おそらく10%)、現状をかえる必要はない。しかし、残り90%の学生に対しては支援する必要がある。トップクラスの学生に対する京大の理念は守るべきだが、それを全ての学生に適用するのは、時代錯誤の感をぬぐえない。外部の大学から着任したばかりで、京大の雰囲気をよく知らないのですが、多くの教員は教育に対して甘えていると思う。「京大らしくないのでやらない。」「などという議論がパナレディスカンションでもあったが、全くナンセンス。50年前の京大の栄光にすがりついているだけじゃないか。このままでは京大は一地方大学になるだろう。	
24	問題点は整理できた。	2	全体像がつかみにくく、focusがぼやけていた。Discussionの時間が少なかった。	1	教授会	問題なし。学内のほうがよい。	
25	特に目新しい内容はなかった。	2	エネルギー科学研究科 八尾健研究科長の意見がすべてであると思う。「学生が学習する動機を作るのが本筋」	3		今後も学内での開催が時間的にも経費的にも好ましい。	
26		2	歴史的経緯を知ることができ、勉強になったが、長く議論されているテーマであり、初めて出席した者には発言は難しいと感じた。	1	専攻の教員会議にて報告します。		分科会、パナレディスカンションともにプレゼンテーションに時間が割かれすぎており、ディスカッションの時間が少なすぎると感じました。
27	2日目の各分科会の報告が、それぞれの内容を把握できて良かった。	2	全学共通科目がどのような経緯で制度化されたかについて、またその実施責任部局・協力部局という概念についても初めて知った。堀先生からあったトリストイによるメタファーは、授業を作る教員側、それを受ける学生側にも当てはまると思い、印象的だった。	1	学生側の意見を聞く時がある。(雑談)	開催時期、会場ともに適当。淡路まで遠出すべきではない。	「単位の実質化」の「実質化」とは一体なんであるか最後までわからなかった。
28		2	講演の時間が多く、十分な議論ができなかった。	1	部局・専攻の教務委員会	9月初旬までに開催してほしい。	教養教育と理系基礎教育は分離して議論すべきであると思う。どちらの議論も中途半端になってしまう。
29		2		3			
30	論点を絞るべき。	2		2			
31		2	議論の時間が少なくて不満が残った。	2		学内でよいと思う。	単位制度についての議論、改革
32	西村理事の話は、問題点を明確に指摘した良い講演であった。	2	free discussionにより多くの時間を割くようにしては如何。	1	教授会等で報告し、それをもとに専攻段階で議論。	学内の開催でよいと思う。	テーマ以外の提案として、各部局の教務担当の職員にも積極的な参加を呼びかけてみては。また別のideaとして、院生、学生(含卒業生)を交えた討論会の企画。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
33	講演者の準備不足	2	問題設定の整理ができていなかった。途中で参加者から議題の整理の提案があったが、同会者がうまく取り上げられなかった。いずれにしても、初年時、教養教育を人環の人たちだけに負わせてはいけない。	2	他の半日に研究及び指導ができるため良い。	場所はこれでよい。時間はもう少し余裕を持たせてもよいのではないかと？	<ul style="list-style-type: none"> ・本学の「共通教育」(教養/専門基礎)の教育体制を早急に整備すべきである。1、2年の教育の「成果」を学部教育が受け入れられているので、その評価は学部教育がよく分かっている。したがって、初年時と学部教育を担っているものが集って、全体の教育を考える場を持ちその会議に権限を持たせるのが良い。 ・学生のレベルが二分化している、あるいは「スペクトル」が下のほうに伸びているという状況を踏まえた教育体制の構築。 ・人員増
34		2		1	理学部教授会		
35	初めて参加しましたが、先生方の教育に対する熱意を感じ、非常に励みになりました。	2	全学共通についての分科会でしたが、本題を議論するには時間が短いように感じました。	2		時期は良いと思います。細部まで議論するのであれば学外の方がよいと思います。	
36	総長の思いはわかるが、他大学出身の教員が増えた中で、コミュニティの核として大学が存在可能かは不明。	2	討論内容の今までの経緯がわからないため参加しにくい。現在までのサマリーを配布してほしい。	3		学内の方がよい。	任期制や他大学出身者の増加にて、検討する基盤がまちまち。現在までの経緯についてサマリー等が欲しい。
37		2	問題点が十分に掘りおこされず、また対策について議論されなかった。進行の進め方に問題があったのでは。	3		スケジュールに合わせるため話が中断されたり、省略されることが多く、時間配分がたりなかったように感えるため、次回は余裕のある時間設定にしてほしい。	
38		2		2			
39	教育の現状、教育に対する京大の目的・目標を理解することができた。	2	去年と同様にこの分科会に参加させていたいただきましたが、根本的な意見が交換されず残念であった。	2		淡路島で行うよりは今回は今更だともよかったです。	分科会のあり方ですが、もう少しある程度煮詰めから分科会で発表していただきたい。あまりにも広範囲で、常に意見だけで、これ以上時間をかけなければ答えが出てこないのではないか。
40		2	全学共通科目についての問題提起はいつも同じよう結局掘り下げ不足になる。そろそろ全学シンポのテーマから外して具体的な施策を適当なWGで議論したほうが良い。	2		特に時期・会場の希望はない。	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の質の問題 ・教育の評価の問題 ・教育に対するincentiveの必要性
41	総長講演、問題提起については、全員が問題を共有することができ、よかったですと思う。	2	もう少しディスカッションの時間をとった方がいいのではないかと。	1	教育制度委員会(部局内)で話し合う機会を作ればと考えている。	学内でよい。	パネルディスカッションについて、パネルの意見だけでなく、フロアからの意見をもっと聞けるような時間配分が必要。教養部を廃止したことが大きな間違いだったと思う。教育に責任を持つ部局は必要。全部局が責任をもつということは理想だが、現実にはどの部局も責任をもたないことにつながる危険がある。このあたりを討議テーマにしてはどうだろうか。
42		2	論点が湧きそうになった所で、時間切れになった感じがする。	2			今回のテーマに関連した事柄で、昨年度までのシンポジウムにおいて既に提案されたこと、検討課題になったものもあると思われるので、そのような点についてはシンポジウムの冒頭で、簡単なまとめがあっても良かった。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
43	個別問題はかなり見えてきているが、根本的なところ(教養、人間形成、21世紀を生き抜く力)が未だにつめられ、共有されていない。	2	何をどこまで議論するかがよく見えないまま、時間切れになり、残念だった。				
44	教育について再認識するための起点をつくるという意図は感じられた。結論(解決策)を出すには、さらに議論する必要があることもよくわかった。	2	設定された時間内で、おおよその現状と問題を再認識することではできたものの、さらに議論を進める段階までには至らなかった。	1	月例の会議で今回の報告をすることにしている。	移動の時間と費用をセーブできた点において合理的であったと思います。	
45		2		2			
46	新たな教育課題(分科会3, 4, 5)についての報告は、積極的な提言が多く、大変参考になった。	2	研究所・センターや独立研究科における全共への具体的な取組組みが理解できた。一方、現在の全共での問題点が掴みにくかった。教養科目や内容の総合調整・決定組織がどこにあるのか、明確でない印象を受けた。	1	教員会議での報告。学生・教育委員会(部局)での議論	時期は適当。会場も適当と考えられるが、参加者がこれまでに比べ若干少ないように思う。	学部教育(教養、専門基礎)のあり方について、全学的な議論が必要と思う。また、関連して大学院教育についても学部教育との連携のあり方が課題と考える。
47		2	問題点の抽出はある程度できたが、解決策への道はきわめて遠い印象。	1	部局の教授懇談会	学内に賛成	研究所・センターによる大学院教育、研究所・センターの独立研究
48	形だけになっている気がする。時間の制約を厳守しすぎて、議論が始まらないうちに終わっている気がする。	2	理科系の基礎教育は整備がしやすいと思われ、文科系の教員の連携、運営意識が低すぎる。また、被害者意識が強過ぎる。以前から議論されているテーマに対して論学教育をどうするかというテーマに対して論学教育が混乱している。この分科会の上の組織(学長直轄)での対策を講じるべき。総人設立のときの経緯がどうだったかは不必要。1. 基礎教育科目(物理、化学など)と教養科目の区別 2. 総人、人環のミッションと「京都大学」の全学教育「をどうするか」ということの区別 結局、京都大学として全学教育、学士教育をどうしたいのかをデザインする組織が必要と感ずる。	1	所員会議(ポストドク以上のスタッフに参加)	このスタイルがよい。ただし、議論する時間が少なすぎる。	私は帝大卒、京大院(博士)卒、私大教員(2校)を経て京大に赴任してきたが、京大でも他校と同じように学生の教育をどうするか、考えなければいけない現実にも少々驚いた。私自身は全学共通科目の担当をしているが、私の所属するセンターは所謂大学院教育の担当で、学部教育へ参加するルート(機会)がない。研究のミッションも高く設定されており、このような教育の啓蒙を受けることは、私自身は良い刺激になるが、少々戸惑いも感じる。ポランティア的に参加するのは良いが、教育が義務となるとニュアンスも変わる気がする。
49	分科会での議論のためのイントロダクションとして、総長、西村理事、山本機構長の講演を伺いましたが、とくに西村理事が、本学の教育に対する取組に関わる問題点をよく描いておられ、有意義でした。(但し、そのあとの対応が各分科会にどれほど及んだかは?ですが)	2	掲げられた二つのテーマについて、課題認識や問題点の把握の程度に差が大きかったようで、発言者は限られたように思えました。したが、相互の情報交換の場として有意義であったのではないのでしょうか?しかし、肝心の論点については、掘り下げられたとは言いがたいように思っています。	1	所員会議(研究所)の目標・計画などを議論する場では必ずと言ってよいほど教育への関与の問題が論じられます。主に教授レベルでのワーキンググループなどで設けて議論することも少なくありません。	学内開催でいいと思います。時期については9月のこの頃は学会等と重なるケースが多いので別の時期にと言いたいところですが、学期中などでは落ち着いた議論も難しいように思えますので、止むを得ないようには思われます。	シンポジウムに期待される成果は多様だと思います。参加者相互の情報交換や認識強化という点では、それなりの成果は得られていくように思われます。しかし、問題に対してその分析を経るための施策の提案に結び付けようとするなら、それなりの取り組みが、例えは同系統の問題を論じた分科会に出席することがある一などの条件をつけて、分科会の構成を考えると手もありません。分科会、集中議論のたのめな一歩進んだ分科会等々。テーマごとの横並びではなく階層的な構成もありそうです。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
50	総長のお考えはよくわかりましたが、もう少し、これまでの議論を整理して各分科会の課題と分科会間の関連について言及があったのもよかったのではないかと思います。	2	研究所/センターの取組事例を興味深く拝聴いたしました。その上で、全学共通科目の「システムJ(統合性のある設計)」について、高等教育研究開発推進機構からの「たたき台」を示していただいたことが良かったです。結局のところ、問題の所在は共通の認識となったとしても、次に進む議論にはならなかったのではないかと、という印象です。	1	スタッフミーティングで報告する予定で、スタッフミーティングは全教員が参加する会合です。	①全体として理系(理学研究科、工学研究科etc.)を中心とした議論でした。これはおそらく学部教育改革への取り組みの意図と努力の差を示すものでしょう。文系の場合、現在の制度ではなかなか議論が進まないように思います。京大の「伝統」からは外れますが、ある程度top downのインシアティブも必要ではないかと感じました。 ②研究所・センターの全学共通科目への参加は必要ですが、研究所/センターの研究をそのまま持ち込むだけで、科目数は増え、本来の意味での選択の幅は広がらないのではないのでしょうか?全学共通科目の性格をいっしょに分離した上で、部局を超えた発想で「必要かつ面白い」授業を厳選することも必要だと思います。 ③初年度の一歩はじめに「自分を世界史の現在に位置づける」ための学際的な授業が必要ではないでしょうか、各論の前に。	
51		2					
52	パネルディスカッションは、報告が長く、討議が少なかつた。また、焦点がぼけていたように思う。	2	プレゼンテーションが多く、課題についての討議が少なくて残念だった。	2	学内開催であったため、途中退席等もあり集中できなかったのではないかと。特に2日目の集まりが悪かつたように思う。	京大大学としてどういう学生を育てるかということをもっと掘り下げて議論していただきたい。	
53	研究科の努力は伝わってくるが、全学的な取り組みはorganizeされていない印象。西村理事は思いいつきの発言が多く(考えはおおいだろうが)、かえって議論が深まらない。	3	部分的に突っ込んだ議論があり、刺激になったが、単にフロアからの発言を促すのではなく、いくつかのトピックに絞り、順次議論すべき。				
54	時間設定、調整に難あり。	3	理事が刺激的?な話をされたのがよかった。	2	学内で良い。		事前に各分科会の目あてを公表すべきである。内容がわからないうまま分科会を選ぶのは適切ではない。専門用語(FD単位の実質化、初年次教育etc.)が説明なしに使われている。「非専門家」にも参加しやすくするために用語集のようなものの準備があるとうれしかった。
55	とても参考になった。	3	優れた先行事例を知ることができて有益だった。	1	学内開催で良かった。		
56		3	いろいろな意見が表明され、活発であったが、煮詰められるには時間が不足。	2	開催時期はこの9月以外はないのでは、今回学内開催であったので参加しやすかつた。	いろいろな問題があつてシンポジウムが開催されるのであるが、問題点、その程度についての認識が参加者によって大いに異なるように思える。学生についてのデータが必要である。	
57		3		2			
58	事前に資料(開催要項だけでなく)を配付しておかれると理解度は高まると思います。	3	分科会のテーマ・内容について事前に配布しておいたら良いと思います。	2	学外者も参加できる「シンポジウム」も企画されてはいいかと思うか。		
59	特になし	3	意見を集約しようという空気が感じられ良かった。	3		シンポジウムの事前に、各部局で意見集約しておくことを求めることが重要ではないかと思う。	

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
60	初日：概念的な話は必要なく、各分科会で討論テーマとなった課題について何が、どういう観点から問題を何を検討すべきか、前もって調査、調整しておくことが望まれる。 2日目：各分科会の報告も概観であり、より集約した内容が必要。	3	30名程度の参加者で適切な議論ができたと思う。(参加者が多いと議論にならない。)分科会の議論時間をもっと取って意見の集約を行うところまでできるようにすべきである。	1	大学院GPや学部GPの委員会があり、その場で報告することができる。	多額の経費をかけて淡路島で開催する意味なし。学内施設で行うとともに、宿泊舎等と同様な効果を上げるべきである。淡路島へ行く旅行時間、夜の討論時間などを会議へ取り入れ、議論をより充実させるべきである。	<ul style="list-style-type: none"> ・全学でシンポをして議論すべき中心課題は、初年次教育・共通教育 ・学生支援・障害者支援・留学生支援のあり方 専門教育は部局マターでよい。
61	西村理事と山本機構長の個人のお考えをもっと聞きたかった。時間に追われての発言には力がないと感じた。	3	有意義な意見交換だったと思う。	1	随時フリートークとして	学内での開催は良かったと思う。(学内に十分施設があるのだから。)	教員の改革(とくに学生のことを思っている教員自身の改革)について、真剣に話し合う。その心の持ち方がどうしたら変われるか。これまで挙げられたテーマをすべて学生の改革でなく、教員の心の改革からみる視点で議論を行うことが欠落してきた(さけてきた?)感があります。学生をこの会議によぶのもいいことだと思います。学生運は思っています。何故いつも大学の改善は先生達だけで話合うの?と。自分達の意見もきく大学を良くするのみに充分寄与すると思うよと。コミュニケーションが大切といながら、それがいい。
62	勉強になった。いろいろ考えるきっかけになった。ただし、自分の参加は議論にまるで役立たなかった。	3	なるほどと思う意見が多かった。熱心な先生が多い。	1	教員の会議	これでよい。	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の実態をややニーズをいかに把握するか ・全学共通科目などのコーディネートをいかにするか ・という2点が重要な課題かなと思いました。
63	短い時間で議論するには、問題点がボヤけすぎている。理事を含め、首脳陣が本学をどういった方向へ導きたいのか、明確なビジョンを出すべき。学部が強くて何もできませんという悩みを吐露されただけ。	3	・学生が学びたいことへの配慮が不足した感が否めない。 ・unlearningの重要性を共有しつつも、放任との区別ができておらず、現在の学生気質とのあいだにギャップもある。	1	教員会議で報告後、有志で勉強会を開催する。	適切。学内で参加しやすかった。もつと時間を多く取り、人数とテーマのバランスをとってほしい。(人数に応じてテーマを増やすなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者数はそのままに、少人数での議論を増やす。(分科会を増やす。初年次A,Bなど重複も) ・若手教員がもっと参加できるように ・学生のことがわからないのであれば、一部学生と協同する分科会があってもよいのでは? ・高校の教員、企業の人事など、キャリアパスを時間軸方向につなげる研修も必要では?
64	分科会の発表はよかったが、フロアとの意見交換が偏っていた。	3	事例の内容など、事前の準備がよく、参考になった。	2		会場は学外にした方が、日常から離れて議論に集中できるし、他部局の人との意見交換の環境づくりのためにもよい。	授業の評価、教員評価の方法と考え方。
65	プレゼンテーションはどれも内容が濃く、特に2日目の朝は学生の今の学習生活実態がうかがいあがって大変よかった。討論の時間が足りないで、消化不良になるのが難点。	3	前向きで建設的な提案がでており、良かった。	3		佐詰のとき比べ、教育だけについて議論を続ける雰囲気ではなかったが、十分議論できる時間はとれたと思うので、時計台でよかったのではないかな。	久しぶりにFD(SDも含む)を正面から取上げてはどうか。何をどういう方法で扱うと学生の学びが深まるのか。このシンポジウムは結論を出さないことを前提にしてきたが、今年は方向性を求めているように思われた。最後にこれをどう生かすつもりか(教育制度委員会に引き継ぐ等)議論をはじめめる前に周知しておくよかったですと思う。
66	執行部/開催責任者としての準備(内容)について、より充実したものがあったのもよいのではないかな。	4	初めて聞く話ばかりでもしろかった。しかし、このような話は断片的な知識をえることだけでよいのか、という疑問も残った。	2		学内がよいと思います。	西村理事の議論はわかりにくい。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
67	これまでと比べて参加者が少ない。(とくに2日目)でも会場は京大でよい。	4	熱心な議論があった。時間が足らない。もう少しテーマを絞ってもよかった。	2		これでよい。	基礎科目の教育。
68	パネルディスカッションでは、各分科会のコーディネーターはもつと要点を絞って「まとめ」を話す訓練をしないと、何が重要な結論だったのが焦点がぼやけてしまう。	4	現状分析による問題点の抽出と対策の考案について話し合われたが、「対策」が「要求」にかたよりすぎていると感じた。	1	部局におけるFD委員会	今回の通りでよい。	「教員の能力(知)、技能アツプを考える—教員力の過去・現在・未来」をテーマにしてはどうか?または、「IT化は、研究と教育の現場に効率化をもたらしたか?」を討論してはどうか?
69		4	非常に参考になりました。	1	学科会議	学内の方が好都合です。	
70	基調講演、問題提起は内容がない、全学的な討論を喚起するには、問題点の掘り下げが十分ではない。	4	事前準備が不十分であり、事例報告に時間を取りすぎて議論の時間が十分に確保されていない。多くの人を集める意義が全くない。	1	様々な場で、研究と教育は不可分で、常に議論されているのがあるべき姿だと思うが。	学内で良い。	学長、理事の話の内容がとんでもない。このような意識では、三番手—京大は真大に代わって日本のトップに立てるか?」このテーマであれば、様々な智恵が出てくると思う。
71		4		2		学内開催がよい。	
72	理念に関する説明が長すぎる。	4	情報量が多く、非常に有用だった。	1	国際交流委員会、教務委員会、学科教授会など	学外の方がよい。議論に集中できる。	教育の国際化について、今後も継続的に取上げてほしい。
73	"学士課程教育を再考する"ための問題提起という観点は不十分でした。	4	内容はさておき、運営がまずい。8人の演者が時間を無視してしゃべっただけで、質疑応答はほとんどなかった。出席者がかかえている問題意識や意見をもちとほりおこせたいのではないか?教育の国際化とは途上国と交流することか?との印象しかのこらない内容でした。	2			
74	全体で話し合うべきテーマとそうでないものが混在している。	4	内容はある程度興味深いものではあったが、一方的な報告だけの時間だけで、ほとんど議論ができていなかった。大学の講義と同じ問題で、受動的な合点で終わったのが残念だった。分科会構成の再考してほしい。もつと部外者にもオープンに意見交換の場が必要。一部教員の発表の場の印象。	2		学内に参加しやすくしてよいと考えます。	・大学の教員の立場で、学士教育について論じるのはかなり困難である。大学院教育(修士、博士)と学士教育について論じる場は分けてはどうかと思う。時間を費やして参加する意味が見い出せない。改善を希望したいと思います。一般の参加者にも発表できる、双方向の会にしてほしい。学生の「対話」の重要性を強調しながら、教員のシンポジウムで「対話」がないのはおかしいのでは?
75	総長の話はやや抽象的なものの、興味深かった。あとの2人は、(時間配分のせいとか?)ポイントがもひとつつかめなかった。	4	個々の発表はそれぞれ興味深かったが、全体討論の時間がなく、全体像の把握や今後の方向性の議論の不完全感に問題を感じた。時間管理を徹底すべきでは?	1	専攻の教員会議など。	今回、外部で泊まりこみなら参加できなかつた。今後このような方式がよい。ただし、今の時期は学会も多くなり避けるべき。	・自学自習できる一部のトップクラスの学生に焦点を絞るのか。それができる多くの学生のサポートを考えるのか。どっちつかずのあいまいな議論が多くあったように思う。前者のみに集中するならともかく、後者も考慮するなら、その方策(サポート)も議論すべき。(田村先生から発言がありました。ありがとうございます。終わりました。) ・理系の人間からいうと、時間管理せず講演者が言いたい放題、他は聞いただけといったやり方には不満が残る。講演会ではなく、全体討論を主にした「シンポジウム」にするには、時間でペルをならすなど、管理が不可欠。次回はずいぶんうすうすしてほしい。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
76		4		2		学内が好ましいのではないでしようか。	特になし。
77	パネルディスカッションはもう少し話題を絞ったほうが良かった。	4	取組の事例はよいが、大学のサポートが不明。	1	研究科内のFD	学内が便利でよい。	学生とどのように対話するか。
78	多くの課題を知ることができ有意義だった。議論にもう少し時間を割けるとよかったです。	4	話題提供の数が時間に比して多いと感じました。個々の内容は充実していました。	2		初回なので比べられませんが、今回の方法に特に問題は感じませんでした。	
79	予想できる範囲内での議論にとどまったのは残念。	4	いろいろなる活動を開けておもしろかった。	2		参加しやすくよかったです。議論を深めるには、学外会場の方がよいかもしいれない。	
80	京都大学の教育の部分部分はよくわかるが、教育の全体像は一体だれがgovernanceしているのか？不明に感じた。Managementの問題である。また、本シンポに学生側の意見に対する配慮がない。	4	メニューが多すぎて、全ての発表(内容は面白かった)が未消化で終わった。これもManagementの問題である。	2		父や学生、市民も参加できる機会(例えば大学祭など)に開催した方がよい。	基本的に京都大学の目ざす、教育する人材像の確立以外には考えられない。具体化された人材像に必要なら「教育」を精鋭化して、現場で徹底させることが必要である。「入試科目」「教育」「キャリア形成」と一貫したものであり、役員をはじめとするManagementする立場の方々はこの全体像を共有する必要がある。
81		4		3			
82	各分科会での内容がサマライズされたのはよかった。	4	多くの話題提供があり、時間が押し気味だったが、幅広く現状と課題がわかり、勉強になった。	1	日常的(プロジェクトをすすめるにあたり、会合を持つ機会が多くあるため)	子どもが小さい為、学内開催はありがたいです。	
83	総長の考え方や、執行部の考え方が一通り判ってよかったです。	4	種々の国際化教育の学内動向が把握できて、大変有意義であった。ただし、日本人京大生をいかに育てるか、国際化させるかという具体的な手立て(底上げの手段、カリキュラム)についての議論がなかった。また、時間切れで、京大のミッション(教育ミッション)との連結の議論ができなかった。	1	部局(防災研)内の研究・教育委員会。	多数の参加者を確保する観点からは学内がより便利である。	部局からの参加人数を制限せず超過を認めてほしい。(ニーズはあると恐ろしい) ・大学院連携の教育(人材育成)システム ・プロジェクト型教育のねらいと展望。GOOE.GP.Global80
84		4	動きの早い教育国際化に関して、的確な現状報告と情報提供がなされ、参考になりました。	1	センター内の情報交換会議で報告。	学外で行う意義は極めて小さいと考えます。	
85	盛り込み過ぎ。(話し合うべき課題が山積している実情は認めるにしても)	4	内容は充実していた。	1	「国際教育」の実施部局である。	連休明けに2日間を使う今年のケースは例外的かもしれないが、他の仕事と重なってしまう教員も多いのではないかと。学内開催は歓迎。	
86		4		1	教員会議等で	開催時期→9月第1週目あたりにしていただきたい。	分科会は、3、4つくらいよいのではないかと。(6つは多い)

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
87	ふだん学部教育課題について知る機会がなかったため、よい勉強になった。	4	総合討論時間がなかったのが残念。	1	協議員会	学内開催が望ましい。	大学院生のキャリアパス。
88		4	話題提供のみで時間切れとなった。意見交換が可能となる時間設定または延長を望む。	1	全教員が出席する 拡大教授会	学内の方がよい。移動時間が減る。	
89	初めての参加でしたが、教育について考え直すよい機会でした。	4	KUINEPや国際交流科目等の特別プログラムの話題が中心だったが、それらを履修しないその他多くの日本学生への英語教育についても議論があればよかったと思います。	3		会場は近くよかったです。ある程度、非日常的な場を設定したほうが日頃の研究や雑事から離れて、教育について改めて考えなおす頭の切り替えがしやすかったです。くれません。	日本人学生教員も含まれるかもしれませんがの英語の問題を根本的に問い直すこと。
90		4	京都大学のいろいろな取組を知ることができて良かったが、討論する時間が全くなかったのは残念だったように思う。	2		学内開催では自由度が高すぎるため、出入りが激しいように感じた。全プログラムを必ず参加することをと強く要請されたらいかがでしょうか。	今年はノーツでの周知がなく、職員への参加がとて少なかつたように感じた。締切の後で「参加したかったのに」どの声も聞いたので、広く募集したら良いのではないかと感じた。
91		4	事例発表者が多く、ディスカッションの時間がとれなかったことが残念であった。各発表者からは問題提起された内容はいずれも短期間で解決が必要な課題であることは共通認識となったと思われる。	2		時期:もう1〜2週間早い方が良いか? 会場:学内がbetter(プログラム全ては無理でも、分科会等一部のみの参加が可能であるため。)	総務部、財務部、施設部職員の参加者が少ないことが理解できない。
92	たくさん課題や対策案が聞けた一方で、焦点が絞れなかった。	5	高校「情報」未履修の問題があること、それが及ぼす影響、各学部の情報教育へのニーズなどが理解できた。	1	認証機構による評価の前夜。		
93	総長基調講演は分かりやすくすばらしかったです。全体として時間をオーバーしたことが少々残念です。	5	もう少し参加者に発言をさせてほしいかつたです。数人のグループになって話合ううなもできたのではないかと思います。	2		4月の授業が始まる前だと参加した教員の教育へのモチベーションはあがるのではないのでしょうか。	2日目は失望しました。目的は分野間の議論を行うというつもりでしたが、一人一人の分野の話が長くて、十分にその目的を達せなかったに思えます。フロアにいる側としては、何のために今日ここに来たのかという気にさせられました。途中で同会の先生は「10分」とおっしゃいます。守られませんが、守られませんでした。こういうのを守れない我々教員が、こうしようと決めたことを守るのでしようか? 大学でどのような取り組みが行われているかというのはいくわがかりました。教育を考えると、いい機会になりました。
94	強制的にでも参加を促し、参加人数を増加させた方がよい。例えば3年に1回は参加しなくてはならないとか。	5	参加できて良かった。第1には昨今の現状について知る機会がなく、教育についての議論に参加できた。比較的少人数であるために発言しやすかった。	3		学内開催は良いと思う。また開催時期も良いと思う。	・高校での教育現場の勉強会 ・海外の大学の状況の紹介
95		5		2		今回初めての参加であったので、前回のと比較ではないが、適切であると思う。	

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わかない 3:ない	機会		
96	テーマと内容との関連が見えにくかったように思います。	5	人数が少なため発言機会が多くとれよかったです。	1	随時(設定すればいいかも)	今回のスタイルでよいと思います。	・意見の吸い上げ方。発言は複数同時にはできないので、side channelとして、書くことで意見を提出できる場(アンケートも一つを用意するとよいのではないか。プレイングのツイートのイメージで会場でメッセージを随時流せるとよいかもしれない。
97	ポイントが明確でよかった。	5	問題提起は明確だが、全学レベルで解決するには時間がかかるように思った。	1	教授会	学内の方が良いです。(参加しやすいので。)	
98	着任したばかりで京大での教育(特に全学共通教育)の全体像を知ることがなかった。なので、それをある程度把握するという意義があった。(特に2日目の各分科会のまとめ)	5	・附属図書館所属の私にとつては、第5分科会への参加がベストだったと思う。附属図書館だけでなく、各学部の図書館としていかに情報教育を提供できるかを考えるためのヒントを頂けたと思う。 ・学内、学外(高校段階、東大)での情報教育の現状、課題を知るところでも意義があった。分科会の最後に喜多先生からコメントがあった。「教育・研究に必要な様々なソフトウェア(統計処理など)は各部署でバラバラな購入、契約ではなく、キャンパス共通のライセンスで契約できないかという点はぜひ全学的に検討して頂きたい。	1	附属図書館の定例会議で、また、図書館職員との話し合いで。(特に全学共通科目「情報探索入門」の今後の在り方を考える上で)	個人的な事情では、図書館での業務を並行して進める上では学内開催のほうがありがたい。しかし、密度の濃い議論や教員同士の交流を深める上では、合宿形式の方がよい気がする。遠隔地の研究所、センター等の見学を組み合わせ、その近隣で開催(舞鶴、白浜、犬山など)という手もあるかもしれない。開催時期は今回とおろ(9月末)でよい。	・私は今年1月より京大に着任したが、所属機関(附属図書館)では、今回のシンポジウムに関する公式な告知や参加受付の連絡は一切なかった。新任の教員にとつて全学教育や関連行事にどのように参加できるか、スムーズな連絡を望む。(これは附属図書館と教育推進部の双方にお願いすべき点だが...) ・また教育経験の少ない私にとつては、今回のシンポジウムはあまり扱われなかったが、具体的な教授法や授業設計の話(ワークショップ)も非常に有益だと感じる。その意味では3月に実施している「高等教育フォーラム」などと、このシンポジウムとの有機的な連携ができないだろうか。 ・初日の西村理事ご発表にある通り、結局は入試の段階でどのような学生を選ぼうかという点を考える必要があるだろう。その点に絞ってシンポジウム等の企画があればよい。特に文科省の担当者招いて、入試やそれ以前の学校教育につなげる対策的議論にまで至らしめることが必要だろう。
99	最近の学生の学力に対して漠然と持っていた印象が系統的に理解でき、問題の所在がある程度自分にとって明らかになったのは取替だった。	5	「情報教育」が「手段」であるのか、「目的」であるのかの明確な結論が出ていないように見受けられるが、最小限の要望としても、研究インフラとしての扱い方(コンプライアンス等含めて)は大学院を含めた、全学的な体系的な教育システムが必要と感じた。	2		今回が初回のため、比較しようがない。	
100	問題提起としては良いが、実際の教育の改善への道筋が見えない。	5	研究所・センターからの出席者が多く、当事者性に欠けていた。	2		特にありません。	シンポジウムには何度か出席しました。教員間の交流促進には良いかも知れませんが、それ以上得るものがないと感じております。
101	研究所、センターは学部教育へのかかわりが相対的に小さいので今回のテーマのみでは若干とつきにくい面がある。	5	情報教育の位置づけの難しさを感じた。	2			
102	全学共通教育についての現状を確認するよい機会となった。	5	大学における情報教育の重要性が理解できた。	3			科学教育のあり方と実装について

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
103		5	問題の設定がクリアであった。解決策は困難な課題が多いが。	2		学内で良いと思う。多数の参加を。	さらなる国際交流。産学交流について。
104	2日目は有意義だった。1日目はもう一つ。	6	学習支援・学生相談、キャリアサポートの現状と課題について、現場で直接仕事に当たっている方々(専門員、カウンセラー、メンター、長など)の話が聞けて、非常に有益だった。	2		今回は時計台会館で開催したので、参加が非常に楽だった。淡路島に泊するのはたいへんな負担になるので(個人的にも、財政的にも)今後も廃止するよう強く要望する。	
105	総長の教育理念が聞けたのは良かった。大学が地域や家庭に代わる真軸には、普通に考えればやはり得ないと思うが、もう少し詳しく聞ければ理解できたのかも知れない。	6	話題提供2「キャリアサポート・・・」でも、話題提供3「学生相談・・・」でも京大生の抱える問題として共通して取上げられたのは、そのプライトの高さと理解した。プライトを備わけても、早期に余計なプライトを捨てさせる方が必要だと感じた。 事務職員が多く出席されていたのはいいが、その発言で分かったことは、学生部や教育推進部の職員が身体障害相談室やキャリアサポートセンターの活動を熟知していないこと。これにはある種の衝撃をおぼえた。構造的な問題で至急改善すべきだと思う。	1	教育会議	時期、会場とも可	
106	時間の制約が厳しく、止むを得ないことではあるが、一方通行(講演を聞くだけ)に終わり、「会議」とは呼べない。フロアには発言の機会がほとんどなかった。時間配分が不適切であった。	6	特化されたテーマ(学習支援)であったため、具体的に参考になる内容が多かった。有益であった。	2			
107		6		1	教授会	学内が良い	課外活動に関して。
108		6	大変勉強になりました。	2		学内開催でいいと思います。	
109	勉強になった	6	大変勉強になった。各センターの皆様の苦勞が理解できたが、休学にいたる可能性のある者や発達異常者を入試段階でみきわめることで御苦勞の軽減につながるものかと思った。	1	学生の指導方針、問題点等について話し合う際。	学内が良いと思う。	
110	テーマがぼくぜんとしていよう、あまりよくわからなかった。	6	第6分科会は学生との関係において有用な情報を多く得ることができた。よい分科会テーマであったと思う。	2		時期についてはいいか特に意見はない。会場は学内でよかったと思う。今後も学内開催を希望する。	特に全体会議については、資料配付を充実して、かわりに時間を短くしてほしい。卒業生の追跡調査をちゃんとしてほしいか。内容を伝えるべきではないか。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
111	大変興味深かったです。京大の教育が今までに変わりがつある、大きな「節目」を迎えていることを実感しました。今後毎年1回でなく、いろいろなところで「教育」について議論する場が多く設けられていくことを願います。	6	もっと教員の方が参加され、つっこんだ議論ができればよかったです。	2			職員をもっと教育にまきこんでいくべきだと思います。(教務系だけの問題では決まてないはずなので)
112	勉強になりました。	6	重要なテーマであるが、本シンポジウムで他の分科会と平行して実施するものとしてはなれない。	2	会場は学内で良い。連休の間は避けた方が良い。		
113		6		2	学内なので参加しやすくて良い。		
114				2			
115	わかりやすく、現在の課題が良くわかったが、問題提起に終わった感がある。Follow upをどうするかが必要だと思う。			2	学内になった事で参加しやすくなった。		
116	パネルディスカッションのテーマが設定されていないため議論が萎散しがちである。			2	9月の上旬～中旬		
117	全体の問題がつかめめる点が良いが、時間が長いと思います。発言者が限られている気がしました。			2	学内が良い。参加しやすいので。		<ul style="list-style-type: none"> 国際交流についてはですが、個人的にスタンフォードセンターとの交流があり、「関西スタンフォードクラブ」(スタンフォード大の卒業生で関西在住の集まり)の世話人をしています。 4～5年前にスタンフォード学生と京大生(英会話サークル)との交流をうながし、Language Exchange(1時間英語で話し、1時間日本語で話すことで互いの語学力upを目指すもの)をsuggestしたことがあります。 スタンフォードセンターの学生を6週間研究室や会社に受け入れられるという「インターンシップ」受け入れをしてほしいというスタンフォードからの希望があります。
118	大学での教育をまじめに考えるいいチャンス、時間。			1	教授会での報告の際。	学内で行うのは大変良い。時期も適切。	就活の早期化(3回生の秋)が大学のカリキュラムや大学院進学率の上昇へどのような影響を持つか、その良い面と悪い面を整理。
119	色んな議論を聞くことができ、新鮮に感じた。日頃、疑問に思っていることなども認識できたと思う。			2		学内の方が参加しやすい。	
120	時間が短すぎた。			3		今回が良い。	
121	総長、理事の考え、問題提起が聞けて良かったです。			3		来年以降もこの時期に学内で開催いただけると、全体会議のみ自由に参加できてうれしいです。	

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
122	学内の様々な考え方に接するという意味では有意義であったが、今後どのように京都大学が動いていくのかについての見通しは得られなかった。	2	報告された内容についてはよかったが、より全学的に意見を集めることが必要だと思う。	2		学内でこの時期がよい。	全学教育に対する各部局のニーズは、大変多様であると思う。全体主義的にならないよう、また、数の上で少数派の部局に対する配慮をお願いしたい。
123		6	かなり特化され、限定されたセンターや相談室の現状と要望のような報告会となり、議論には至らなかった。こういうことを知らなければいけないという現状はわかるので、個人的にはいい機会だったが、参加型のシンポジウムとしては、少々疑問に感じた。大きなテーマとしてはよかったが、その内容が偏りすぎていたと思われる。(小テーマ3つ)	2		開催時期は問題ない。会場も問題ないが、宿泊型でなく自分、参加者の気持ちが入り込んでいないと思われた。(いつでも職場に使える、タイミンが合わなければ参加しない、待機がかかっているetc)ただ、宿泊型でない分、女性に参加しやすくなるのではという期待もある。	シンポジウムに参加する形の自由度は高まったが、じっくり検討するという雰囲気は薄まったように思われました。宿泊型の場合は、分科会で話しきれなかったことや、課題提供者に懇親会時に話すことができたが、今回は、懇親会参加者が半分以上に達していたので、後の盛り上がりに向け、翌日の意気込みにも合わせたように思い、少し残念に思いました。
124	ある程度ホトネで話合えたのではないか。	2	こちらが聞かせてほしい。	1	教室単位	当然のことが、やっと実現された。	文系学部は、1,2回生の教育をどうしているのか？又は、どの程度真剣に考えているのか？

9. 参加者名簿

部局名	職名	氏名	分科会
総長	総長	松本 紘	指定なし
理事	理事	塩田 浩平	4
理事	理事	江崎 信芳	2
理事	理事	大西 珠枝	3
理事	理事	大西 有三	5
理事	理事	西村 周三	3
理事	理事	藤井 信孝	3
理事	理事	吉川 潔	4
監事	監事	平井 紀夫	2
副理事	高等教育研究開発推進機構長	山本 行男	3
副理事	国際交流推進機構長	森 純一	4
副理事	図書館機構長	藤井 謙治	1
副理事	産官学連携本部長	牧野 圭祐	4
副理事	副理事(桂キャンパス担当)	大高 幸一郎	2
副理事	副理事(平治・遠隔キャンパス担当)	川井 秀一	2
理事補	理事補	藤井 秀樹	1
理事補	理事補	淡路 敏之	2
理事補	理事補	南川 高志	4
理事補	理事補	田村 武	4
理事補	理事補	伏木 亨	3
総長室	室長	小寺 秀俊	2
総長室	副室長	里見 朋香	3
文学研究科	教授	伊藤 公雄	4
文学研究科	教授	杉本 淑彦	2
文学研究科	教授	田口 紀子	3
文学研究科	准教授	金光 桂子	3
文学研究科	准教授	谷川 穰	6
文学研究科	准教授	平川 佳世	4
教育学研究科	教授	山田 洋子	4
教育学研究科	准教授	佐藤 卓己	3
教育学研究科	専門職員	西本 幸江	6
教育学研究科	専門職員	片山 正	6
法学研究科	教授(研究科長)	林 信夫	2
法学研究科	教授	洲崎 博史	1
法学研究科	教授	寺田 浩明	3
法学研究科	准教授	深澤 龍一郎	6
経済学研究科	教授	塩地 洋	2
経済学研究科	教授	武石 彰	4
理学研究科	教授(研究科長)	吉川 研一	2
理学研究科	教授	今井 憲一	1
理学研究科	教授	加藤 信一	3
理学研究科	教授	国広 悌二	2
理学研究科	教授	河野 明	6
理学研究科	教授	國府 寛司	2
理学研究科	教授	鈴木 俊法	1
理学研究科	教授	田村 実	1
理学研究科	教授	平田 岳史	2
理学研究科	教授	嶺重 慎	4
理学研究科	教授	八尾 誠	2
理学研究科	准教授	中川 尚史	6
理学研究科	准教授	船山 典子	2
理学研究科	准教授	依光 英樹	4
医学研究科	教授	荒井 秀典	2
医学研究科	教授	精山 明敏	4
医学研究科	教授	平出 敦	3
医学研究科	准教授	縣 保年	6
医学研究科	准教授	伊吹 謙太郎	2
医学研究科	准教授	大森 崇	5
医学研究科	准教授	角谷 寛	4
医学研究科	准教授	木原 雅子	4
医学研究科	准教授	里村 一成	2
医学研究科	准教授	谷口 善仁	1
医学研究科	准教授	鶴山 竜昭	3
医学研究科	准教授	原田 浩二	4
医学研究科	准教授	本田 育美	2
医学研究科	講師	前田 祐子	2

部局名	職名	氏名	分科会
医学研究科	助手	原田 美穂子	3
薬学研究科	教授	掛谷 秀昭	4
薬学研究科	准教授	久米 利明	1
工学研究科	教授	伊藤 紳三郎	3
工学研究科	教授	大江 浩一	3
工学研究科	教授	川崎 雅史	1
工学研究科	教授	小森 悟	2
工学研究科	教授	酒井 明	2
工学研究科	教授	田中 一義	2
工学研究科	教授	田畑 修	4
工学研究科	教授	榎津 家久	4
工学研究科	教授	平尾 一之	4
工学研究科	教授	鉢井 修一	1
工学研究科	教授	米田 裕	4
工学研究科	准教授	岩井 裕	4
工学研究科	准教授	越後 信哉	4
工学研究科	准教授	後藤 康仁	2
工学研究科	准教授	小森 雅晴	1
工学研究科	准教授	谷口 貴志	5
工学研究科	准教授	松尾 哲司	3
工学研究科	講師	大村 智通	2
工学研究科	助教	秋吉 優史	5
農学研究科	教授(研究科長)	遠藤 隆	4
農学研究科	教授	天野 洋	4
農学研究科	教授	井上 國世	4
農学研究科	教授	木村 恒久	3
農学研究科	教授	栗山 浩一	4
農学研究科	教授	土井 元章	1
農学研究科	教授	縄田 栄治	4
農学研究科	教授	福井 清一	4
農学研究科	教授	宮川 恒	1
農学研究科	准教授	浅見 淳之	2
農学研究科	准教授	宇波 耕一	2
農学研究科	准教授	吉田 天士	3
農学研究科	助教	池田 俊太郎	2
農学研究科	助教	村田 功二	5
農学研究科	教育・研究協力課長	荒木 憲次	1
農学研究科	専門員	岩井 信孝	1
農学研究科	第二教務掛長	沖田 義孝	2
人間・環境学研究科	教授(研究科長)	堀 智孝	2
人間・環境学研究科	教授	小方 登	2
人間・環境学研究科	教授	川島 昭夫	2
人間・環境学研究科	教授	田村 類	2
人間・環境学研究科	教授	西井 正弘	3
人間・環境学研究科	教授	廣野 由美子	6
人間・環境学研究科	教授	三室 守	4
人間・環境学研究科	准教授	木下 俊哉	2
人間・環境学研究科	准教授	日置 尋久	5
エネルギー科学研究科	教授(研究科長)	八尾 健	2
エネルギー科学研究科	教授	石原 慶一	4
エネルギー科学研究科	教授	宅田 裕彦	1
エネルギー科学研究科	教授	前川 孝	3
アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	片岡 樹	1
アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	藤倉 達郎	4
アジア・アフリカ地域研究研究科	助教	丸山 淳子	2
情報学研究科	教授(研究科長)	中村 佳正	2
情報学研究科	教授	岩井 敏洋	1
情報学研究科	教授	佐藤 享	6
情報学研究科	教授	田中 克己	5
情報学研究科	教授	吉川 正俊	4
情報学研究科	主任	宇野 純子	5
情報学研究科	主任	中村 義行	4
生命科学研究科	教授	竹安 邦夫	4
生命科学研究科	准教授	神戸 大朋	1
生命科学研究科	准教授	酒巻 和弘	2
生命科学研究科	事務長	菊田 認	1

部局名	職名	氏名	分科会
生命科学研究所	専門職員	今西 恭子	
生命科学研究所	主任	荒谷 裕美	6
地球環境学堂	教授	加藤 真	1
地球環境学堂	教授	舟川 晋也	4
地球環境学堂	助教	水野 啓	4
地球環境学堂	准教授	吉野 章	6
地球環境学堂	主任	廣瀬 泰子	4
公共政策連携研究部（公共政策大学院）	教授	北村 雅史	
公共政策連携研究部（公共政策大学院）	准教授	菊谷 達弥	3
経営管理研究部（経営管理大学院）	教授	原 良憲	5
経営管理研究部（経営管理大学院）	教授	日置 弘一郎	1
経営管理研究部（経営管理大学院）	准教授	前川 佳一	5
化学研究所	教授	佐藤 直樹	2
化学研究所	教授	中村 正治	2
化学研究所	教授	渡辺 宏	5
化学研究所	助教	則末 和宏	2
人文科学研究所	教授	籠谷 直人	4
再生医学研究所	准教授	加藤 功一	4
エネルギー理工学研究所	教授（所長）	尾形 幸生	4
エネルギー理工学研究所	准教授	佐川 尚	2
生存圏研究所	教授	今村 祐嗣	4
生存圏研究所	教授	矢野 浩之	4
防災研究所	教授	寶 馨	4
防災研究所	准教授	大見 士朗	5
基礎物理学研究所	准教授	井澤 健一	5
ウイルス研究所	教授	五十嵐 樹彦	1
経済研究所	教授	小佐野 広	5
経済研究所	准教授	奥井 亮	6
数理解析研究所	教授	向井 茂	2
数理解析研究所	事務長	戸倉 照雄	
原子炉実験所	准教授	三澤 毅	4
原子炉実験所	准教授	谷口 秋洋	2
置長類研究所	准教授	半谷 吾郎	4
東南アジア研究所	教授	柴山 守	5
学術情報メディアセンター	教授	喜多 一	5
放射線生物研究センター	助教	石合 正道	2
生態学センター	教授	山内 淳	5
地域研究統合情報センター	教授	押川 文子	2
こころの未来研究センター	教授	カール・ベッカー	3
こころの未来研究センター	教授	鎌田 東二	2
野生動物研究センター	准教授	杉浦 秀樹	3
放射性同位元素総合センター	助教	角山 雄一	2
環境保全センター	教授	酒井 伸一	4
低温物質科学研究センター	准教授	佐藤 智	2
国際交流センター	教授	長山 浩章	4
国際交流センター	教授	森 眞理子	4
国際交流センター	准教授	青谷 正妥	4
国際交流センター	准教授	冢本 太郎	4
国際交流センター	准教授	河合 淳子	4
国際交流センター	准教授	河上 志貴子	4
国際交流センター	特定助教	韓 立友	4
高等教育研究開発推進センター	教授（センター長）	田中 每実	指定なし
高等教育研究開発推進センター	教授	大塚 雄作	1
高等教育研究開発推進センター	教授	小田 伸午	3
高等教育研究開発推進センター	教授	小山田 耕二	5
高等教育研究開発推進センター	教授	田地野 彰	3
高等教育研究開発推進センター	教授	松下 佳代	3
高等教育研究開発推進センター	教授	吉田 純	2
高等教育研究開発推進センター	准教授	及川 恵	
高等教育研究開発推進センター	准教授	桂山 康司	3
高等教育研究開発推進センター	准教授	田口 真奈	4
高等教育研究開発推進センター	准教授	田中 真介	2
高等教育研究開発推進センター	准教授	溝上 慎一	1
高等教育研究開発推進センター	助教	酒井 博之	

部局名	職名	氏名	分科会
総合博物館	准教授	塩瀬 隆之	3
産官学連携センター	教授	松坂 修二	5
フィールド科学教育研究センター	教授	山下 洋	2
フィールド科学教育研究センター	准教授	田川 正朋	
カウセンシングセンター	教授	青木 健次	6
大学文書館	准教授	西山 伸	2
学生部	部長	富田 靖博	6
学生部	学生課長	水野 晴央	6
学生部	専門職員	坂本 珠代	6
学生部	事務職員	光村 厚生	6
学生部	事務職員	森田 将也	6
教育推進部	部長	中崎 明	6
教育推進部教務企画課	課長	藤咲 仁一	指定なし
教育推進部教務企画課	専門員	清水 克哉	6
教育推進部共通教育推進課	課長	山本 淳司	1
教育推進部共通教育推進課	専門員	藤井 芳克	6
国際部留学生課	課長	佐藤 稔晃	4
企画部	部長	黒川 文朗	6
企画部	主任	中野 秋子	4
企画部	主任	山下 武史	1
企画部	一般職員	高島 彩香	2
企画部	一般職員	野田 智子	6
学生センター	センター長	畑 勝	6
キャリアサポートセンター	センター長	鱈 淳一	6

第1分科会 : 26名
第2分科会 : 53名
第3分科会 : 28名
第4分科会 : 54名
第5分科会 : 19名
第6分科会 : 25名
指定無し : 3名
9/25のみ : 12名
スタッフ : 15名

合計 235名

(参考)

部局・役職別参加者数

部局等名	役員等	教授	准教授	講師	助教 助手	特定助教	その他(事 務職員、 技術職員)	合計
総長	1							1
理事・副学長	7							7
監事	1							1
高等教育研究開発推進機構		1						1
産官学連携本部							1	1
総長室		2						2
文学研究科		5	3					8
教育学研究科		1	1				2	4
法学研究科		3	1					4
経済学研究科		3						3
理学研究科		12	3					2
医学研究科		3	10	1	1			15
薬学研究科		1	1					2
工学研究科		13	6	1	1			21
農学研究科		10	3		2		3	18
人間・環境学研究科		7	2					9
エネルギー科学研究科		4						4
アジア・アフリカ地域研究研究科			2		1			3
情報学研究科		5					2	7
生命科学研究科		1	2				3	6
地球環境学		2	1		1		1	5
公共政策連携研究部		1	1					2
経営管理研究部		2	1					3
化学研究所		3			1			4
人文科学研究所		1						1
再生医科学研究所			1					1
エネルギー理工学研究所		1	1					2
生存圏研究所		3						3
防災研究所		1	1					2
基礎物理学研究所			1					1
ウイルス研究所		1						1
経済研究所		1	1					2
数理解析研究所		1					1	2
原子炉実験所			2					2
霊長類研究所			1					1
東南アジア研究所		1						1
学術情報メディアセンター		1						1
放射線生物研究センター					1			1
生態学研究センター		1						1
地域研究統合情報センター		1						1
放射性同位元素総合センター					1			1
環境保全センター		1						1
国際交流センター		3	4			1		8
高等教育研究開発推進センター		7	5		1			13
総合博物館			1					1
産官学連携センター		1						1
低温物質科学研究センター			1					1
フィールド科学教育研究センター		1	1					2
こころの未来研究センター		2						2
野生動物研究センター			1					1
カウンセリングセンター		1						1
大学文書館			1					1
学生部							5	5
国際部							1	1
企画部							5	5
学生センター							1	1
キャリアサポートセンター							1	1
教育推進部							20	20
合計	9	108	59	2	10	1	46	235



第 13 回京都大学全学教育シンポジウム
学士課程教育を再考する
—第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて—
報告書

平成 22 年 3 月発行

編集・発行 京都大学教育推進部共通教育推進課

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-6513
